鴉の魔術師

テイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鴉の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ１７２４Ｎ

【作者名】
テイク

【あらすじ】
世界に七つの魔眼があった。
神の如き天使の瞳《ミカエルの瞳》
堕ちた天使の悪魔の瞳《ルシフェルの瞳》
神の言葉の天使の瞳《カブリエルの瞳》

神の癒しの天使の瞳《ラファエルの瞳》

神の知識を知る天使の瞳《ラジエルの瞳》

神の命を下す天使の瞳《サリエルの瞳》

神の天を司りし天使の瞳《ウリエルの瞳》

七つの魔眼は強大な力を持っていた。中でも神の如き天使の瞳《ミカエルの瞳》と堕ちた天使の悪魔の瞳《ルシフェルの瞳》は全ての魔眼の中で最強を誇っていた。

七つの魔眼は絶えず世界を転生し七人の人間に宿っていた。そのものたちは魔眼により世界を手に入れることも出来る力を持っていたのだ。

しかし、いつの頃かその力を狙う者達が現れた。しかし、そのものたちは七つの魔眼により壊滅に追い込まれた。

それから１０００年の時が経ち魔眼が世界を１０度回った頃。一人の赤子が生まれる。鴉と悪魔に魅入られた子供。レイヴン・ナイトロード。

成長したレイヴンはその宿命のまま魔眼をめぐる戦いへと巻き込まれていく。

そして世界に黒い影がかかり始める。

プロローグ（前書き）

この作品は伝説の勇者の伝説に感化されて書き始めたオリジナル小説です。

微妙かかなりかは伝説の勇者の伝説本編を呼んだことがないのでわかりませんが似たようなところがあるかもしれませんがオリジナルです。

そのことについての批評は受け付けません。メンタルが弱い作者が死んでしまいます。でもあまりに酷いときは受け付けます。

プロローグ

夜の道に鴉がいた。大量の鴉が街灯の照らす道にいる。鴉の夜会。この場面を見た者はそう称するような光景だ。鴉は古来より悪魔の使いとして畏れ避けられてきた。この光景はまさに悪魔の夜会とも言える。

そんな鴉達の中心に何かが置いてある。鴉はまるでその何かを守っているようだった。

その何かはバスケットの中で毛布にくるまれた赤子だった。生後間もない赤子だ。悪魔の色の黒の髪をした赤子。さながら悪魔の子だ。

そこにひとりの神父が通りかかった。この付近で孤児院を運営している神父だ。

「これは一体？」

神父は鴉の群れを怪訝な目で見る。そしてバスケットの中の赤子を見つけた。神父はバスケットに近付いていく。鴉は神父が通る道をあけた。

「捨て子……のようですね。何か身元のわかるものは？」

神父がバスケットを抱き上げて調べるがバスケットの中には赤子の身元がわかるような物は何もない。

「ふむ、まあ、これも神の思し召し。孤児院で引き取りましょう」

神父がそう言った瞬間、鴉達が役目を終えたように飛び上がり闇に消えた。

「名前はどうしましょうか……鴉に悪魔に魅入られた子、夜の道に捨てられた子。レイヴン・ナイトロードとしましょう」

こうしてレイヴン・ナイトロードと名付けられた赤子は孤児院で育てられることになった。

レイヴンは健やかに成長していった。人よりも寝ていることが多いことを除けばいたって普通の子供となんら変わらず。

それから七年の月日が経った日。奇しくもレイヴンが拾われた日。レイヴンの七歳の誕生日とされている日。その日、孤児院は地図上からその姿を消した。

原因は不明。まるで何かに喰われたかのような跡だけが残っていた。

事件当時、その様子を見た牛乳配達人の証言によれば明け方、まだ日の昇る前に孤児院に牛乳を届けに行くと孤児院は炎に包まれていた。助けに走るが炎の中にいた何かの瞳に浮かんだ白い逆五芒星（リバースペンタクル）に睨まれて身がすくみ、その間に孤児院は跡形も無く消え去っていた。

生存者は絶望的かと思われたが奇跡的に一人だけいた。レイヴン・ナイトロードだ。レイヴンに事件のことを聞くが何も言わなかった。

そして次第に事件は人々の記憶から消え去っていき十年の月日が

流れた……。

男の前に巨大な闇が広がっている。七つの影と七つの光が輝いている。しかし、それはとても歪で火完全であった。

「ったく、やってくれたなおい」
『本当にやるのですかマスター』
「ああ」
「待て！！」

金髪碧眼の女が男を止める。

「悪いな。待てと言われて待つ奴はいない」
「やめろ！！　それじゃお前が死ぬぞ！！」
「そうだな。死ぬかもな。でも、それでみんなをいや、お前を守れるならそれでいい……」
「――！！」

男は闇に飛び込んでいった。女の叫ぶ声を聞きながら。このあと男の消息を知る人間は誰一人いない……。

第一話　小隊編成（前書き）

連続投稿です。

第一話　小隊編成

ここは大陸の端にあるアルハザード王国。周りを大国に囲まれた国。気候は穏やかで四季があり海、山、森、平原など全ての地形が揃っているそこそこ豊かな国。そしてここはラビナスリという地方にあるマニリア学院という場所。武術、または魔術に長けた兵士を養成する学院。そこの学長であり教官でもあるライグスの執務室に一人の青年が呼び出されていた。

「シエル・クロード入ります」

「ああ、入れ」

銀の長髪に左目金眼で右目銀眼のオッドアイ、そして腰に剣をさした細身の青年が執務室に入る。シエル・クロード。アルハザードを治めている王セミレリウス・クロードが四男。成績優秀で容姿端麗。同学年からの人望も厚い。マニリア学院武術科の生徒。

「それで用件とは？」

シエルがライグスに呼ばれた理由を聞く。ある程度は予想しているが聞いてみるまではわからない。

「君の予想通りだ。おめでとうこれで君も部隊長だ」

ライグスが数枚の書類を渡す。そこにはシエルの顔写真と経歴が書いてある。そこにははっきりと部隊長と書いてあった。そしてもう一枚の方は部隊編成書。そして部隊長の証の銀バッチ。

小隊とは学園が優秀な生徒を部隊長に任命しその部隊長が隊員を

選抜し作られるもの。他地域の学園との交流試合の時の戦力の中核を成すものだ。いくら個が強くても数には勝てない。英雄すら数の前には無力。そのため数の戦力を鍛えるために小隊が作られる。小隊に任命された者は部隊長以外は入れ替えがある。部隊員と決闘して勝った場合入れ替わるのだ。そのため小隊に入っていない生徒も切磋琢磨修練に励むという目的もある。

「ありがとうございます」
「なに、入学してきたときから俺はお前はやると思っていたよ。さて、詳しい説明はお前にはいらんだろうが一応言っておこう。小隊は自分を含めて最低四人以上だ。期限は一週間後の小隊対校試合まで」
「はい」
「問題はこの隊員を集めることなんだがお前はさほど苦労しそうにないだろうな」
「どうでしょうか？」
「まあ、ここにある生徒名簿だ。持っていけ」
「ありがとうございます」

そう言ってシエルはライグスの執務室を出た。歩きながら名簿を見てめぼしい生徒がいないか探す。一年間学んできて大抵の生徒がどのような人間か知っているシエルであったがこういった資料も捨て置けないのも事実だ。

「しかし、ほとんど僕の評価と変わらないな――ん？」

そこでほとんど白紙のページを見つけた。書かれているのは名前と顔写真と所属科、身体データと出身地、それと入学時の筆記試験の記録のみ。ミスかと思ったが他のページには何も不備はない。しかも、その生徒はシエルが知らない数少ない生徒の一人だった。少

し手間だが戻ってライグスに聞いてみることにした。

「申し訳ありません」

「ん？　どうした。まさかもう部隊員が揃ったのか？　そうだとしたら新記録だな」

「いえ、違います。このレイヴン・ナイトロードのページなのですが」

「ああ、そいつか、それは不備でもなんでもない。そいつはそれであっている」

白紙なことがまるで当たり前のように言うライグス。

「彼はなんなのですか？」

「さっぱりわからん。入学時の魔術科の筆記試験は全科目満点だというのに入学して以来まともに授業に出ていない。あいつが進級できたのが奇跡なくらいだ」

「全教科満点！？」

シエルは驚愕した。このマニリアの入学試験はかなり難しいのだ。シエルですら一教科も満点はとっていない。それを全教科満点をとった生徒がいた。普通なら名前が聞こえてきてもいいはずなのに聞こえてきていなかったことにも驚いていた。

「そうだ。授業に出てなかったから叱るためにここに呼んでこの話をして聞いてみたんだ」

「それでどう答えたんですか？」

「奴め、そのテストは面白かったといいやがった。授業はつまらないから出ないとさ。それに眠いと。まったく天下のマニリア学院の入学試験が面白いとは大物なのかバカなのか。呆れたよ正直」

「はあ」

「まあ、そいつに興味があるなら止めはしないがオススメはしない」
「……わかりました。では、決まったら報告に来ます」
「ああ」

シエルは再びライグスの執務室を出て廊下を歩く。名簿を開きレイヴンのページを見る。

「さて、こいつはあとだな。おそらく小隊になんて興味ないだろうし。先に二人集めておこう」

シエルは教室棟に歩き出した。

・
・
・

どうやら、シエルが部隊長になったことは既に全生徒が知っているようで行く先々でシエルに視線があつまる。それを完全に無視してシエルは食堂で目的の生徒を見つけた。

「少しいいかな？」

その生徒に言う。金髪碧眼の女生徒。どこからどう見ても完璧な美人。座っている席に彼女のものと思われる女の細腕では振ることはおろかもつことも出来ないような大剣が立てかけられている。

「少し待ってくれお茶を飲んでいるところだ」

彼女が飲んでいたのは東方の国のお茶で緑茶というものだ。更にその横にはこれまた東方の漬物と呼ばれるさまざまな食材を食塩、酢、糠味噌、醤油、酒粕、油脂などの漬け込み材料とともに漬け込み、保存性を高めるとともに熟成させ、風味を良くした保存食品が

おかれていた。若者が好むというよりは年寄りが好むチョイスだった。

それを少女が飲んでからシエルの方を向いた。

彼女はシオン・エリアリス。アルハザード王宮に仕える騎士の家系、その長女だ。そう考えれば彼女が大剣を扱えるのもうなずける。見ての通り好物は緑茶と漬物だろう。

「それでなんだ？」
「僕の部隊に入ってくれないか？」
「ああ、お前が噂のシエル・クロードか。王族のおぼっちゃまが良くやるな。だが、まあ、スカウトに来たのだろう？　いいだろう。シオン・エリアリスがお前の部隊に入ってやる」
「助かるよ」
「それで他のメンバーは？」
「目星はついているから今から勧誘しに行くよ」
「そうか、なら、私はここで漬物を食べているから終わったら呼んでくれ」

そう言ってシエルの返事を聞く前に漬物を再び食べ始めた。コリコリと漬物のいい音がする。

「さて、なら、次だ」

シエルは食堂から外にでる。そして人気のない森に入っていった。文字通り誰一人森の中には人がいない。奥まで入ったところで猛スピードで影がシエルを押したおした。

「グッ！！」

そしてその首筋に鋭利なナイフを突き立てる。ナイフを持っていたのは小柄な女生徒だ。まるで燃え尽きたかのようなくすんだ灰色の髪に特徴的な紫の瞳を持つ女生徒。

セリス・ミレイン、それがその女生徒の名前。魔術科で優秀な成績を修めているさらに魔術科では珍しく暗器の扱いにも長けている。暗殺者タイプ。

「……仇」

そのままナイフを突きたてようとする。

「ちょっと待ってくれ」

冷静に言うシエル。自身が殺されかけている状況なのに平然としていた。

「……」

「ようやく会えたね。君を探していたんだけど。ああ、君がついてきてたのは気がついていたよ。だから、この人気のないところに来た」

「……避けれたはず」

「こっちの方が君も話を聞いてくれだろう」

セリスは呆れた。ただただ呆れた。こんなことのために自分の命を懸けるバカをはじめてみた。仇といいつつも呆れた。

「……話ってなに」

「君を僕の部隊に誘いに来た」

押し倒されナイフを首に突きつけられたままシエルは言った。その言葉にセリスは驚きを通り越して呆れた。

「……正気？」

「僕はいたって正気だよ。君があの僕の父が滅ぼしたネミリエルスの王女だとしてもね」

「！？」

「君の目が何よりの証拠さ」

その昔、アルハザードは隣国を侵略した。それがネミリエルス。侵略した理由はネミリエルスの技術力。その戦争はアルハザードの大勝に終わり従わないネミリエルスの王族貴族は皆殺しにされた女子供も全て。こうしてネミリエルスはアルハザードに併合された。そして紫の瞳はネミリエルス王族の証である。当時の資料は全て破棄されているためその事実を知るものはほとんどいない。

「……なら、わかるはず。あなたは関係ないけど。殺す」

「それは困る。僕にも目的があるんだ」

「……目的？」

「ああ、僕はこの国の王になる」

シエルが言ったことは普通に考えれば不可能な話だった。王族とは言えシエルの王位継承権は第四位。自身より上の兄弟を殺さない限りは不可能だ。

「僕はこの国が嫌いなんだ。王は民のことなど考えず圧政に戦争の繰り返し。貴族も同じだだ。民衆には不満がたまってきている」

「……クーデターでも起こす気？」

「そう。そして僕は父を殺し王になってこの国を変える。だから、

死ぬわけにはいかない」

まっすぐにセリスを見つめるシエル。

「……ここでナイフを引けばそれは不可能になる」

「そうだね」

「……怖くないの」

「怖いよ」

「……わかった」

セリスがナイフをおさめて立ち上がる。シエルも立ち上がった。

「……私が憎いのは王族。だけどあなたはどこか違う。だから、それ私も手伝う」

「ありがとう」

「……だけど約束して」

「僕に出来ることなら」

「……幸せな国を作って」

「もちろんそのつもりだよ」

「……ありがとう」

セリスはそのまま立ち去った。

「さて、とりあえずあと一人だ。どこにいるのかな？」

制服についた汚れをはたき再び教室棟に向かう。とりあえず誰かに聞くことにした。近くにいた女生徒に聞く。

「レイヴン・ナイトロードがどこにいるか知らないか？」

「ああ、あのサボリ魔？　ねえ、どこだっけ？」

女生徒が委員長らしき女生徒に聞く。
「ああ、確か裏庭で寝てた」
「だって」
「ありがとう」
そう言って微笑む。
「は、はい」
女生徒は真っ赤になった。そして友人に囲まれる。シエルは気にせず言われた裏庭に行ってみた。
行ってみると木陰で木漏れ日の中で寝ている黒髪の男子生徒を見つけた。写真どおりレイヴン・ナイトロードだ。
「……君、少し起きてくれないか？」
「あ？」
その時ちょうどよくレイヴンが起きた。焦点の合っていない黒い瞳がキョロキョロと周りを見る。そして徐々に焦点があっていく。そしてシエルに気がついた。
「ふあ～、ん？　あんた誰？」
「僕はシエル・クロード」
「ああ、あの新しく部隊長になったとか噂ので俺に何の用？」
「そこまで知ってるなら僕が来た理由がわかると思うけど」
レイヴンは少し考えてから言った。

「やだ」
「君は本当にわかって言ってるんだろうね？」
「どうせ部隊に入れってんだろ？　嫌だね」
「どうしてだい？」
「特に理由はない。面倒だし寝れなくなりそうだし」

シエルはどうやって入れようかと考える。そして、部隊に与えられるものを見て思いついた。

「そうか、残念だ」
「そうそう、他を当たってくれ」
「部隊に入れば部隊室と専用の個室が与えられるというのに」
「なに！」

専用の個室という言葉にレイヴンが反応する。やはりとシエルは思った。寝るのなら自身の部屋で寝ればいい、こんなところに来る必要はないのだが、ほとんどの生徒が相部屋だ。つまり静かに寝てもいられない。そこでシエルは個室と出せば承諾するのではないのかと思ったのだ。

「そうか、やらないのか。なら仕方ないな」
「……ま、まあ、暇だし、どうしてもってんならやってやるよ」
「本当かい」
「ああ」
「そうか、そうか、じゃあ、行こう」
「は？」
「これから、正式登録だ。さあ」
「ちょ！？　聞いてないぞ！！」

そのままレイヴンはシエルに引っ張られたまま、シオン、セリスと合流しライグスの執務室にむかったのだった。

「もう集まったのか！？」

「はい」

四人の顔を見るライグス。

「なるほど……きちんと選んでいるようだな……」

そこでレイヴンを見て黙る。

「まあ、いい。最速タイム更新だ。おめでとう。第十五小隊登録完了だ。これが部隊室の鍵だ。人数は最大七人だからあと三人は入れれるからなあとで入れたら登録しにこい」

「はい」

四人は第十五小隊部隊室と呼ばれる建物へと向かった。

第一話　小隊編成（後書き）

感想・評価お待ちしてます。それが作者の原動力になります。

しかし、批評はその逆です。メンタル弱いんで失踪するかもしれません。

そして、あえて言います。この小説はただやりたいことをやるために作りました。

ので自重はしません。でも、そんなカオスにはしないつもりです。

第二話　自己紹介と実力

部隊室には談話スペースであるエントランスと二階の寝室兼各個人専用部屋七つ、作戦室（ブリーフィングルーム）、それと奥の訓練スペース＋シャワー室からなっている大きな建物だ。エントランスには簡易キッチンがある軽い食事をここでとることが出来る。訓練スペースは防音など充実していて暴れても大丈夫な用に作られている。

「さて、ここが部隊室のようだね」
「ほう、いいところだな」
「……」
「壁と屋根とベットがあればどこでもいい」

とりあえず四人はエントランス中央のテーブルに座る。

「さて、とりあえず自己紹介をしよう。初めて会う人もいると思うからね。まずは僕から、僕はシエル・クロード。武術科二年。一応言っておけば僕は王族だね。でも、あまり気にしないで普通に接してほしい。好きな物は本かな。趣味は読書」

シエルの自己紹介が終わった。

「なら、次は私だな。私はシオン・エリアリス、同じく武術科二年だ。好きなものは緑茶と漬物だ。たくさんあるからお前たちも食え。ちなみにこれは布教用だ。他にも保存用と観賞用と食用もある」

といってビンをとりだすシオン。いったいどこのオタクなのだろうか。

「年寄りみたいだな」

高速で大剣が抜かれレイヴン突きつけられた。髪が一房舞う。

「何か言ったか？」

シオンの顔は笑ってはいるが目はまったく笑ってはいなかった。

「な、何も、何も言ってません！！！」

「そうか、ならいい」

大剣をしまうシオン。どうやらシオンにこの話題は鬼門のようだ。

「……セリス・ミレイン」

セリスの自己紹介はそれだけで終わった。

「次は俺か。レイヴン・ナイトロード。魔術科二年。好きなものは特にない。趣味も特にない」

全員の自己紹介が終わった。

「さて、じゃあ、これから訓練をしようか。みんなの実力を確認しておきたい」

「異論はない」

「……」

「眠いんだが」

一人異論があるみたいだが無視して訓練スペースへ。中はかなり広かった。おそらくこの建物のほとんどがこのスペースに使われて

いるだろう。更衣室で動きやすい服装に着替えて訓練スペースに集まった。

「じゃあ、まずは僕とシオンでやろうか」
「ああ」

刃引きされた訓練用の武器を手に持ったシエルとシオンが訓練スペースの真ん中に立つ。

「勝敗はどちらかが負けを認めるまでいいかな？」
「ああ」
「じゃあ、はじめよう」

二人が互いの得物を構えた。

一瞬の間、後二人は動いた。

姿勢を低くしシエルに接近するシオン。さらにその姿勢のまま大剣を振るう。対するシエルはシオンの動きに合わせて後ろにステップを踏みつつ大剣の軌道に剣を合わせる。

ガキィン！！

鉄のぶつかる音が響いた。剣と大剣が弾かれる。二人はその反動を利用して距離をとる。

「私の初撃を防ぐとはな。やはり部隊長になるだけある」
「ありがとう。君もやるね。大した威力だ。完全に受け流したはずなのに腕が痺れてるよ」

得物を構えなおす二人。

空気を引き裂くような音をさせてシエルが剣を振るった。切っ先は真っ直ぐにシオンの額に向かう。

それをシオンは冷静に頭を少しずらすことで避ける。そのまま懐に入り込もうとするシエルに向かって大剣を振り下ろす。

シエルは体をひねってそれを交わす。すかさずシオンの胸を狙い剣を振るう。

振り下ろした大剣を無理矢理引き戻し胸への斬撃を防ぐシオン。

そしてまた距離をとる。仕切り直し。

互いに一瞬も互いから目を離さない。いや、離せない。互いの実力がほとんど変わらないことははっきりした。では、どこで決着が着くのか。

剣速と技の柔軟さならシエル。剣戟の重さと技の威力ならシオン。だがシエルはシオンの剣を上手く受け流し、シオンはシエルの柔軟な攻めを受け止めている。

まるで舞踏のような舞う二人。それは無骨な戦いを華麗な戦いに変える。打ち合う刃と刃。続く舞踏しかし終わりはやって来る。

「はあ、はあ、はあ、さて、そろそろ終わりにしようか」

「っはあ、はあ、そうだな」

息の荒い二人はそう言い構える。終わりの瞬間がやって来た。

二人が同時に疾駆する。

ザンッ！！

お互いが脇を通り抜けた。剣を振り抜き、大剣を振り抜き。

「……私の負けだ」

シオンが負けを認めた。勝ったのはシエル。

「良い勝負だった。僅差だったよ」

「ふむ、そうだな」

二人は見ているレイヴンとセリスの所に行く。

「……良い試合だった」

「ありがとう。次はセリスとレイヴンでいいかい？」

セリスは頷き訓練スペース中央へ。

「ほら、お前も行け」

「はいはい」

レイヴンも渋々行った。

「ふあ～あ」

盛大に欠伸をするレイヴン。全く緊張感がない。

「……じゃあ、始める」

欠伸しているレイヴンを無視して始めるセリス。

セリスが自身の前に魔法陣を描く。魔法陣には刻印が刻まれている。色は水色。

「凍える氷の雨　アイスレイン！！」

セリスが呪文を唱える。魔法陣から氷の雨が降り注ぐ。

「ん？　うわ～！？」

咄嗟に横に避けるレイヴン。レイヴンの横を死の氷の雨が通り過ぎた。

これが魔術。大ざっぱに言えば魔術とは指先に集めた魔力によって魔法陣を描き対応する呪文を唱えることにより魔術は発動する。

魔法陣の色、形、刻む刻印、呪文により発動する魔術が変わる。その組み合わせはほぼ無限大でオリジナルを作ることも出来る。

魔術戦とは先の読みあいだ。相手が使う魔術を解析し反撃する。一手二手先ではなく十手二十手先を読むのが魔術戦。

「あ、あぶね～」

当たらなかったことに安心するレイヴンにセリスは追撃する。腕を振るい魔法陣を描く。色は緑色。

「……神聖なる風白夜を吹き抜けん　ウィンドスライサ」

風の刃がレイヴンに迫る。レイヴンはそれを紙一重でかわす。全く魔術を使おうとしない。

「……やる気あるの？」

「ない」

ブンッ！！

風がレイヴンを吹き飛ばす。

「でっ！！　痛！！」

セリスは休まずに魔法陣を描く。色は赤。

「煉獄の炎の矢バーニングアロー！！」

紅蓮の炎の矢が放たれる。

「のわ～！！」

炎の矢がレイヴンに直撃し爆発した。黒煙が広がる。黒煙が晴れると煤でボロボロのレイヴンが倒れていた。

「「「……」」」

沈黙。

「おい、アレは本当に大丈夫なのか」

沈黙を破りシオンがシエルに聞く。

「……」

シエルは黙ってレイヴンを凝視している。

「おい！！」

「ん？　ああ、すまない考えごとをしていた」

「それでアイツは戦力になるのか」

「ん～、どうなんだろうな」

「おい、それで大丈夫なのか」

「……」

シエルの目は険しい。

（レイヴンは直撃の瞬間何かしていた。なのにあの結果だ。一体何を考えているんだあいつは）

セリスがレイヴンに近づいていく。

「……寝てフリはやめて」

「……」

レイヴンからは返事がない。

「……下手な芝居はやめるべき」

レイヴンが目を開ける。

「下手な芝居？」
「……あなたは完璧に私の攻撃を防いでいた」
「……」
「……何を考えている」
「何も、そして俺は何もしていない」
「……そう」

セリスはシエルとシオンのところに戻った。レイヴンも立ち上がり戻る。

「大丈夫かいレイヴン？」
「見ての通りだよシエル」
「そうか……とりあえず全員の実力はわかった。今日はこれで解散する。明日から演習場で連携の訓練をやるからよろしく頼むよ。じゃあ、解散」

三人は訓練スペースを出て行った。シエルは一人訓練スペースに残っている。

「これからだ。まだ始まったばかりだ。僕は必ずこの国の王になる」

シエルの呟きを扉の影で聞いていた人影がいた。人影は黙ってそこを離れた。

第三話　連携訓練

翌日、野戦訓練用の演習場にレイヴン達は集まっていた。

「これから訓練を始める。敵は魔導人形、編成は僕たちと同じだ。森の中で隠れている。そいつらを倒すのが今日の訓練だ」

シエルが三人に説明する。レイヴン以外は頷いた。

「では、始めよう」

訓練が開始された。

レイヴン達は木々の裏に隠れて様子を窺っていた。魔導人形は木々の間に2体いた。剣士タイプ。魔術師タイプはどこかで隠れて様子を見ているようだ。

4人は目を合わせシエルとシオンが飛び出した。飛び出したシエルとシオンに合わせて剣士タイプの魔導人形が2人に相対する。

それと同時に炎の矢が飛び出した2人に打ち込まれる。それをセリスが放った氷の槍が相殺する。

シエルは相手の剣を捌きながら周りを探っていた。魔術師タイプの魔導人形を探していた。

シオンは相手の剣を弾く。そして後方に跳ぶ。さっきまでシオンのいた位置に炎の矢が通り過ぎる。

「レイヴンいやボンクラ！！　貴様何をしている！！」
相手の剣を捌きながらシオンが叫ぶ。
「お前言い直して人を貶すなよ！！」
「うるさいお前にちょうどいいあだ名をつけただけだ親愛の証だ」
「明らかに仲良くする気ないなあ！！」
「当たり前だ！！　くっ！」
放たれる魔術をかわしながら剣を受けていくシオン。
「早く援護しろ！」
「と言われても敵が見えないんじゃ対抗魔術を組めるわけないだろ」
魔法陣を描こうとするレイヴン。だが、その動きからはやる気が感じられない。描く速度も遅い。
「この役立たずめ！！」
対してシエルとセリスの動きは淀みない。
「セリス、魔術師の居場所がわかった。ここから四時の方向２００m」
シエルの言葉に即反応し魔法陣を描く。色は水色。
「……突き抜ける氷の槍　アイスランス！！」
氷の槍が指示された方向にある茂みに飛んでいく。茂みから炎の矢が放たれ相殺される。放たれた炎により魔導人形の位置が露わに

なる。

「……見つけた」

魔法陣を描く色は再び水色。

「……閉じ込める氷牢アイスサークル！！」

露わになった魔導人形が氷の円柱に閉じ込められた。そして氷が砕け散った。

「……終わり」

シエルの方もちょうど終わったところだった。

「ふう、シオンたちは」

シオンたちは相変わらず動きが鈍い。主にレイヴンの動きが鈍い。やる気がまったくない。

「くっ！　この舐めるな！！」

シオンは相手の剣を弾いたその勢いのまま遠心力を利用して魔導人形を切り裂いた。

「シオン正面の茂みだ！」

シエルの言葉を聞いたシオンが疾駆する。魔術師タイプの魔導人形が茂みから炎の矢を放つ。シオンはそれを大剣で弾く。

「はあああ！！」

その勢いのまま大剣を振り下ろす。魔導人形が真っ二つに切り裂かれ勢いのついた大剣が地面を破壊する。

「よし、これで終わりだ」

シエルの言葉を聞いた瞬間シオンがレイヴンにつかみかかる。一瞬でレイヴンのところまで移動した。

「貴様何をやっている！！」

「仕方ないだろ。敵の位置が見えないんじゃ。どの魔術を使えばいいか分かんねえんだから」

レイヴンはまったく悪びれる様子もなく言った。シオンが怒りで体を震わす。拳を握り震わせている。

「なら、それをやっているセリスはどうなる！！」

「凄い」

「貴様ここで死ぬか」

シオンがレイヴンを掴んだまま大剣に手をかける。

「まあまあ落ち着くんだシオン。レイヴンも真面目にやってくれ」

「あれが真面目だぜ～」

レイヴンはそう言うがやはりあの戦いを見るとやる気が感じられないしふざけているようにしか見えない。

「やる気が感じられない。レイヴン、君がどう考えているか知らな

いけれど僕達は本気なんだ。だから、君もきちんとしてくれないか」
「わかってるよ」
「なら、次は頼むよ」
「ああ」
「今日はこれくらいにしよう。各自自由にしていい」

シエルはそう言って部隊室へ戻って行った。セリスも何も言わずに戻って行く。その時レイヴンを一瞥した。

「さて、俺も戻って寝るかな」
「ボンクラ、私はお前を認めない。フンッ」

シオンはそれだけ言うとレイヴンの返事も聞かず戻って行った。

「たくよ〜、なんでみんなあんなに必死なわけ？　わけわかんねぇ」

レイヴンは木陰へと歩いていく。木漏れ日の中でレイヴンは木の根元に座る。

「なんでみんなもっと楽に生きられないのかね。必死で何かやって何も出来ないのによ」

レイヴンは木に寄りかかる。風が吹いてきて気持ちがいい。

「良い風だ。ふあ〜あ、朝早かったからな少し寝るか」

レイヴンは目を閉じた。眠気の誘うままにレイヴンの意識は闇に沈んで行った。

・　・
・

・
黒天の空に紅蓮の業火が立ち上り黒煙が空に吹き上げている。
何かが燃える音が聞こえる。
小さな子供の泣き叫ぶ声が聞こえる。
大人の助けを求め神に祈る声が聞こえる。
何かが唸りを上げる声が響いている。
焼け焦げた子供の死体が見える。
首を押さえた大人の死体が見える。
鉄の打ち合う音が聞こえる。
切り刻まれた騎士の死体が積み重なっている。
死体の山の間を歩く何かが見える。
鎮魂歌（レクイエム）のような叫びが木霊する。
（フハハハハハハハハハハハ！！！）
笑い声が木霊する。
（目覚めた。我は目覚めたぞ。フフフ、フハハハハハハハハハハハハハハ）
何かの瞳の逆五芒星（リバースペンタクル）が妖しく輝く。

（さあ、行くぞ。役割のまま。破壊し壊しつくす。何も残さない。壊しつくす。さあ）

何かに呼応するかのように輝きを増していく。

燃える建物が悲鳴をあげて崩れていく。

（壊せ、壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ！！　壊して喰らってしたまえ！　全てを、我の前に立つもの全てを。我の目に入る全てを。壊せ、砕け、破壊しろ、蹂躙しろ！）

歓喜の叫びか、果てしない怨みか叫びは響く。

（やめろ！！、やめろやめろやめろやめろやめろやめろーーー！！！　やめてくれ。俺は、俺はこんなことがしたかったわけじゃないんだ）

もうひとつの声が響く。

（破壊は運命、殺戮は必然だ。何も変わらない。ただ、壊すだけだ。我は何も生み出さない。貴様もまた何も生まない。ただ破壊するだけだ。破壊し蹂躙しまた破壊する。同じこと繰り返しだ。それを何度も繰り返してきた。貴様も同じだ。同じ望みだ）

（やめろ。俺はそんなこと望んでいない！！）

（これは貴様が望んだことだ。何を言おうと。拒絶しようと。我はお前だ。お前は我だ）

（違う！！）

否定。

拒絶。

後悔。

嘆き。

憎しみ。

慟哭。

（違わない。何が違う？　どこが違う？　何も変わらない。何も違わない。あるべきままを受け入れろ。望め、解放しろ。自分自身の全てを……）

（嫌だ！！　俺はこんな……）

（もう遅い。我は目覚め、ここに来た。それは変えようもない真実だ。お前が望んだ。お前が解放した。理由なんてものはない。原因と結果。これが全てだ。原因はお前が望んだこと。結果は全てを破壊し蹂躙し喰らい尽くすこと）

（もう、嫌だ。誰か……）

（誰もここには来ないお前しかいない）

（もう大丈夫だよ）

優しい声が響く。

（何！？　なんだ、貴様は。どうしてここにいる！！）

声の主の蒼い瞳には白の五芒星（ペンタクル）が浮かんでいる。

（貴様！　その眼か！？　やめろ、見るな！？　その眼で我を見る

なあああああぁぁぁぁぁぁーーー！！！）
（大丈夫だよ。私がなんとかするからね）
白の五芒星（ペンタクル）と逆五芒星（リバースペンタクル）が交じり合い。ひとつなっていく。
（グアアアアアアアアア！！　まだだ、せめて、ここを喰らう！！！）
そして、闇がその顎を開き地獄の扉をあけた。
喰らい尽くした。
塵一つ肉の一片まで残らずに全てが喰らい尽くされた。
破壊し蹂躙し尽くした。
その場所の存在すら残さないように。
何一つ残さないように。
そして、闇が晴れ光が照らしたとき後には何も残っていなかった
……。
・
・
・
「うわああ！！」
レイヴンが飛び起きる。
「はあ、はあ、はあ」

悪夢のせいか肩で息をしている上に体中べっとりと汗をかいている。腕で額の汗を拭う。

「クソ、最悪だ」

悪態をつくレイヴン。

「胸糞わりぃ。よく覚えてないが気持ちわるい。チッ」

こんな状態では続けて寝ることも出来ずレイヴンは立ち上がりシャワーを浴びるため立ち上がり部隊室へ向かった。

第四話　対抗試合

シエルが部隊長になってから一週間が経った。今日は小隊同士の対抗試合だ。

この対抗試合は小隊の訓練成果と実力の査定と他地域の学院との試合の時の役割を決める重要なものなのだ。

小隊以外の生徒からしたら数少ない娯楽の一つで広大な演習場に設置された観客席は満員だ。生徒間では賭けも行われている。

いつになく小隊に所属する生徒はピリピリしている。対抗試合の結果次第では解散もあり得る上にある程度の順位も出るからだ。控え室はなんとも言えない空気が充満している。

「ふあ～あ」

そんな中、欠伸をするレイヴン。緊張感の欠片もない。バカなのか大物なのか。

「ボンクラ貴様には緊張感と言うものが無いのか」

シオンがレイヴンに突っかかる。この一週間二人はいつもこんな感じだった。

「ああ？　緊張したってどうにもならないんだ緊張するだけ無駄だろ」

そう言ってのけるレイヴン。ある意味大物だ。

「この一週間で貴様に何を言っても無駄なことが良くわかった。だが、言っておく私達の邪魔はするなよ」
「わかってるよ」

しばらくしてレイヴンたちの出番がやって来た。

演習場にレイヴンたちが移動する。相手は第五小隊。相手で出て来ているのは6人。戦力差は二人。だが、シエルはあまり問題にしていなかった。

「それではよろしくお願いしますね。第五小隊隊長ヘリギルスさん」
「こちらこそ、シエル隊長」

表面上はそう言っているヘリギルス。だが、顔は何かを企んでいるかのように含みがある。

対抗試合の勝利条件は敵小隊の全滅。両者は最初演習場の端にいる。その位置を探し当て全滅させることが目的だ。

そして、対抗試合が始まった。

その瞬間ありえないことが起きた。

「眠れる雷鳴シデン！！」
「ガッ！！」

レイヴンが紫電の槍に貫かれた。無様に地面をバウンドしながら吹き飛んでいく。

「レイヴン！！」

シエルは必死に状況を把握しようとしていた。

（ありえない。演習場はかなりの広さがあるんだぞ。どうして、この短時間でここまで来れる！）

「驚いてるな～」

魔術を放った相手が出てきた。先ほど整列した時にはいなかった。

「くっ、最初から潜ませていたということですか」

「あたりだ」

「クッ」

状況は相手に有利。これは反則ではない。勝つためのありとあらゆる努力は許可されている。七人という人数さえ守ればあとは殺してしまわない限り何をしても構わない。ほとんどの小隊は正々堂々と戦っているからシエルは忘れていた。

（おそらくレイヴンは動けない。それにこいつがここにいることで第五小隊の他の連中も来る）

そう考えた瞬間森の中から6人が出てきた。

「さあ～はじめようか？」

そこからの戦いはもはや戦いとはいえなかった。7対3。戦力差は4人。覆すのは難しい差。

レイヴンはその様子を見ていた。

（ああ、やられてら）

３人の相手に翻弄されるシオン。武術科二人の相手をすれば魔術科の一人が背後から魔術を放つ。それに気をとられれば武術科の二人が意識の逆側から攻撃する。それでもシオンは魔術科の生徒に接近しようとするが武術科の生徒に阻まれる。一人に阻まれもう一人に後ろからやられる。

二人の相手と戦うシエル。武術科と魔術科のオーソドックスな陣形。だが、一番強力な陣形、武術科が前衛、魔術科が後衛。隙のないコンビネーションで徐々に押されていくシエル。武術科を攻めようとすれば魔術科の生徒が魔術を放ちそれを弾いている隙に武術科が攻めていく。

セリスは武術科二名と戦っている。戦うというよりは逃げている。魔術科の生徒と武術科の生徒を一対一で戦わせた場合よっぽどのことがなければ１００％魔術科の生徒が負ける。強さなどではなく相性が問題なのだ。魔術を発動する工程は魔法陣を描き呪文を唱えること。この国ではこの二工程。だが、それが致命的な隙となる。

（あ～あ～、みんな必死だな）

レイヴンは見ながら思っていた。正直に言えばレイヴンは立ち上がれるが何もしようとしなかった。

「くそ！！」

大剣を振りぬくシオン。

「負けるものか！！」

懸命に相手の剣を弾いていく。だが、それも限界か。

「ガッ！！」

シオンが相手の魔術を受けて吹き飛ぶ。

「くっ！　まだ、まだだ」

だが、膝を突く。蓄積されたダメージがここに来て足から力を奪っていた。

（まだ、やるのかよ。それでなんになるってんだ）

シエルも武術科の剣を弾いたところで放たれた水の弾が直撃する。

「ぐあっ！！」

そこに武術科の生徒の追撃。それを剣で受けるが魔術科の生徒が魔術を放つ。吹き飛んでいくシエル。

「グッ、僕は、負けるわけには……」

剣を杖代わりにして立ち上がるシエル。

（なんで、そんなにこんな試合にこだわるんだよ。勝っても負けても何もかわらないだろうに）

セリスはうまく逃げているように見えてもその体に何発か一撃をもらっている。体力も限界だろう。なのにそんな中で何かを期待しているかのような目でレイヴンを見ていた。

（おいおい、俺に期待するなよ。俺はここで倒れておくよ。そのほうが楽じゃないか。大体なんで俺こんなところにいるんだ？　ああ、そうか、シエルの奴に騙されたんだった。やめときゃこんなとこでこんなことにはならなかったってのに）

シエル、シオン、セリスが吹き飛ぶ。

（なあ、もうやめようぜ。そのほうが楽だろ。どうせ負けてもいいんだし）

（また、逃げるの？）

レイヴンの脳内に声が響いた。聞こえるはずのない声。

（どうして、立ち上がらないの？）

（面倒だから、こんなことしたくないんだよ）

（嘘、ならなんでやめなかったの？）

（やめれねえじゃん）

いつの間にかレイヴンは黒い空間に立っていた。そこには金紗の髪をポニーテールにした碧眼の少女が立っていた。

（ほら、また嘘ついて、レイヴンはうそつきだね。それに嘘が下手だ）

（なに言ってんだよ）

（レイヴンはさ、誰かに期待されるのが、誰かが傷つくのが、誰かが苦しむのが嫌なんだよね）

（……）

幻の声は言う。

（自分のせいで誰かが傷つくのなんていや、だから、距離をおく、そんな態度をとるの）

（……）

（ほら、何も言い返せない。レイヴンは優しいからね。でも、その優しさが誰かを傷つけてるんだよ）

（わかってるよ、そんなこと）

（だったら、ほら、やることはわかってるでしょ）

そう少女が言った瞬間、レイヴンは元の場所にいた。気絶していたのだろうか。

見ると既に決着がつきかけていた。もはや、それはただの暴力だった。シエルたちは気絶する手前でいたぶられていた。

「たくよ、俺は楽に生きたいってのに。死んでも俺が心配なのかよリミルの奴」

レイヴンはゆっくりと立ち上がる。

そんなレイヴンに第五班が気がついた。

「なんだよ、立ち上がりやがったよ。無駄なのによ！」

武術科の二人がレイヴンに突進する。

レイヴンは慌てずに右手を上げる。

「魔術なんて使わせねぇよ！！」

普通なら魔術など発動する隙などないだろう。だが、その時は普通ではなかった。

レイヴンの手が動いた。残像が見えるほどの速度でレイヴンは一瞬で魔法陣を描いた。色は緑。

「吹き抜ける突風　ウィンド」

風の塊が近付いて来ていた武術科の二人を吹き飛ばす。

「な、なんだと！？」

驚きの声が上がる。

レイヴンはただ黙って第五小隊の動きを見ている。

「魔術だ！！」

魔術科の二人が魔法陣を描く。

（魔法陣の構成と色から炎攻撃魔術と断定。数は２。対抗魔術は水）

レイヴンが魔法陣を高速で二回重ねて描く。色は青。

「姿変える流水　アクアストリーム」

二本の水流が二本の炎の矢を打ち消す。

「こいつ！！　複重魔法陣だと！？」

複重魔法陣とは本来一つの魔法陣に複数の魔法陣を重ねたもの。一つの魔法陣が発動する魔術が一回限り一つだけに対し複重魔法陣は重ねた分だけ魔術を発動する事が出来る。連続で魔術を発動したり同時に複数の魔術を発動出来たりする。

レイヴンがやったのは同じ魔術の魔法陣を二個重ねて同時に発動したもの。利点は発動キーである呪文一回で二つの魔術を発動出来る点。

「全員でやるぞ！」

第五小隊全員が一斉にレイヴンに向かう。

レイヴンは冷静に魔法陣を描く。色は黄色。今までの魔法陣とは違い複雑な魔法陣。

「眠りし雷帝、奪いし雷神、祖は全てを貫く紫電の雷、罪多き者、その全てに断罪をナルカミ！！」

レイヴンが腕を振り上げる。暗雲から雷が第五小隊に降り注いだ。第五小隊に立っている人間はいなかった。

ナルカミ、雷系最強の魔術。天から雷を落とす魔術。

「これが……あのレイヴンの実力……」

「本当にあのボンクラか……？」

「……」

試合終了の合図が出る。

「ふう」

まるでスイッチが切れたかのように倒れるレイヴン。レイヴンは天を仰いだまま動かない。

「おい！！」

三人が駆け寄る。呼吸は正常。どうやら寝ているだけのようだった。

「とりあえず起きたら一発殴るだな」

シオンがレイヴンを抱えながら言う。

「……」

セリスはレイヴンを一瞥してから控え室に戻っていく。

「……」

シエルはフィールドを見る。ナルカミによりクレーターができている。

（やはり僕の目に間違いはなかった。しかし……）

シエルは首をふる。

「いや、何も言うまい」

シエルも控え室に戻る。

（レイナールの遺児、もしかすると僕の力になってくれるかもな）

初勝利。思っていた通りではなかったようだがシエルは満足そうに戻って行った。

第五話　理由

レイヴンが目を覚ましたのは医務室のベッドの上だった。レイヴン以外医務室には誰もいない。

「痛！」

レイヴンは起き上がろうとすると体に痛みが走る。シデンを受けた時に地面を盛大に転がったせいだろう。

「あ～」

痛みと共にやってしまったという思いが湧き上がって来る。ベッドの上で自己嫌悪に陥るレイヴン。動くと体は痛むのだが自己嫌悪の方が強い。

「やっちまった～、クソ、あ～バカだ。気絶した時にあんな夢みて何やってんだよ俺は。あ～もういいや寝よ寝よ」

寝てしまおうとするレイヴン。だがその時医務室の扉が開きシエルたちが入って来た。

「大丈夫かいレイヴン？」

「問題ねえよ」

「では、こちらも問題ないな」

シオンが言いいきなりレイヴンを殴った。本気で、それはもう本気で。レイヴンがベッドから落ちる。

「何しやがる！！」
「今まで足手まといだった奴が実は使えましたとか言われたらこういう反応になる。一発で済んだんだ軽いものだろ」
お前の軽いは常人には重すぎるとは絶対に言えないレイヴンであった。
「余計なことを思っていないか？」
「いえ、何も思っていません。美しいシオンさま」
「頭でも打ったか？　まあ、私が美しいというのは否定しないがな」
否定しないのかよと心の中でツッコミを入れるレイヴン。そんなことシオンは気づかずかなり満足げだ。
「……」
セリスがレイヴンをじっと見つめる。
「なんだよ？」
「……」
セリスはそのままレイヴンの前まで移動して思いっきりレイヴンを蹴った。
「いったあああ！！」
「……」
どうやらセリスも怒っているようである。そしてさっさと医務室を出て行った。

「自業自得だな」

シオンが痛みで悶絶しているレイヴンに言った。

「言っておくぞ。この先また足手まといになるようなら私がさっくり殺してやる」

レイヴンの返事も聞かずそそくさと医務室を出といったシオン。

「何なんだよあいつら」

「まあ、君が悪いと僕も思うけどね」

基本レイヴンの味方はいない。日頃の行いが悪いからだ。

「はあ～」

「それで、レイヴン聞きたい事があるんだ」

「なんだよ」

「レイヴン、君は何でここに来たんだい？」

シエルは言った。戦いたくなかったのなら来なければ良かったのにと。

「俺は、孤児だからな」

孤児や犯罪者の子供、忌み子は強制的に国に有益な機関に送られる。運が悪ければ国の研究機関で人体実験に使われ、生きたまま皮を剥がされ、肉を切り刻まれ、陵辱される。女子ならば貴族に売られ奴隷として過ごすことになる。しかし、それならまだ良いほうだ。気に入られたならば性奴隷として一生を送ることになる可能性もあるのだから。

運良く学院などに来れたとしても卒業後には過酷な運命が待っている。絶対に死ぬような戦場に送られる。

それにレイヴンは黒髪黒眼だ。黒髪黒眼は悪魔の証として畏れられている。黒髪黒眼と言うだけで蔑まれ石を投げつけられ、悪魔の使いとして拷問を受ける。孤児ならばなおさらだ。黒髪黒眼だという理由だけで殺された者もいる。

「そう、か……お前はこの国を恨んでいるのか？」
「別に、そんなん言われても仕方ねえし」
「嘘だろう」

シエルははっきりとレイヴンに言い放った。確信しているかのように。

「嘘じゃねえよ」
「いいや、嘘だろう。なんたってお前はレイナールの遺児なのだからな」
「人のことをよくもまあ、調べたもんだな」
「十年前のレイナールの悲劇にお前は関わっていたはずだ」

レイナールの悲劇、十年前レイナール孤児院が突如として消滅した事件。原因も何もかもが不明で人々の記憶から忘れ去られた事件。

「……」

レイヴンは黙っている。

「肯定と受け取ろう。僕が独自に調べたことだが、十年前レイナー

ルの土地を欲した王は再三に渡って渡すように要求した。だが、その全てをレイナール孤児院の院長は断った」
「……」
レイヴンは黙って真っ直ぐ壁を見ている。
「王は手に入らないなら無理矢理奪うことにした。１００人以上の騎士団を派遣した。お前はその現場を見たはずだ。問答無用で殺される男たち、陵辱され無惨に殺される女たち、情け容赦なく残酷に殺される子供たちの姿を」
「……」
レイヴンに反応はない。だがどこか険しい顔で黙って壁を見ている。
「恨んだはずだ、復讐したいと思ったはすだ。願ったはすだ」
「……」
「レイヴン、僕がやってやる。僕が王になってお前がかつて願った願いを叶えてやる。だから、僕に付いて来い」
「……俺はパスだ。俺にはそんなことをやる資格なんてねえし」
「お前……」
レイヴンがシエルの方を向く。
「まあ、そうだな。お前が王様になったらさ、俺みたいなのが死ななくていい国を、誰もが幸福な国を作ってくれよ」
「当たり前だよ」
「あと、働かなくても暮らせる国にしてくれ」
シエルが驚いた顔になり笑いだ。

「あははは、お前は本当に面白い奴だな」
「いいだろ。働かなくても暮らせるなら少なくとも国民はついてくるぜ」
「そうかもな」

その時医務室のドアが開け放たれる。シエルとレイヴンは身構える。そしてすぐに構えを解く。入ってきたのはシオンだがらだ。

「中々面白い話だったな」
「盗み聞きか」
「気がついていたのに何も言わないシエルが悪い」

どうやらシエルはシオンが盗み聞きしていたことに気がついていたようだ。

「お前気がついてたなら言えよ」

レイヴンは頭を押さえながら言う。

「ふむ、人の過去を盗み聞きしたことは謝ろう。すまない」

シオンが頭を下げた。レイヴンはまさかシオンが頭を下げるとは思っていなかったから驚いている。

「しかし、悲惨な過去を聞いたからといって私のお前への態度は変わることはないからそのつもりで。サボるようなら容赦なく殺すからな」
「わ、わかった」
「それで、シエル、お前王になるそうだな」

シオンがシエルに向き直り言う。
「そうだよ。僕は必ず王になる」
「本気か」
シエルが頷いた。
「そうか……」
空気を引き裂いて大剣が高速で抜かれ振り下ろされた。だがシエルが真っ二つになることはなかった。大剣はシエルを切り裂く寸前で止まっていた。
「避けないのか。私が振り下ろしていたら死んでいたぞ」
「君はそんなことはしないよ」
シオンが大剣をシエルから離し鞘に戻した。
「殺す気はない。だから、出てこい」
シオンが言うと扉を開けてセリスが入って来た。いまだ殺気を放っている。
「……」
「なるほどセリスも知っていたのか。大丈夫だ何度も言うが私にシエルを殺す気はない」
「……そう」
セリスから放たれていた殺気が消える。

「どうやら覚悟はあるみたいだな」
「王を打倒して王になるんだ。覚悟は出来ているよ」
「なら、私も手伝ってやろう」
「いいのか君の家は……」

エリアリス家はアルハザード王宮に忠誠を誓っている。反逆者に加担などすればどうなるかは想像に難くない。

「問題はない。お前だって王族だろう？　王族に騎士が忠誠を誓うのはなんら不思議なことではない。それに――」
「それに？」
「――私もこの国は変わるべきだと思っている。しかも今の王は気に入らない。あいつは漬け物をバカにしたからな」

恐らく漬け物をバカにされたの方が主な理由だと思うレイヴンたちであった。

「お前なら漬け物も認めてくれそうだしな」

苦笑いするシエル。

「まあ、検討しておくよ」
「よろしく頼む」
「まあ、勝手にしてくれ」

関係ないようにレイヴンは言った。

「何を言っている。お前もやるんだぞボンクラ」
「はあ！？」

思いっきり驚くレイヴン。
「お前は戦力になるんだ。嫌でも協力してもらうぞ」
「嫌だ！！」
レイヴンは拒否するが。
「駄目だ」
ときっぱりと言うシオン。
「絶対嫌だあぁぁぁー！！」
レイヴンの叫びが木霊した。
それから動けるようになったレイヴンは部隊室に帰った。
・
・
・
「ん？」
寝ていたレイヴンが目を覚ました。窓の外は暗い。時間真夜中といったところ。
「喉渇いた」
レイヴンは部屋を出て階段をおりてエントランスであり談話スペースでもあるに行った。そこにはシエルがいた。

「お前まだ起きてたのか」
「レイヴンかどうした？」
「水を飲みに来たんだよ」
「そうか」

シエルはレイヴンが水を飲むのを見ていた。

「あ、そうだ。なあ、シエル」
「なんだ？」
「お前に聞きたいことがあったんだ」
「聞きたいこと？」
「ああ、お前さ、何で王様目指してんの？」

レイヴンの問いは単純な問いだった。

「……国民のためと言うのもあるが母のためというのが大きい」
「ふ～ん」
「僕の母はね奴隷だったんだよ。王の気まぐれで僕は生まれた。生まれてすぐ母と離され王妃の子として育てられた」

自身の過去を淡々と語るシエル。

「そこで僕は腫れ物のように扱われたよ。それが気になって調べたら本当の母のことがわかったよ」

レイヴンは黙って聞く。

「それから僕は本当の母に会いに王宮を抜け出した。だけど……母には会えなかった。母を知っている人にもね。おかしいと思って調べたら愕然としたよ」

そこでシエルは一息置いた。

「何に愕然としたんだよ」

「母は完全に消されてたんだよ。僕が四歳になる頃に殺されていてその死体が僕の食事に混ぜられていた」

「！？」

レイヴンはそんなことがあるのかと驚き疑う。

「本当のことだよ。当然吐いたし。食事も食べられなかったよ。そんな日々が五日続いた頃にね。流石に死ぬかもしれないと思ったから王宮を抜け出して街に食事を買いに行った」

「それで？」

「驚いた。母に会いに行ったときは誰にも見つからないように行ったから市民の生活は見てなかったんだ。でも、見てみて驚愕した」

街は暗く、人は俯いていて実に酷い有り様だったと言ったシエル。

「王宮にいた時は知らなかった。知らされていなかった。民がこんなにも苦しい生活をしていたなんてとね。その時僕の中である考えが浮かんだ。自分ならこんなことはしないと。その時だ僕が王になろうと決意したのは」

それは今から七年前の話。たった十歳の少年がするには大きすぎる決意。

「それから僕は勉強した身を守る為に剣術も習った。その合間に街の人々に施しをした。国中を回って人々の話を聞いた」

「それで善行の第四王子って言われてたのか」

国中でシエルは有名になった。どの王子よりも民に優しいと。

「僕は国を変える。民の為にも。そしてそれが母の無念を晴らすことに繋がると思うからだ」

「……そうか」

レイヴンは自分の部屋に向かう。

「まあ、頑張れよ」

「ああ」

レイヴンは部屋に戻り眠りについた。

その後シエルも部屋に戻って行った。

第六話　夏期休暇

対抗試合が終わってから1ヶ月、学院は夏期休暇に突入していた。そしてレイヴンたちは海へと来ていた。

その原因は対抗試合にある。度々行われる対抗試合にてレイヴンは勝ち続けていたのだ。面倒くさいと言ったレイヴンがナルカミで広範囲を焼き払って終わらせたり、シエル、シオン、セリスの三人が圧倒的強さで終わらせたり。

第五小隊の時は不意打ちに無警戒であったためあのようなことになっただけであって基本レイヴンたちはかなり強いのだ。

そのせいで先輩は面子がただ潰れ。同級生も更にやる気になり、決闘と言う名の闇討ちが横行。更に女子生徒のおっかけ。ちなみにシエルの人気は言うまでもないがレイヴンの人気も上がってきている。シオンとセリスのファンクラブもあるとかないとか。

などなどが夏期休暇に入ったところで更に酷くなったためライグスが――。

「お前らがいると正直迷惑だから学院から出て行け」

―と物凄い正直に言われてレイヴンたちは南にある海に来ていた。

ここはリユール地方の貴族専用にするはずだったリゾート地だった。過去形なのはここが完成する前に王の気まぐれで放棄されたため。一応の宿泊施設とかはあるので泊まるところは問題ない。人も来ないので本当にリゾートだ。

「なあ～」
「なんだいレイヴン」
水着姿の二人が浜に座っている。
「こんなとこに来ていいのかよ。こんなときでも民は苦しんでるんだろ？　お前とか休まずに色々やりそうなキャラだろ」
「そうなんだけどね。僕にはクーデターを起こす力がない。各地の人々とひそかに連絡をとったりしてるけどまだまだだよ。僕にはまだ、何もないからね」
「あっそう」
沈黙、基本レイヴンはこんなところに来たことなどないし。シエルは興味がなかったからと目的のためにこんなところには来たことがないため何を話していいのかわからない。
「すまない、遅くなった」
水着姿のシオンとセリスが現れた。着替えに手間取っていたのだ。
シオンは黒のビキニタイプの水着で髪をポニーテールにしている。かなりスタイルがいいのでさらに強調されている。セリスは灰色のビキニタイプ。こちらはシオンと違いあまりスタイルは良くはないが別の魅力がある。
「似合いますね」
「おせ～ぞ」
きちんと感想を言うシエルと何の感想もないレイヴン。これが差

です。
「だから、すまないと謝っただろう」
「はいはい」
「貴様バカにしてるだろ」
「してる」
言い切ったレイヴン。
「殺してやる」
「まあまあ、せっかくの休暇なんだから楽しまないと。だから、やめよう」
「仕方ないな」
「さあ、せっかく来たんだ泳ごうか」
「俺はパス。ここで昼寝してるよ」
「そうか」
シエルとセリスが海へと入っていく。パラソルを広げその下に横になる。シオンはパラソルの中に座っている。
「お前は行かねえのかよ？」
「……」
「おい、何か言えよ」
「ふっ、私は――」
「なるほど泳げないのか」
「なんでそうなる！！」
レイヴンの言葉に過剰反応するシエル。
「いや、なら行けよ」

「い、いや」
「やっぱり泳げないんだな」
「……だよ」
「は？」
「ああ、そうだよ」

シオンは泳げないようです。その事実ににやりとするレイヴン。明らかに悪いことを考えている。

「なるほど……」
「余計なことをしてみろ殺す」
「ふっ、追っかけてこれるならな」

レイヴンはそういうといつものやる気のなさはどこへ行ったのか高速で海に入っていった。足がつかない深いところへ。

「貴様卑怯だぞ！」
「これないだろ～。さてと」

レイヴンが魔法陣を描く。色は緑。

「風が全てを捕らえんウィンドパーガトリ」
「何をする！？」

風がシオンを捕らえそのままレイヴンの元へ。風の牢に閉じ込められたシオン。海の上に浮いている。

「さ～てと、今まで散々やられたからな。仕返しをさせてもらうぜ」
「それは貴様の自業自得だろう！！」
「聞こえねえな～」

「貴様！！」

本当にレイヴンの自業自得が多いのだがそんなことお構いなしのレイヴン。存外鬼畜だ。

「さて、このまま俺が魔術を解いたらどうなるでしょう～？」

「！？」

シオンはレイヴンの魔術で浮いている。レイヴンが魔術を解いた瞬間海へ落ちることになる。それがわかって青くなるシオン。

「や、やめろ！　やったら殺すぞ！！」

「よくこの状況で強気になれるな。俺が魔術を解けば海にドボンだってのに」

「うっ」

その様子を傍観しているシエルとセリス。

「まったく、レイヴンはこんなときだけ積極的なんだから」

「……同意」

「あとで知らないよ僕は」

「……私も」

レイヴンは徐々にシオンをおろしたりしている。

「貴様あとで覚えていろよ」

「へいへい、じゃあ俺寝るわ」

「おい！！」

「ああ、がんばってね～」

レイヴンはシオンをそのままにして浜に戻りパラソルの下で昼寝を開始。

・
・
・

「ふあ～あ、よく寝た～」

夕方日が傾きかけた頃にレイヴンは起きた。

「ようやく起きたか」

「へ？」

目の前には怒り狂ったシオン。

「あ、あれ～？　一体どうやってあの牢を？」

セリスがさっと目をそむけた。

「お前か！！」

「……脅された」

「うん、アレは恐ろしかったよ」

風はセリスが解除したらしい。そしてシエルがシオンをここまでつれてきたと。

「さて、覚悟は出来ているんだろうな」

「待て！　ほんの冗談だ」

「そうか、なら、これも冗談だ」

「ぎゃあああああああああ！！！」

誰もいない浜辺にレイヴンの悲鳴が木霊した。

「うう、くそ～」

着替えたレイヴンたちは宿泊施設の食堂で食事を取っていた。

「自業自得だよ。というよりレイヴンはもう少し自分の行動を見直すべきだね」

「うるせ～」

「シエルこんな奴に何を言っても無駄だぞ」

「何だと～！！」

「お前こそなんだ！！」

火花を散らす二人。それを呆れたように見ているシエルとセリスであった。

第七話　戦争

夏期休暇も終わって二ヶ月。学院内は湧き上がっていた。理由は簡単。他地域との交流試合である交流戦争が行われるからだ。

交流戦争とは文字通り他地域との戦争だ。戦闘と言っても武器は全て刃引きされた訓練用で模擬戦争だ。いずれ起こる可能性のある戦争を簡易的に体験するための催しであり国によう各地域の学院の査定でもある。大体一年に一回は行われる。どこの地域と戦うかはランダムで戦う場所も様々。これに勝つと学院にとっては利益があるらしい。生徒にしたら血の気が多いので主に相手を殴れればそれでいいという。

今回のマニリア学院の相手はラステール地方にあるラゴス学院。場所はカリヘイブとの国境付近の平原。

「ふあ～あ」

「本当にお前には緊張感というものがないなボンクラ」

「だから、いつも言ってんだろ緊張したって意味ねえんだ。するだけ無駄だ」

「はあ、そこまで言い切れる奴はお前以外いないな」

シオンはそんなレイヴンを放っておいて平原を見つめる。遮蔽物も何もない平原。このフィールドでの戦争は総力戦となる。攻城戦などの条件がないため純粋な力量が結果を分かつ。

「レイヴン、今回は君にも働いてもらうことになりそうだ」

作戦会議から帰ってきたシエルが言った。

「作戦が決まったのか？」
「ああ、まずは開始直後に魔術を放ち相手を牽制、その隙に僕達武術科が攻撃を仕掛ける」
「うまくいきそうか？」
「わからない。相手の出方しだいだ」

空には雲がかかってきていた。

「雲行きが……怪しくなってきたな」

レイヴンが目を細め、誰にも聞こえないように呟いた。

「さあ、始まるぞ」

相手側を見る。始まりを告げる笛がなった。

その瞬間血の雨が降り注いだ。

＊＊＊＊

アルハザード王宮。

「陛下！！」
「どうした？」

報告にやって来た男にセミレリウス・クロードは聞いた。セミレリウスはシエルと同じ銀髪でシエルに似ている。だがシエルよりも鋭く冷淡な目が明らかに違う。

「報告します。東の国境にカリヘイブが侵攻を開始しました！！」
「ふ～ん」
セミレリウスは関心なさげだ。
「現在国境付近にいた一個中隊と戦争中だったマニリア学院生が交戦中です」
「へ～、シエルの通ってるとこか」
「直ちに援軍を送らなければ全滅です。既にラゴス学院生は全滅とのこと」
「そうだね～」
セミレリウスに急ぐという気はなかった。むしろ好都合と思っている。邪魔なシエルを殺せるからだ。
「じゃあ、送ってやりなよ」
「は！！」
男が部屋を出て行った。
「でも、まあ、間に合わないけどね」
人が死ぬというのにセミレリウスは笑っていた。
＊＊＊＊
「なんだ！！　何が起きた！！」
「わかりません。いきな――」
シエルに報告しようとしていた男は最後までいえなかった。男は

首をなくした。そして、そこには剣を構えた青い甲冑の騎士がいた。

「カリヘイブの魔法騎士だと！！　攻めてきたのか！！」

事態に気がついた学院生が一斉に逃げ出す。だが、そのほとんどが逃げ切れなかった。

「我らカリヘイブ５０００の魔法騎士団。貴様らは皆殺しだ」

がたいのいい隻眼の男が宣言した。

「まさか、隻眼のガイドスか！！」

ガイドス・ケイレス、カリヘイブ最強最悪の魔法騎士。身の丈ほどの大剣を振るい今だ一対一において負けたことがないという。二十年ほど前のアルハザードとの戦争では十分間にわたり一人で全軍を足止めしたという伝説をもつ。そのときに右目を失うがそれでもかわらず軍に身をおいている。

「カリヘイブは本気でアルハザードを攻めているのか。そうだ。レイヴンたちは！」

どうやらはぐれてしまったようだ。

「ひとまず撤退だ」

シエルとセリスはひとまず撤退する。その間も次々と殺されていく学院生とやって来たアルハザードの騎士たち。

その頃レイヴンとシオンと一部の学生も逃げていた。

「くそ！！　なんなんだよ！！」
「カリヘイブの魔法騎士団だ！！」
「なんだよそれ！！」
「お前きちんと授業聞いてなかったのか！　いや、寝ていたのか」
レイヴンはほとんどの授業をサボっていたため知らない。
「魔法騎士とは魔術を使う騎士だ。そしてカリヘイブ魔法騎士団とは大陸で最強と謳われる騎士団だ」
「なるほど、ってまずいじゃねえか！！」
そう言っている間に青い武者鎧の騎士が魔法陣を描く。アルハザードの魔法陣とは違い自身を包み込むように書いている。色は白。
「契約の韋駄天　神速の足を我に与えよ！！」
カリヘイブの騎士がブレたかと思うと一人切り殺されていた。
「なに！？」
レイヴンは再び相手が魔術を使うのを見た。
（クソ！！　何とか解析できるか？　……おそらくカリヘイブ固有術式だな。クソ意味わかんねえ。アルハザードの魔術体系と違いすぎるだろ！！）
その時。
「伏せろバカ！！」

シオンに倒される。レイヴンの頭があった位置を剣が通り過ぎた。
「くそ、あの魔術で体でも強化してんのか？」
「こちらの魔術とはまるで違うな」
「くそ、それじゃ対策の練りようがねえ」
「とにかく逃げるぞ。生きていれば何とかなる！！」

再び走りだす。

「クソ、追ってきやがる」
「何とかしろ」
「わかったよ！」

レイヴンが高速で魔法陣を描く。

「眠りし雷鳴シデン！！」

雷の槍が魔法騎士を吹き飛ばす。

「やったか？」

だが、吹き飛ばした魔法騎士は何事もなかったかのように立ち上がり再び追ってきた。

「くそ、あの鎧対魔効果が付加されてやがる」
「なんだそれは」
「一定上の魔術じゃないとダメージを与えらえれないってことだ」
「なるほど」

次々にやられる断末魔を聞きながら走る。それは戦争ではなく虐殺だった。

第八話　覚醒

シエルは一個中隊の司令官の死体を見ていた。合流した途端矢で射られて殺された。しかもそれきり矢は放ってきていない。明らかに舐められている。学生だからと舐められている。一個中隊の騎士たちの一部は司令官を失い戦々恐々としている。

「クソ、僕はこんなところでは死ねない」

シエルは決意した。

「諸君聞いてくれ。僕はシエル・クロード。セミレリウス・クロードが四男。これからは僕が指揮を執る。従ってくれ。生き残りたいなら。死にたくないのなら!!　行くぞ!!」

『おおーー!!』

喚声が上がる。ひとまずは士気が下がるのは避けられた。だが、シエルのは顔は険しい。

「しかし、状況はこちらに不利だ」

こちらは今ここにいる生き残りを含めて千人弱。対してあちらは５０００。ほぼ五倍の戦力差。これを覆すのは難しい。

「だが、やるしかない。セリス、協力してくれ」

「……わかった」

「みんな、よく聞いてくれ」

シエルは作戦を説明した。

＊＊＊＊

カリヘイブ仮設陣地。

「報告、敵の新たな司令官と思われる者を含めた隊が退却していきます」

「ほう、逃げるのか。ならば追え！！」

「は！！」

ガイドスはテントの中で笑っていた。

「さあ、どうあがくのか見せてもらおうか。まあ、我が一人おればあとはいらんのだがなぁ」

しばらくして報告が来た。

「報告します！！　追撃に出していた１２００名全滅しました」

「ほう！」

ガイドスの顔が面白さに歪む。

＊＊＊＊

シエルが立てた作戦は単純なものだった。だからこそ有効であり驕る敵には仕掛けやすい。シエルがやったのは落とし穴。魔術で掘った穴に敵を落としてから一斉攻撃を仕掛けただけだ。それがうまくいっただけ。

「……うまくいった」

「ああ、こうもうまくいくとはだけどこれで同じ手にはもう引っかからないだろう。次の手だ」

次々とあの手この手で敵を攪乱し各個撃破していく。いくら一人一人が強くとも数の前には勝てない。それが学院の教育だ。そしてシエルはそれをうまく活かしていた。

「レイヴン達は無事だろうか」

うまくいっていたシエルには緩みがあった。だからなのだろうか。それはあっさりと起きた。

「ぐあああ！！」
「なんだ！？」
「わかりません次々とやられていきます！！」
「なんだ、何がおきている！！」

仲間を殺していたのはガイドス。ただ、一人。

「ばかな……」
「一人の圧倒的暴力の前には数など無意味だ」

ガイドスは言い放った。

「さあ。やろうか」

ガイドスの後ろからは１８００人の魔法騎士が集まっていた。

＊＊＊＊

レイヴンたちは２０００人の魔法騎士に追われていた。

「うわ！！」

一人の学生がこけた。その後ろに魔法騎士が迫る。

「危ない！！」

レイヴンが魔法陣を描く。その色は赤。

「地獄と煉獄の狭間の炎よ、炎帝の剣と成りて敵を滅せよレフィアマサーフィア！！」

巨大な炎の剣が魔法騎士を貫いた。魔法騎士は燃えて灰になった。

「大丈夫か！！」

「はい」

「早く行くぞ！」

学生が立ち上がった瞬間上半身と下半身が離れた。

「！！」

学生は驚いた顔のまま絶命していた。血が辺りを染める。

「契約の明王その力を我に与えん！！」

魔法騎士が突っ込んでくる。

「このボンクラが！！」

キィイン！！

鉄と鉄のぶつかる音が響く。

「くあ！」

「シオン！」

「ぼさっとするな死ぬぞ！！　てりゃあああ！！」

相手の剣を弾き切り伏せる。

「行くぞ！！」

「あ、ああ」

走る。走る。だが、敵は追ってくる。レイヴンたちは１００人程度。この人数で２０００人などどうしようもない。

「うわあああああ！！」

各所で悲鳴が轟く。

シエルたちの所でも戦況はたった一人により一変した。剣の振る音がしたら次次と人が死んでいく。

（（やめろ！！））

レイヴンとシエルは叫ぶ。

「うぎゃあああああ！！」

だが、悲鳴は断末魔はとまらない。

「「やめろ……」」

「いやだ、嫌だあああああああ！！」

死神が迫る。

「「やめろ。やめろやめろやめろ！！！」」

別々の場所で、だが、同じこと叫ぶ。

「「ふざけるなあああああぁぁぁぁぁーーー！！！」」

叫びを上げる二人。二人の中の何かが変わった。

「……シエル？」

いきなり叫んだシエルを心配するセリス。

「ボンクラ？」

シオンもいつにない雰囲気のレイヴンを心配する。

（望め、そうすれば楽になれる）

レイヴンの心の中で声が響く。

（ミロ、お前が見たいもの全てを）

シエルの心の中で声が響く。

（壊せ、破壊しろ、蹂躙し、滅せ、喰らい尽くせ）

（ミロ、ミロ、ミロ、お前の望む可能性を勝ち取って見せろ）

（（そうすればこの状況を何とかできるのか））

（（当たり前だ））

（我は堕ちた天使（ルシフェル）の瞳）

（我は神の言葉（カブリエル）の天使の瞳）

（（出来ないことはない））

声は二人は同じことを言う。

（そうすれば俺は守れるのか）

レイヴンは問う。

（お前は何も何も守れやしない。十年前も言っただろう。お前は破壊するだけだ。壊し、破壊し、蹂躙し、滅すだけだ。なんら変わらない何も変わっていない、守りたいのならお前がやって見せろ。我はお前に見せるだけだ。ぐ、待て貴様！！　邪魔を……ぐあ）

（ううん、レイヴンなら守れるよ。きっと守りたいもの全て）

声は答えた。

（何を見るんだ）

シエルは問う。

（お前が望む全てを、可能性の全てを取りお前がほしい可能性を引き当てる。その先はお前が考えろ）

声は答えた。

（（……））

そして二人は言った。

（（やってやるよ！！！））

ドンッ！！！

その瞬間。全てが変わった。

レイヴンの漆黒の瞳に白い逆五芒星（リバースペンタクル）が浮かび、シエルの金の瞳に六芒星（ヘキサグラム）が浮かびあがった。

第九話　魔眼

「な、んだ、これは……」

シエルの左目には敵が写っていた。だが、それは普通の敵ではない。右目と左目で風景が違う。そして左で見ると一歩遅れて右がその動きをする。

「これは、未来を見るのか！！」

シエルは直感的に理解した。シエルの左目は左から敵が出てくる映像を見た。シエルは指示をだした。

「全員左の森に集中砲火！！」

わけがわからないが全員動いた。シエルに従う以外なかったからだ。左側に魔法が放たれる。

「「「うわあああああ」」」

左の森から敵の悲鳴が上がる。

敵が地面をけると爆発する映像が見えた。

「全員、敵前方に炎の魔法を！！」

シエルの言葉に引っ張られるように行動する。炎の魔法が直撃するとその地点が爆発した。

「なああああにいいいいいいいいいいいい！！！！！」

ガイドスは驚いていた。自分自身が仕掛けたものを見破られ利用されたからだ。本来は敵に砲弾を撃ち込む装置が破壊されこちらに被害を出した。

「何だあのガキ、まさか未来でも見えるとでも言うのか！！」

明らかに先読みされている。それもほぼ１００％の的中率で。その時ガイドスにシエルの左目の六芒星（ヘキサグラム）が目に入った。

「魔眼か！！　それも神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳だとぉ。フハハハハハ！！　ついに見つけたぞ。魔眼の保持者を！」

「報告します！！」

「どうした？」

勝っているというのに兵士の顔は暗い

「残りの残党狩りに出していた２０００の軍……全滅しました」

「なんだと！？　ありえん、ありえん。まさか！？　我が確かめに行く。ここの指揮は任せた！！」

ガイドスが２０００人を送った場所に向かった。

「ガイドスがどこかへ向かいます！！」

「よし！」

シエルは純粋に喜んだ。

（何があったかはわからないがなにか良くないことが起きたんだ）

すかさずシエルは攻める。見えたのは敵が一箇所に集まる映像。

「総員僕の合図であの場所に一斉攻撃」

敵が一箇所に集まった。

「今だ！！」

そこに魔法の一斉砲火。様々な魔法が敵を襲う。そしてその間をぬって剣士が剣を相手に突き立てる。

「うわあああああああ！！」

いかに対魔法の鎧とはいえアレだけの数の魔法を喰らえばダメージは食らう。

更に、敵が飛び出し自分に向かってくる映像が見える。間髪いれず見えたとおり敵が飛び出してきた。そこに剣を突き出す。

「なに！？」

敵の驚く声と供に剣に肉が刺さる感触。魔法騎士は剣に突き刺さり絶命していた。シエルは剣を抜き血を掃う。

「ふう、これで、終わりみたいだな」

「「「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！」」」

たまらず歓声が上がる。しかし、代償は大きく１０００いた人間は１００人まで減っていた。勝てたのが奇跡だった。シエルは１０

0人で勝ち生き残る未来を選択した。

「……その目」

セリスがシエルの左目を見ながら言う。

「僕の目はどうなってる？」

セリスが氷の鏡を作り出した。

「なるほど、魔眼か」

神の言葉の天使の瞳（カブリエルの瞳）、未来を見通す魔の瞳。神の定めた運命を映像としてみる魔眼である。その未来は必ず起こるわけではなく自身でその未来を改変することが出来る。使用中は瞳に六芒星（ヘキサグラム）が浮かぶ。力の代償（デビルズペナルティ）と呼ばれるものがある。

その時、レイヴンとシオンが地面に倒れ伏しそしてその前にガイドスが立っているのが見えた。

「レイヴンたちが危ない！！」

走ろうとした瞬間、シエルを激痛が襲った。これが力の代償（デビルズペナルティ）である。

「ぐあああああああああ！！」

「シエル！！」

体がバラバラになりそうな痛みに倒れるシエル。生き残った奴らがかけよる。

「シエル！！」

シエルは痛みに意識を手放した。

＊＊＊＊

「レイヴン？」

レイヴンの雰囲気が違う。いつものレイヴンではなかった。

「あとは貴様等二人だけだ。死ね！！」

魔法騎士が魔法陣を描く。

「契約の韋駄天、神速の足を我に与えよ」

（解析開始。カリヘイブ固有術式。術式逆算、強化魔法、強化部位は足）

レイヴンの眼には魔法が見えていた。一目見ただけでその全てが理解できた。

堕ちた天使の悪魔の瞳（ルシフェルの瞳）。本来の能力は見たもの構成を理解し存在の根底から破壊する魔眼である。しかし、何者かの手によりその力は封じられており魔術の解析しか行うことが出来なくなっている。神の言葉の天使の瞳（カブリエルの瞳）と同じく力の代償（デビルズペナルティ）と呼ばれる代償がある。使用中は瞳に白い逆五芒星（リバースペンタクル）が浮かぶ。

「……やらないとみんな死ぬ。こうか」

レイヴンが自身を包み込むように魔法陣を描く。
「契約の韋駄天、神速の足を我に与えよ」
レイヴンの姿がブレるとシオンと共に遠くにいた。
「お前……」
「ここにいろ」
レイヴンは返事も聞かず戻った。
「貴様等なぜ我が国の魔法を！！」
「とにかくころせ！！」
２０００もの魔法騎士達が魔法陣を描く。
「契約の我らが主よ全ての加護を我らに与えん」
（カリヘイブ固有強化術式。対象への強化）
レイヴンがナルカミの魔法陣を描き更にその周りに新たな魔法陣を描く。
（カリヘイブ固有強化術式とアルハザード固有術式を融合し再構築）
レイヴンは唱えた。
「契約の眠りし雷帝よ、奪いし雷神よ。加護を与え全てを罰する最悪の雷となれナルカミ」
天空を切り裂き雷が降り注ぐ。それはまさに巨大な槍。

「くう！！」

凄まじい衝撃がシオンを襲う。

雷が消えると２０００人の魔法騎士たちは跡形もなく蒸発していた。

「大丈夫かシオン！！」

レイヴンがシオンに駆け寄る。

「君は何をしたんだ」

「術式を融合して再構築した。まあ、わからないだろうな」

「それでその眼は……」

「ああ、魔眼だろ――あぶねえ！！」

シオンを突き飛ばすレイヴン。レイヴンの腹に剣が飛んできて突き刺さった。

「いい動きだ。堕ちた天使の悪魔の瞳（ルシフェルの瞳）の持ち主よ。だが、封じられている貴様など我の敵ではない」

「貴様は」

「カリヘイブ魔法騎士団隊長ガイドスだ」

「レイヴン！！」

シオンがレイヴンに駆け寄ろうとする。

「来るな！！」

「遅いわぁ！！」

シオンに剣が振り下ろされる。

（ふざけるな！！　もう、俺の前で誰かが死ぬのはまっぴらなんだよ！！）

レイヴンが無理矢理腹に刺さった剣を抜いた。魔法陣を二重に描く。カリヘイブの術式は重ねることで効果を倍増する。だが、その分反動が大きい。

「契約の韋駄天神速の足を我に与えよ！！」

レイヴンがシオンと剣の間に割り込みシオンを突き飛ばすし自分も後ろに下がる。だが、剣の切っ先はレイヴンの右腕を深く切り裂いた。

「ぐあああ！！」

「捕まえたぞ」

ガイドスに首を掴まれ持ち上げられるレイヴン。

「我、契約に背きその供物を奪わん」

ガイドスが唱えレイヴンの右目を抉り取った。

「ガアアアァァァ！！」

血管が切れ神経が引きちぎられる。ガイドスの手には完璧な形の眼球がのっている。

「レイヴン！！」

シオンは切りかかろうとするがガイドスの圧倒的圧力で動けなかった。

「ブハハハハハハ！！　ついに、遂に悪魔の眼を手に入れたぞ！！」

「よう」

レイヴンが痛みを堪えながら言う。

「お前それがなんだか知ってんのかよ」

「知っている」

「そうか、大層価値があるんだろうな」

「ああ、もう片方も頂こう」

「悪いがやれないね」

ザシュッ！！

レイヴンの左手に作り出した風の刃が刺さりそしてガイドスを切り刻んだ。

「ぐあああああ！！」

レイヴンを投げ捨てるガイドス。

「ぐあ！！」

「レイヴン！！」

シオンはレイヴンに駆け寄った。

「あ、あと、一撃……くそ、急に眠気が」
「力の代償（デビルズペナルティ）だぁ」

全身を切り刻まれながらも立ち上がるガイドス。

力の代償（デビルズペナルティ）。魔眼の使用者に与えられる代償。魔眼により力の代償（デビルズペナルティ）の種類も規模も異なる。昔、力の代償（デビルズペナルティ）で滅びた国もあると言う。堕ちた天使の悪魔の瞳（ルシフェルの瞳）の代償は眠り。神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳の代償は全身を苛む激痛。使用時間などでその長さは異なる。一日から数百年まで。

「くっ！！」

剣を構えたシオン。

「今日の我は紳士的だ。眠る相手から無理矢理奪う気はない。さらばだ。ブハハハハハ！！」

ガイドスは去って行った。それと共に雨が降り出した。

「レイヴン！！」
「よお、どうしたそんな顔して、泣きそうだぜ」
「喋るな！」
「ああ、眠い。シオン、あと、まか、せ、た……」
「レイヴン！！」

レイヴンは眠りについた。

魔法騎士団４９９９名を失ったカリヘイブは戦争を続ける気はなく。即座に停戦となった。

シエルはたった１０００人で５０００人の魔法騎士団を倒し戦争終結に貢献したとして民衆からは英雄と呼ばれた。はからずしてシエルはその目的へと大きく前進した。

レイヴンは現在、国の医療機関により治療を受けている。一命は取り留めたものの昏睡状態で眠り続けている。

セリスは亡国の姫として残党を集めレジスタンスを組織する。国に不満を抱く民衆も数多く参加した。

シオンは自身の力のなさを後悔していた。自分のせいでレイヴンをあんなことにしたと責めていた。彼女は自身と向き合うことを決めた。

世界はゆっくりと動き始めた。国を巻き込み、大きな渦となって全てを飲み込んでいく。

そして、全ての国の存亡に関わる黒い影が暗躍を開始した。

第十話　変わる世界

レイヴンが目覚めたのはあの忌々しい戦いが終わってから四日後だった。その間眠り続け時折うなされていた。レイヴンが目を覚ましたときは真夜中だった。

「ここは……っ！！」

痛みと供に四日前の記憶が鮮明に蘇る。

「……よく、生きてたな」

体を見ながら言う。そこでシオンがベッドの横の椅子に座ってベッドに頭を乗せて寝ていることに気がついた。そして不可解な点に気がついた。

「……何があったんだ」

シオンがレイヴンの手を握ったまま寝ている。自分が寝ている間に何があったのかと思うレイヴン。だが、考えたところで答えはでない。ほとんど体は動かないため何も出来ない。

「う、うう～ん」

「あ」

レイヴンが多少動いたためかそれとも自然にかはわからないがシオンが目を覚ました。

「……あ！？」

一瞬で状況を把握したシオンは高速で手を放す。顔は真っ赤だ。

「……」

「……」

なんとも言えない沈黙が病室を支配する。

「そ、そうだ！」

いたたまれなくなったシオンが沈黙を破る。

「起きたのなら人を呼んでこよう！！　うん、そうだ！！」

レイヴンが何か言う前にそそくさと病室から出て行ったシオン。そしてすぐに医者を連れてきた。

「ふむ、大丈夫みたいだな」

一通りレイヴンの状態を見てから医者が言った。シオンがほっと安心する。

「じゃあ、話があるからそっちのお嬢さんは出ていてくれないか」

「はい」

シオンが病室を出て行った。

「それで腕は治らないんだろう」

レイヴンが言った。険しい顔の医者。

「……そうだ。リハビリしだいでは日常生活を送るのには支障がないくらいまでになら回復するだろう。だが「魔術の使用および戦闘は不可能」そうだ」

レイヴンはわかっていたといわんばかりに口をはさんだ。事実を確認するように。

「ふう～そっか」

「……言い訳するわけではないが我々は手を尽くした。だが、その腕と奪われた右目は治しようがない。すまない」

「構わない。これで心置きなく楽してすごせる。それより、眼帯がほしい」

「あ、ああ」

医者が眼帯を渡す。黒いそれを右目につけるレイヴン。

「力不足ですまなかった」

医者はそう言って再び頭を下げて出て行った。

シオンはその全てを聞いていた。

「……私のせいか」

自分が油断しなければと後悔が沸きあがる。今更意味を成さないのに。医者が話しを終えて出てきた。

「……」

「聞いていたのか。すまない」

「いえ、本当に何とかする方法はないのですか」
「……噂だが世界のどこかにどんな怪我でも病気でも治す医者がいるらしい」
「本当ですか！」
「噂だ。私も本当の所はわからん。すがりたいならすがるがいい」
医者はそう言って戻っていった。
「……どんな怪我でも治す医者か」
噂の真偽はわからないがかけてもいいと思うシオン。
「おい、レイ……」
シオンは入れなかった。
「くそ！！！」
レイヴンの声が響く。
「ちくしょう、なんだよ。おい！！」
悪態をつきながら涙を流すレイヴン。
「これじゃ、仇討てないだろうが。誰の、誰の仇もちくしょう……」
シオンは入るのをやめた。そして静かに決意してそこを離れていった。
・
・
・

・

これは夢だとレイヴンはわかっていた。なぜならそこには死んだ孤児院のみんながいたからだ。

「ねえ、レイヴン」

金紗の髪をポニーテールにした碧眼の少女リミルが言う。

「どうしてそんなところで立ち止まってるの？」

「俺はもう前に進んでも意味がないからな」

「どうして？」

「これじゃ進んでも何も出来ない。もう、お前たちの仇を討つことも出来ない」

自身の体を見ながらレイヴンが言った。ボロボロだ。腕は満足に動かない。

「レイヴン、あなたはわかっているんでしょ。それでもアナタは前に進まなくちゃいけないって。私たちのためじゃなく自分のために」

「なんでだよ。お前は何を知ってるんだよ」

「レイヴンのこと全部。あの子私に似てるあの子のことも」

レイヴンはドキリとした。

「あの子きっと無茶するよ」

「わかってるよ。忌々しいほどにアイツはお前に似てるからな」

「ふふ、レイヴン。いいこと教えてあげる」

リミルは楽しそうに笑いながら言った。

「アナタの腕は治せるよ」
「なに！」
「この世界のどこかにどんな怪我でも病気でも１００％治してしまえる医者がいるんだよ。あの子はねきっとその医者を探しに行くよ。たとえどんな無茶をしてもね」
「バカかアイツ。魔術も使えない上に他国にいるかもしれない医者を探しにいくだと」

魔術を使えずに他国に言って探し人を探すのは至難の業だ。他国の盗賊でも魔術を使える者がいるのだ。そんなのに襲われればひとたまりもない。カリヘイブの魔法騎士団ですらあの結果だ。

「だよね。私が教えられるのはここまで、あとはレイヴンが考えて決めてね。でも、また、あんなヘタレた根性してたら私怒るからね。じゃあ、またね」

リミルたちが消える。それと同時にレイヴンは目を覚ました。

「……怒られたくはないな」

・
・
・

二日後。

「昨日はあいつ来なかったな。まあ、楽でいいだけど」
「何が楽なんだ」
「げ、シオン」
「まるで私が来たら困るみたいな様子だな」
「当たりだ。ゆっくり寝れなくなる」
「安心しろ。どのみち寝れない。シエルとセリスも来ているからな」

シエルとセリスが病室に入ってきた。

「目覚めたんだね。よかった。本当なら昨日行きたかったんだけど。色々忙しくてね」

「ようやく、王様になる準備が出来たってことか？」

「君とセリスのおかげでね」

「へ～、じゃま、がんばってくれよ」

「ああ、これからどうなるかわからないからな。君に会えてよかったよ」

「そういうことは王様になってから言うんだな」

「ふっ、そうしよう」

シエルは腕を見る。

「……あまり良くないんだろう」

「まあな」

「……ふう、まあ、僕は何も言わない。言う人間がいるみたいだからね。じゃあ、そろそろ僕は行くよ。来て早々だけど」

「ああ、じゃあな」

シエルが病室を出る。それを追ってセリスも出ていく。

「さて、私も行くとしよう。ああ、そうそう、用事が出来てな今度いつ来れるかわからない」

「ちょっと待て」

「なんだ」

「お前、話聞いてたろ」

「何のことだ」

レイヴンは鋭い視線をシオンに向ける。

「全部わかってんだろ。俺の腕が治らないこと。そしてそのことに責任感じてんだろ。そして噂を頼りに医者を探しに行くんだろ」

リミルに聞いたとおりだった。

「それは！」

「言っておくぞ。これはお前の責任じゃない。だから俺はお前を責める気はない」

と言ってもシオンは聞かないとレイヴンにはわかっていた。

「……なんでだ。なんで貴様は！！　なぜ、罵らない！！　恨まない！！　お前にはその資格があるんだぞ！！　私をかばったからその怪我を……」

「バカを言うな。仲間を恨めるかよ。それに俺が勝手に助けたんだ」

レイヴンは右手を天井に向ける。

「その結果がこれだっただけ。原因は俺。そして結果がこれだ」

「……なら、私も勝手にする」

「お前一人でか」

「当たり前だ。そのために茨の杭（ローズステイト）を受け継いだ」

茨の杭（ローズステイト）、エリアリス家に伝わる秘法。体に埋め込んで使用する。埋め込んだ部位に茨が巻きついたような文様が現れる。埋め込む部位により効果が変わり体の中心に近いほど効果が増す。埋め込むさい死んだほうがましという程の痛みが伴う。力を与える代わりに永遠の痛みに苛まれる。

「はあ、そうか……なら、俺も一緒に行こう」

レイヴンはシオンの覚悟を聞いて吹っ切れた。まあ、女の子にここまでさせておいて自分が何もしないというのが嫌なだけなのだが。いや、リミルに似たシオンに死んでほしくなかったからか。それでもレイヴンは二日の間考えてそして結論を出した。前に進むと。可能性があるのならそれに向かっていこうと。でないとリミルに怒られてしまうと。

「なんだと！！」

「リハビリも兼ねてだ。まあ、動けるようになるのに半年かな。それに……」

ぶつぶつと呟くレイヴン。

「ばかな、危険すぎる！」

「どの道医者を見つけたときに俺もいたほうがいい。あと、俺がいないと他国の魔術師に襲われたとき困るだろ。俺の堕ちた天使（ルシフェル）の悪魔の瞳（ルの瞳）ならそんな心配もない」

レイヴンは自分の左目を指しながら言った。

「だが、お前は魔術を使えないだろう」

「そう、だから、お前俺の腕になれ」

「は？」

レイヴンは物凄いこと言った。思わず自分の耳を疑うシオン。

「どうせ、お前責任感じるなって言っても感じるだろうし。だから、

お前俺の腕になれ」
「ど、どういう意味だ！！」
意味のとりようによってはそれはプロポーズにもなりえる。そう考えて微妙に赤面するシオン。
「お前が俺の代わりに魔術を覚えんだよ。そして俺が戦闘の指示をだす」
「そ、それなら、私が普通に戦った方がいいんじゃないか？」
「はあ～、お前な～、それはこの国内の話だ。国によって完全に魔術体系が違うんだよ。噂には聞いてたけど。まさか、ここまで違うとは思ってなかった」
魔術は各国によって違う。アルハザードは属性放出魔術に特化しているため後方支援向き。先の戦争相手のカリヘイブは身体強化魔術に特化しているため魔法騎士団などというものがあるのだ。そして、各国は自国の魔術を国外に持ち出さない。各国は伝わらないように徹底している。
「お前、そんな未知の相手に対抗できんのか？」
「う……」
情報は何よりも大切だ。戦闘において情報の多さが勝敗を分かつといっても過言ではない。
「そこで俺がついていく。そうすれば情報はほぼ一瞬でこちらのもの。そしてお前は俺の腕として魔術を使ってもらう。郷に入っては郷に従え、こちらの魔術を一切見せないで旅が出来る」
「ちょ、ちょっと待て、本当に私は魔術を覚えなければならないのか？」

「ああそうだ」

間単に言うレイヴン。だが、それは簡単なことではない。普通魔術を習得するには十年以上の修行が必要なのだ。だから、封印された現在の堕ちた天使の悪魔の瞳（ルシフェルの瞳）で他国の魔法を理解しても使いこなせない。理論だけでなく経験が必要なのだ。レイヴンは才能でちょっと使えただけなのとカリヘイブの魔術体系がアルハザードの魔術体系と魔法効果以外違いがなかったため。

「無理だ」

「一年半だ」

「は？」

「一年半でお前にマスターさせてやる。この俺がな」

自信を持ってレイヴンは言った。

「まあ、結構無茶するけどな。覚悟あるか？」

「……当たり前だ。いいだろ、やってやる。私が貴様の腕になってやる」

・

・

・

そして一年半の月日が経った。

一年半のうちに世界は変わった。シエル率いる反乱軍による革命が起きた。しかし、革命で流れた血はなかった。前王は革命がおきる前に既に姿を消していたのだ。そのため無血で革命は成功しシエルが王となり新たなアルハザード王国の歴史が始まった。今だ情勢は不安定だが新たな王の人柄と次々と出される新しい政策により支持率は高い。

シオンのエリアリス家は革命以前にどこかへと姿を消していた。シオンに茨の杭（ローズステイト）を埋め込んだ後に誰にも気づかれずに消えた。シオンもどこへ行ったかは把握していない。おそらくは前王と共にどこかへ行ったはずだ。そもそもこんな風に消えるなどシオンは知らなかったという。今でもエリアリス家の行方はわかっていない。

セリスは王宮の専属魔術師となっている。レジスタンスの中では王国の再建も主張されていたがセリス自身が断った。滅んだ王国が今また、再建されたとなったら国は混乱するからだ。専属魔術師としてシエルの出す無理難題をこなしている。

そして旅装に身を包むレイヴンとシオン。レイヴンの手には緑色の宝石が埋め込まれた杖が握られている。二人はこれから国中を回る旅に出るつもりだ。

「さてと、じゃあ、とりあえず行きますかね」
「ああ。とりあえずは噂のあった北からだな」

シエルが情報を集めてくれたので医者は北にいるのと情報が入ったからだ。

「レイヴン、シオン！！」

シエルとセリスがやって来た。シエルは左目に眼帯をしている。神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳の発動を封じるための眼帯だ。

「おいおい、王様がこんなとこに来ていいのかよ」
「ああ、影武者を置いてきた」

＊＊＊＊

その頃、王宮。

「うわあああああああん。早くかえってきてくださあああああああああいいいいいいいいいいいいいい」

ロキという影武者役の男が泣いていた。

＊＊＊＊

「ロキも大変だな」
「まあ、彼にはいずれ褒美を出すよ」
「そしてやれ。さて、じゃあ、行くか」
「ついでに国内の様子を見てきてくれ。この国は変わり始めたばかりだ。なにがあるかわからないからな。本当なら僕も行きたいんだけど大臣連中がうるさくてね」
「ああ、見てくるよ。じゃあな」
「ああ」

レイヴンとシエルが別れの握手を交わす。

「……また」
「ああ、医者を探すついでに少しは国を見てくる。またな」

レイヴンとシオンは旅立って行った。

「さて、僕も戻ろう。まだ、やることはたくさんある」
「……」

シエルとセリスは王宮に戻る。

四人は互いに違う道を行く。しかし、その道は同じ場所に繋がっているはずだ。

＊＊＊＊

世界のとある場所。

「シエル・クロードが計画通り王となったようです」

ガイドスが誰かに報告する。

「……」

「はい、わかっております。これで奴は自由に動けません」

「……」

「堕ちた天使の瞳（ルシフェルの瞳）は既に納めております。神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳もいずれ。問題は神の如き（ミカエルの瞳）天使の瞳が失われていることです」

「……」

誰かはしゃべっていないように見えてしゃべっているようだ。ガイドスが受け答えをしていく。

「盟主がそう言うのでしたら大丈夫なのでしょう」

「……」

「では北に神の癒し（ラファエルの瞳）の天使の瞳の持ち主が？」

「……」

「わかりました。我らが盟主。必ずや魔の瞳を持つものたちからその力を奪って差し上げます」

ガイドスは静かに去る。

世界で何かがうごめき始めていた。

第十一話　旅立ち

のどかな街道を歩いていくレイヴンとシオン。

「街道に沿って北の国境までだったな」

「ああ」

「お前なんか機嫌悪くない？」

「気のせいだ」

だが、明らかに機嫌は悪い。それもそのはず一年半のうちにシオンは魔術の全てを覚えさせられた。それはシオンにとっては地獄の一年半であった。そのおかげかレイヴンやセリスなどの本職と比べたら見劣りするものの普通の魔術師相手なら魔術のみでも勝てるレベルまでに到達した。しかしそれはレイヴンの指示つきであればという条件付だが。それは十分機嫌は悪くなる上に恨む理由になる。

『マスター、暇です。しりとりしましょう』

黙って歩いているとどこからか声がした。声がしたのはレイヴンが持っている杖。

「おいエメロードさっき、出発したばかりだろうが」

エメロードとは杖の名前。レイヴンが持っているのは世にも珍しいしゃべる杖インテリジェントロッド。魔術のサポートを目的にして特別な製法で作られた意思を持った杖。その中でもエメロードは特別らしい（買ったところの店主曰く）。普通のインテリジェントロッドと違い感情がある（レイヴンからしたらうざいだけ）。簡単な魔術なら持ち主の魔力を使って発動可能。主にシールドなど軽い

もの。しかし、うざい。店主も売れなくて困っていたらしく。王様のシエルもいたおかげでほぼただ同然で手に入れた品物。

これをレイヴンは杖代わりにしている（エメロードは不満。もっと使ってほしいとのこと。しかし、本杖はまるっきり正反対のことを言っているいわゆるツンデレである）。レイヴンが魔術を使えないのでは危険なのでないよりはましだとして購入された。

『暇なものは暇なんです。早くマスターの怪我治して私を使ってください』

「安心しろ怪我治ったら捨てる」

『そんな殺生な！！』

「二人とも痴話げんかもそこまでにしておけ」

「『痴話げんかじゃねえよ！！！』」

二人同時にツッコミを入れる。手に入れてから半年だが案外相性がいい。

『それにしてもこういう二人と一杖の旅って何かと問題が起こりそうなんですけど』

「なにが言いたいんだ？」

レイヴンがエメロードに聞く。

『いえいえ、ほら、盗賊とかよく出てきそうじゃないですか』

「そうだな。早速出てきたぞ」

先を歩いていたシオンが剣を抜きながら言った。

「あまりにもタイミングが良すぎないか」

『そうですね～』
「お前ら来るぞ！！」
盗賊が魔法陣を描く。
「え～っと、シオン右から順に火、水、風！！」
レイヴンが魔法陣を一瞥してから指示を出す。シオンはそれに一瞬で反応した。魔法陣を描くそれを三重。盗賊の魔法とシオンの魔法がぶつかる。
「うん、今のはうまくなかったか？」
「魔法陣の構築が遅い。あと一瞬俺が指示出すのが遅かったら危なかったぞ」
「それはお前の責任だ」
きっぱりと言い返すシオン。
「俺が指示を出す前に動けるようになれ」
「たった一年半でここまでになったんだぞ。十分だろ。むしろ私の優秀さを褒めろ！！」
戦闘中だと言うのに喧嘩を始める二人。
『二人とも痴話げんかしてる場合じゃないってば！！』
盗賊が剣を構えてレイヴンたちに向かってきていた。
「決着はこの後だ！」

シオンが振り下ろされる剣を受けつつ言う。

「ああ、そうだな！」

レイヴンが攻撃を全て避けながら言う。

「しかし、早くこいつら何とかしてくれ体が痛い！！」

もともと医者に戦闘は無理と言われたのだ当然だ。それに避けるしかできない。リハビリをしても腕は日常生活に支障がないくらいしか動かせないからだ。足は無傷だったので相手の攻撃は避けられるが相手に攻撃することが出来ない。

「もう泣き言か。これから先が思いやられるな」

「元はといえばこれはお前が言い出した俺の体を治す旅だろうが！！」

無視。何度も言うがこの一年半でシオンはそれはもう地獄を味合わされたためレイヴンに冷たいのである。レイヴンもこの一年半の間はほぼ恨みをはらすという意味合いも込めて魔術の訓練をしていた。そのためである。

「てめえ！！！」

『マスター！！』

「おわ！？」

エメロードの警告に反応するレイヴン。振り下ろされる剣を避ける。

「やれやれ、仕方のない奴だ」

一瞬で相手を切り伏せ。そのままレイヴンと盗賊の間に猛スピードで割り込むそのままの勢いで大剣を振るう。盗賊は例外なく吹き飛んだ。剣の腹で殴ったためだ。そしてそれに呆然としている間に残りの盗賊も気絶させる。

「峰打ちだ」

「お前の剣両刃だよな。どこに峰があるんだよ」

レイヴンのツッコミを無視してシオンは盗賊連中を縄で縛り上げる。

「おい、無視するなよ」

「……」

レイヴンを無視してシオンは盗賊の金品を掻っ攫った。

「さて」

そして何事もないように振舞うシオン。

「おい」

「なんだ？」

「お前金品盗んだろ」

「何のことだ？」

明らかにバレバレなのに白を切るシオン。

「まあ、良いんだけどさ。路銀は必要だしな」

「さて、後はこいつらを憲兵に引き渡して報奨金を受け取るだけだ

な。私が行ってくるから貴様は先に進んでろ」
「え～、普通待っとくとこだろ」
「私の足なら追いつくのは簡単だ。だからさっさと進んでおけ。言っておくが進んでなかったら殺すからな」
言い残してシオンは盗賊達を引きずって、来た道を戻って行った。
「はあ～」
レイヴンは溜め息をついて歩き始める。その足取りは重い。
『まあまあマスター。とりあえずしりとりしながら行きましょう。しりとりしてたら疲れも忘れますよ。それにいつの間にか村についてたりしますよ』
「そうか？」
渋々レイヴンはエメロードと歩きながらしりとりを始めた。
・
・
・
「ふむ、まったく進んでないな」
戻ってきたシオンが開口一番言った。
「いやいや、かなり進んだろうが。もう、街だぞ」
そう、レイヴンがシオンと合流したのは首都から三時間離れた街だ。
「私からしたら微々たるものだ」

「あのな」

文句を言おうとしてやめたシオンの手が大剣に持っていかれていたからだ。

「はあ～」

『そいでマスターここはどんな街なんす？』

「お前口調変えるのやめね」

『いえいえ、変えてないでありんすよ』

「いやめっちゃ変わってるし」

レイヴンたちがいるのはアルハザード首都から北へ三時間の位置にある街だ。別に立ち寄らなくてもよかったのだが噂を確かめるなど情報を集めるためだ。

「では、情報源の酒場に行って来るからお前はそこで野垂れ死んでいろ」

「酷いなてめえ！！」

「……」

「無視すんな！！」

無視したままシオンは酒場へと向かっていった。

「待てこら！！」

それを追うレイヴン。

適当な酒場に入るシオン。昼ごろだというのに客は多い。

「ガラの悪い連中が多いな」

レイヴンが嫌悪感をあらわにする。
「当たり前だろう。ワザとそんな酒場を選んだからな」
「しかもよ～。明らかにこっち見てるぜ～」
明らかにガラの悪い客がレイヴンたちを睨んでいる。
「気にするな。相手にするだけ無駄だ」
シオンは気にせず奥のカウンターに行く。
「マスターこの辺りにどんな怪我でも治す医者がいるという噂を聞いたことはないか」
金貨を渡しながらシオンが言った。その金貨を取りマスターは言った。
「あまりそのような噂は聞きませんがそういえば北でそのような医者がいるという噂を聞いたことがあります」
「そうか、感謝する。行くぞレイヴン」
目的を果たしてもうここにいる意味はないとさっさと酒場を出て行くシオン。
「さて、行くぞ」
「もうかよ。しかし、丁度良く北にいるとはな」
「ああ、だから移動される前に行くぞ」
来たばかりの街をそそくさと出発したレイヴンとシオンだった。

いや、売られていた漬物をシオンが買って二人は出発した。

今だ旅は始まったばかり。頼りは噂のみ。それでも二人はその噂にすがり前に進む。

間章　剣闘の少女

サーカスでは、道楽として奴隷を戦わせる剣闘が行われていた。コロシアムでは剣奴または剣闘士と呼ばれる奴隷が戦っている。

鉄と鉄がぶつかり合う、汗が舞う、血が沸き、肉が踊り、骨が悲鳴を上げる。内蔵が軋み、神経を熱する。勝者はただ一人、生き残るのはただ一人。敗者はに死を、終わりを与える。そして、一人は血の中に倒れ、一人は生き残った。

そして次の者が呼ばれる。剣闘士は地下牢にいる。地下に兵士が降りて最奥の牢へ。牢の中は暗く汚い。最奥の牢にいたのは少女だった。首、両腕、両足に鎖付きの拘束具の輪をつけている。髪は何で染めたのか赤黒く、後ろで束ねている。
着ている服はボロボロで赤黒く染まっていて不気味さを醸し出している。

少女は壁際に座り顔を伏せて手はだらんとしている。一見すれば死んでいるように見える。

「起きろ、貴様の番だ！！」
「……」

兵士が呼びかけるが少女に反応はない。

「貴様聞いているのか！！」
「……」

再度兵士が呼びかけるが反応はない。

「貴様痛い目に遭いたいようだな」

兵士が持っていた槍を構え突きを放つ。少女は槍を掴む。そして少女は力を込めて槍をへし折った。そして立ち上がる。

「チッ、出ろ」

牢の鍵が開き少女は外へでて兵士に連れられ通路を歩く。チャリ、チャリと歩くたびに鎖が音を立てる。

「あとはいつもどおりださっさと行け」

コロシアムへ続く通路を少女はゆっくりと歩いていく。

「化物め」

兵士は悪態をつくともどって言った。

チャリ、チャリ、暗い通路に鎖の立てる音が響く。通路の奥から光が漏れている。そこへ行くと通路は終わりコロシアムへと出た。コロシアムは日が照りつけている。さらに満員の観客が湧き上がっていた。

少女が出たのと反対側の入り口から巨漢の男が出てきた。少女の二倍はあろうかと言う身長だ。これが少女の相手。ここに普通の感覚の持ち主がいたのなら止めただろう。何せ男の腕はそれだけで少女の身長ほどもあるのだ。少女など簡単に肉塊にして殺してしまえる。だが、止める人間はいない。所詮は奴隷死んだところで気にする必要も悲しむ必要もない。道楽なのだから。

「なんだ、俺の相手はこんなガキかよ。楽勝じゃねえか」

男がいい拳を鳴らす。少女は何もいわない。目は前髪で隠れていてなにを考えているのかまったくわからない。

「さて、それはどうでしょうか？」

貴賓席に座っている貴族の男がコロシアムの男に言う。当然その声は届かない。

「気味の悪いガキだ。さっさと潰すぜ」

男が言い。そして死へのゴングが鳴った。

「でりゃあああああ！！」

男が少女に突進していく。少女は微動だにせず立っていた。男は右拳を振り上げ振り下ろす。

「ビビッて動けねえようだなガキイィィィ！！」

何もしなければ少女が肉塊になるのは目に見えて明らかだった。だが――。

「な、なんだとぉぉ！！」

男の顔が驚愕に染まる。少女が振り下ろされた拳を左手だけで受け止めたからだ。そのまま少女は男の腕を掴み左へと振りぬいた。

ブチブチッと肉の裂ける音とゴキィンという骨の砕ける嫌な音と供に少女が男の右腕を引き千切った。右腕のあった場所から血が吹き出す。

「ぎゃあああああ！！！」

男の悲鳴が響く。会場はあまりの事態でも沸きあがる。

少女は引き千切った腕を自分の入ってきた入り口へと投げた。血飛沫を撒き散らしながら男の右腕は通路の闇へと消えた。

「腕が！　腕がああぁぁ！！」

男は傷口を押さえ膝をつく。それを少女は何のためらいもなく蹴った。

「ごふぁ！！」

男は血を吐きながらコロシアムの壁に激突する。コロシアムの壁がへこんだ。男は前に倒れる……ことはなく一瞬で目の前に移動した少女に頭をつかまれ少女の手刀でその左胸に穴を開けられていた。少女が両手を引いた。男の首が引き千切れ心臓が抉り出される。心臓はいまだ脈動している。男の首から血が吹き出し雨のように降り注ぐ。そこで今まで何も反応しなかった少女が笑った。

「あはっ、あはははははは！！！」

血の雨の中で血の雨を浴びるように血が顔にかかるのも気にせずに笑う。ひとしきり笑ったあと少女は心臓を握りつぶし首を持ったままコロシアムをあとにした。観客は口々に言った「化物」と。

「今は無き亡国の王女様もただの血染めの化物か」

貴賓席の男が言い立ち去った。

少女は元来た通路を男の生首と引きちぎった右腕を持って歩いていた。暗い通路に鎖の音が響く。

「……まだ、まだ」

少女はそう呟いて歩いていった。

「まだ……」

少女は黙って牢への道を歩いて行った。

兵士に牢に入れられ少女は壁を背もたれに座る。　引きちぎった腕と首は無造作に床に置かれている。虫がたかってくる。

「……」

再び沈黙が世界を支配する。

第十二話　北の街とコロシアム

レイヴンたちは一週間かけて最北端の街ジェルニウスに来ていた。山脈が近いためいつも雪に覆われている街だ。街の形は円形で中心にはこれまた円形の大きな建物がある。レイヴンたちはここに医者がいるという噂を聞いてきたのだ。

「ささささ、寒い！！」

レイヴンが体を抱きしめ震えながら言った。街は吹雪いていた。

「なんだこの位でだらしない」

「お前とは違うんだよお前とは。てか、なんでお前は寒くないんだよ」

「なれているからな」

シオンはそういうがこれも茨の杭（ローズスティト）の効果である。平然な顔をしているようで今もシオンには苦痛が与えられている。

「それでこの街にはなにがあるんだ？　あのでっけえ建物はなんだ」

とにかく寒さを紛らわせるためレイヴンはシオンに聞いた。街の中心には巨大な建物を指差していう。

「ああ、どうやらあそこでは違法なサーカスが見せ物を行っているらしい。つまりコロシアムだ」

「剣闘か」

「ああ」

レイヴンはコロシアムを睨みつけている。
「前王がろくでなしだったからな娯楽でもなければやっていけなかったんだろう」
「……」
「余計なことを考えるなよ」
釘を刺すシオン。
「余計な事って」
「今すぐにでもコロシアムに突撃しそうな雰囲気だぞ」
シオンが言ったとおりレイヴンはコロシアムに突撃して戦わされてる奴らを全員解放してやると考えていた。
「お前一人でやる分には構わないが私を巻き込むなよ」
「わかってるよ」
『しかし。マスター？」
今まで黙っていたエメロードが言う。
『もう、巻き込まれているみたいです』
「は？」
『上ですマスター！』
レイヴンが上を見ると布が落ちてきていた。いや、正確には布に包まった裸の少女が落ちてきていた。
「はあ！？」

レイヴンは驚きのせいで驚きのせいで避けることが出来なかった。

「ふごっ！！」

そんなわけでレイヴンは少女に激突してレイヴンは地面に押し倒されてしまった。

「つっ！！」

「……」

「おい、呆けてないで早くどいてくれ！！」

少女はレイヴンの上に乗っているわけで少女は裸なわけで色々と見えてしまっているレイヴン。なので早くどいてほしかった。

「……」

レイヴンの上からどく少女。見ると血で染めたように赤黒い髪で首、手足に鎖のついた輪をつけていた。

『くそ、どこ行きやがった！！』

なにやら騒がしい声が聞こえてきた。

「……」

少女はレイヴンが呼び止める前に跳躍してレイヴンたちの前から消えた。

「……奴隷だったな」

「ああ、おそらく逃亡だな」

騒がしい音と供に兵士たちがやってきた。王国の兵士ではなく雇われた傭兵だろう。
「お前たち、この辺りで手足、首に鎖つきの輪をつけた女の奴隷を見なかったか」
兵士が言ったのは十中八九先ほどの少女のことだ。
「いいや見てねえな」
「私もだ」
「そうか。見かけたら教えてくれ。奴はコロシアムで戦わせていた剣奴だ。かわいらしい少女の姿だが殺された人間の数は両手で数えても足りない化物だ。気をつけてくれよ」
兵士は立ち去って行った。
「……さて、シオンあの子を捜すぞ」
「何をする気だ。あの子を匿えば下手をすると私達まで追われることになるぞ」
「かと言って見捨てられるか」
シオンが嘆息して言った。
「まったくロリコンめ」
シオンにロリコン呼ばわりされるレイヴン。
「なんでだよ！！」
「あの子に乗られて喜んでただろう」

「喜んでねえよ！！」
「……」
またも無視するシオン。
「無視すんなー！！」
「何してるあの子を探すんだろう」
「お前が俺にはわからないよ」
シオンとレイヴンは街中を探し回った。
・
・
・
「だ～！！　どこ行ったんだよあのガキは！！」
「これだけ探していないとはな。おい、レイヴン、お前の少女レーダーで探せないのか」
「お前俺を何だと思ってるんだよ」
「ロリコンだ」
「違うわ！！」
言い合っているところを目の前をさっきの少女が通り過ぎた。
「いた！！」
「！？」
少女が逃げ出す。
「ああ、ちょっと待て逃げるな！！」
レイヴンが少女の肩を掴む。掴んだと思った瞬間宙を舞うレイヴ

ン。

「は？」

少女に投げられたと認識した時には既に地面に叩きつけられていた。

「ぐは！？」

少女は走り去ろうとした。

「まあ、待て」

シオンが少女を引き止める。

「安心しろ私達はお前に危害を加える気はない」

「そうそう」

レイヴンが起き上がって同意する。少女はその言葉が嘘でないとわかったのか逃げるのを止めた。

「俺はレイヴン。で、こっちがシオン。君は？」

「……私はリニアーヌ・リバドリス・アスタニア。リア」

「その名前お前アスタニア王家の生き残りか」

「アスタニア王家？」

シオンの言葉に疑問を浮かべるレイヴン。シオンはレイヴンを見て呆れる。

「お前学院で何を学んで――いや、学んでなかったな」

「バカにするなよ。少しは学んだよ」
「じゃあ、なぜこんな一般教養がわからん」
「興味ないから」

きっぱりと言ったレイヴン。

「はあ、まったくお前と言う奴は。いいだろう説明してやる。アスタニア王家とはアスタニアを治めていた王家のことだ。アスタニアは今のカリヘイブ領の東にあった国だ。数年前にカリヘイブに侵略されて滅んだ」

シオンがレイヴンに説明した。

アスタニア王国。その昔、カリヘイブの東に位置していた国。アスタニア王は賢王として大陸中に名を馳せていた。国は豊かで平和な国であった。しかし、当時まだ、小国であったカリヘイブによりアスタニアは滅ぼされた。その勢いでカリヘイブは短期間で今のような大国にまでのし上がったのだ。そして、王家の血は完全に途絶えたと思われていた。

「なるほど。で、リアはそこの生き残りってわけか」
「はい」

リアは頷いた。

「どっかで聞いた話だな」

レイヴンがひとりの女を思いながら言った。

＊＊＊＊

「……へぷし！！」

セリスがくしゃみをした。

「風邪かい？」

隣に来たシエルが心配そうに聞く。

「……違う。誰かが噂しているだけ」

「そうかならまだ仕事増やしても大丈夫だな。今やってるのにプラスしてグラベル魔術研究所の研究についてと魔術による開拓作業の指示と王立図書館の魔導書の確認、王立魔術学院の創設も頼むよ」

セリスの机に新たな書類が積み上げられる。小柄なセリスはほとんど書類に埋まっていると言ってもいい。

「……死ぬ」

「大丈夫だよ。人間はこれくらいでは死なないよ。じゃあ、頼んだよ」

シエルはセリスの執務室をでて次の部屋に行く。

「ロキやってるかい？」

ロキは机に突っ伏して死んでいた。

「ふう、仕事中に寝るとは……」

シエルがロキに近づいていく。

「起きないと給料下げるよ」

ガバッと起きるロキ。

「それだけは勘弁してください！！」
「さて、起きたところで次の仕事だよ」
「死にます！！」
「人間は少し無理をしたところで死なないよ。それにもっと僕達を頼ってくださいと言ったのはどこの誰だい？」

言葉を詰まらせるロキ。そのことを言った張本人である。

「いや、確かに言いましたけど！！　だからってこれはないですよ。どんだけ仕事回してくれるんですか！」
「これでも少ないほうだよ。僕なんていつも終わらない仕事に悩まされてるんだから」
「これで少ないって王様は一体どれだけ仕事してるんですか」
「さあさあ、しゃべってないで仕事だ。はい、これ追加」

ロキの机に書類が置かれる。顔が引きつっているロキ。

「いつかきっと死ぬ」
「安心しろそれが終わったら休みだ」

シエルは言い残してロキの執務室を出て行く。

（やることは多い。まだまだ、国は安定しない。休んでいる暇はない）

窓から城下を見るシエル。

「レイヴンたちはどうしているだろうか。まあ、大丈夫だろう。さて、仕事だ」

シエルは執務室に戻っていった。

＊＊＊＊

「とりあえず、宿屋にでも行くか。このままの格好じゃまずいだろ」

「そうだな。とりあえず、そこに宿屋がある」

宿屋に行くことにした二人。

「いいの？」

「何が？」

「私を匿ったらあなた達も追われることになる」

「関係ないだろ。俺は兎も角この女は逆にあいつらを返り討ちにするだろうし。それにお前ひどい目にあって来たんだろ？　そんな奴を俺は見捨てられないし」

レイヴンを不思議なものを見るような目で見るリア。

「コイツはそんな奴だ。気にするだけ疲れるだけだ。遠慮はするなあの程度なら返り討ちに出来る」

「さあ、行くぞ」

「あ、ありがとう」

三人は近くの宿屋で部屋をとった。

「さて、私はリアの服を買ってくる」
「ああ、頼んだ」

シオンが宿屋を出て行った。

「さて、エメロード結界張っといてくれ」
『イエスマスター。四方にて我らに守りを与えん』

結界が張られる。

「喋る杖？」
『そうですよ～。エメロードいうですよ～。よろしくリアちゃ～ん』
「よ、よろしく」

ペコリとエメロードに頭を下げるリア。

『はわ～、可愛いです。お持ち帰りしたいです。抱きしめたいです～』
「どっちかと言えばお前が抱きしめられると思うけどな」
『むう、マスターはわかってないようですね。ノリですよノリ』
「確かに東方の海苔は旨いよな」
『その海苔じゃないです！！』
「クスッ」

レイヴンとエメロードのやりとりを見て思わず笑みがこぼれるリア。

「あ～」
『……』

ちょっと気まずくなるレイヴンとエメロード。

「……すみません。でも、楽しくて笑ったのって久しぶり……」

長い期間闘技場ですごしてきたリアには笑う機会はなかった。闘技場ではいつも命の奪い合いをしてたのだから。

「いや、いいよ。それよりも」

レイヴンが通りに面する窓から外を見る。兵士が宿屋を囲んでいた。数は五十以上。宿屋主人が隊長と思われる人物から金の入った革袋を受け取っていた。

「囲まれたな。あの宿屋主人め。何か狸みたいな感じがしたと思ったら。今度会ったらただじゃおかねえ」

「私のせい……」

「いや、気にすんなよ。これも承知の上だ。さて、問題はシオンがいつ戻るかってことをお前の結界が保つかだな」

『あの数の兵士が一気に魔術で攻撃してきた場合一分と保たないです』

「そうか、ならシオンが間に合うかだな」

外の様子を伺いながらレイヴンは脱出する方法を考える。完全に宿屋の周りは囲まれている。それに宿泊客はレイヴンたち以外いないため容赦なく魔術での一斉攻撃が出来る。結界は一分しか保たない。

「さて、どうしたもんかな。俺は戦えないし」

「これくらいなら楽勝で皆殺しに出来る……」

リアが言う。簡単だと。五十人以上を一人で皆殺しにするのは簡単だと言った。

「それはやめたほうがいいな。これからお前が自由になるためには得策じゃない」

だが、レイヴンにはそれをさせるつもりはなかった。

「でも……」

「ようはここから逃げられればいいんだからな。う～ん」

窓の外を見渡す。向かいの建物には誰もいなかった。

「お～し、じゃあ、こうしよう。リアにも手伝ってもらうぞ。俺は戦えないからな」

「なに？」

レイヴンがリアに耳打ちする。

「出来るか？」

返答の変わりに頷くリア。

「なら、やるぞ」

＊＊＊＊

「なんで隊長はあんな小娘一人にこんな人数をあたらせるんです？確かに今まで捕まりませんでしたけど」

兵士の一人が言う。それにもう一人の兵士が答える。

「お前は知らないのか。あの小娘は化物だよ。剣闘で何十人も殺している。気をつけろよ」

「は、はい！！」

その時命令が下った。

「行くぞ――煉獄の炎の矢バーニングアロー！！」

何十人もの兵士が一斉に炎の矢を放った。

第十三話　雪に舞うは美しき雪ではなく

「危ねえ～」

レイヴンとリアは向かいの建物の屋上にいた。直撃の瞬間にリアがレイヴンを抱えて跳んだのだ。

「……無問題」

「しっかし、本当に容赦ないな。まあ、いいとりあえずシオンと合流しよう」

「……了解」

「って、やっぱまた、それか――うあああ！！」

リアはレイヴンを抱えたまま跳躍する。屋根から屋根に飛び移っていく。

『いたぞ！！　追えええ！！』

通りを走って追ってくる兵士たち。

「しつけえ～」

「……とりあえず、シオンさんを見つければなんとかなる？」

「まあな、お前がやるよりも確実だし。誰も殺さないでできるだろ」

「……そう」

建物から建物に飛び移りながら会話する二人。この状況に慣れたレイヴンであった。

『マスタ～』

「どうしたエメロード？」
『酔いました』
「そうか」
軽く流すレイヴン。杖が酔うはずがない。
『軽くスルーしないでくださいよ～』
「杖が酔うわけないだろ」
『私が普通の杖と同じと思っているですか～。私は特別なんですよ～』
「あっそう」
そのあとは完璧にレイズンはエメロードを無視。
「さて、ったく、シオンの奴はどこにいるんだ？」
「……服を買っている？」
「ああ、だから、この辺り、避けろ！」
レイヴンの言葉にリアが反応し横に飛ぶ。雷属性の魔法シデンがレイヴンとリアの横を通り過ぎる。
「あぶねえ～」
『マスター』
「どうした？」
『前にも敵です』
エメロードが言ったとおり前の屋根の上にも兵士が集まっていた。先回りされたというよりは魔術で連絡を受けた別部隊が来たということだろう。

「やば！」
「……大丈夫」
「は？」
「……行く」
「はあああああ！？」

リアはそのまま兵士の一団に突っ込んだ。レイヴンを抱えたまま。

「い――がッ」
「やれ――ぐあ！！」
「ま――ぐはっ！！」

一瞬のうちにリアはレイヴンを抱えたまま兵士の一団を行動不能にした。

「すげ」
「余裕」

言っている間に兵士たちが続々と屋根の上に上がってきた。

「じゃあ、行きますよ」
「ああ」

そこからまた屋根を飛び移りながら移動するリアとレイヴン。

「さてと、シオンはどこだ？」

ほとんど街に人は出ていないのですぐに見つかるはずだ。ただでさえシオンは目立つのだから。それなのにシオンは見つからない。まだ、店の中なのだろうか。

＊＊＊＊

一方、レイヴンたちが必死に逃げ惑っている頃のシオン。

「う～ん、しかしなあ、これも似合いそうだし。あ、これとかもいいなどれもにあいそうだ」

服屋の中で大量の服を前にあれでもないこれでもないと服を見ては服の山の中に戻している。

「う～ん、やっぱりフリフリのスカートとか着せてみたい」

リアがフリフリのスカートを着た姿を想像して悶えていた。

「……私はこんなもの着たことなどないからな。あ～これもいいな」

一人で笑いながら服を選んでいる姿は少し不気味である。そのため店員も来ない。

「あんな妹がいたら楽しいだろうな」

それは毎日弄れるからだろうか。

「しかし、リアにならスカートよりは動きやすい服がいいだろうな、ふむ、しかし、やはり……」

いまだに迷い続けていた。こういうのは本人がいないとどうにもならないと思うのだが。

「しかし、リア本人を連れてくるのも問題だ。しかし……ん？」

そこで外の騒ぎが耳に入ってきた。

「ふう、どうやら、私がいないとどうにもならないようだな。店主」

「はい」

店主がすぐに出てきた。

「とりあえずこれとこれとこれとこれを買おう」

「あ、ありがとうございます」

一人分にしてはかなり数が多い量を一気に買う女客に少し引きながらも通常通りの対応をする店主。

「これで足りるか？」

金貨を五枚出すシオン。

「は、はい、多すぎるくらいです。いまお釣りを」

「いい、時間がないからな。じゃあ、もらっていくぞ」

皮袋に入れられた服を持ってシオンは店を出た。

＊＊＊＊

「いた」

リアがシオンを見つけた。

「どこだ！」
「あそこ！」
リアが指差す方向を見るがまったくレイヴンにはシオンの姿は見えなかった。
「どこだ？」
「行く」
一際強く勢いをつけて跳躍するリア。
「おああああああああああああ！！！！」
『ぎゃあああああああああああ！！！！』
悲鳴を上げるレイヴンをエメロード。そしてシオンの目の前に降り立った。
「おお、ちょうどいいタイミングだな。ほら、服を買っておいたぞ」
「ありがとう」
「それでレイヴンなぜ貴様はリアに担がれてるんだ」
三白眼でシオンがレイヴンを見つめながら聞く。
「どうでもいいだろうが」
「なるほど足手まといになっていたわけか」
「うっせ～」
リアが担いでいるレイヴンをおろす。降りた途端へたり込むレイヴン。

「もういやだ。あんなのはしたくない」
『同感～目が回る～』
「さて、それはいいが囲まれたぞ」

レイヴンが顔をあげると大勢の兵士に囲まれていた。そして兵士の雇い主と思われる恰幅のよい男が前に出て来た。いかにも金に貪欲そうな顔をしている。嫌悪感で顔をしかめるレイヴン。

「そこの商品を返して貰おうか。いくら化物でも商品だからなあ」

男が言う。完全にリアをもの扱いしている。そのこともレイヴンの気分を悪くしていく。

「落ち着け」

シオンがレイヴンに釘を打つ。

「わかってるよ」

どの道レイヴンは何も出来ないのだから。

「渡したくないといったら？」
「まあ、貴様らに金があるのなら売ってやるよ。だが、金がねえのなら貴様らを殺して……いや、そっちの女は商品にしてやる。高く売れそうだ」

舌をなめずりながら男は言った。

「ふむ、それは困るな。私はそれに私は売り物にはならないと思うぞ」

「そうそう、こんな暴力女が売り物になるはずねえ」
レイヴンをぶん殴るシオン。
「いってな！！」
「貴様が余計なことを言うからだ」
「本当のことだろう！！」
『二人とも痴話げんかもそれくらいにしないと』
「「痴話げんかじゃねえ（じゃない）！！」」
しかし、エメロードの言葉で一端喧嘩をやめる二人。
「はあ。で？」
「なに？」
「だから、いくらだ」
シオンが男に聞く。
「はは、まさか、金があるとでも？」
「だから、いくらかと聞いている」
「……金貨千枚だ」
「おいおい、いくらなんでも――」
「これでいいか」
シオンが皮袋を投げる。
「おい」
男が兵士に皮袋を拾わせる。男が受け取り中身を見た。

「おおおおおお！！」
「それで足りるはずだ」
「おおお、十分だくれてやる。さて、帰るぞ！」
男は兵士を率いて帰っていった。
「おいおい、どこにそんな金なんてあっただよ」
「ああ、この前盗賊を引き渡しに行ったときに報酬のほかにシエルの金を奪って来てたんだ」
「お前、鬼畜だな」
リアが二人のそばに行く。
「さてと、これでリアは自由だ。まずは首輪を……」
そこでレイヴンたちがリアの首輪をはずそうと手をかけた瞬間地面が凍りついた。全員の足ごと凍りつき身動きが取れなくなる。
「なに！？」
「さて、商品を回収して、戻るぞ。上玉だ」
先ほどの男が戻ってきていった。どうやら初めからリアを渡すつもりはなく金だけ奪い。更にレイヴンたちも商品とするつもりだった。
「不覚だ。こんな奴らに遅れをとるとは」
不意にリアが氷を無理矢理砕き男へと疾駆する。その跡には紅い点が続く。氷を砕いたときの傷だ。

「おっと、動くなよ化物」

まさに男に殴りかかろうとしたとき男が言った。動きを止めるリア。

「ゆっくりと後ろを見てみな」

リアが振り向くとレイブンとシオンを兵士が取り囲んでいた。

「（シオン、魔法で氷とかして逃げろ）」

小声でレイヴンがシオンにささやく。

「（無理だな。この数だ。逃げたところで蜂の巣にされる。私だけならまだしも貴様がいればなおさらだ）」

「（俺のことは気にすんな）」

「（駄目だ。ここはおとなしくしておけ。なに、あいつは私たちを商品と言ったんだ。しばらくは殺されはしないだろう）」

武器を取り上げられ手を縛られたレイヴンとシオン。

「連れて行け」

リアと共にレイヴンたちはコロシアムの地下へと連行された。

第十四話　逃亡

レイヴンは兵士と共に地下牢へと来ていた。

「ここに入ってろ！！」

「で！」

そしてそのまま地下牢に放り込まれたレイヴン。一人だけだ。近くにはシオンもリアもいない。あの男によってどこか別の場所に連れて行かれたようだ。

「商品にするつもりならもっと丁寧に扱えよ！」

見張りの兵士にレイヴンは言う。

「お前の連れの女は丁寧に扱ってるよ」

「なんであいつだけ！？」

「お前売れなさそうだからだ」

きっぱりといった兵士。

「なんでだよ！！　俺結構、美形じゃん！！」

「いや」

即答で否定した。

「ひでえ！　そこは頷いといてくれよ。嘘でもいいから」

「うるせえ、それを言ったらオレの方がイケメンだろ」

「いや」

レイヴンはも即答した。
「お前な、してもらいたかったら自分もしろよ」
「いやだよ。俺うそつかない主義だし」
「お前……この槍で突き刺してやろうか」
兵士と軽いコントを繰り広げるレイヴン。
「ったく、お前変な奴だな。普通。こんな牢屋に入れられたらもう少しなにかあるだろうに」
「いや〜」
なぜか照れるレイヴン。
「ほめてねえよ」
兵士が照れるレイヴンに突っ込みを入れる。レイヴンが真面目な顔に戻った。
「あんたいい人だな。ほかの兵士の奴らとは違うな」
「オレはこの街の人間だからな。生活が苦しくてここに働きに来てんだよ。わりと良い仕事場だぜ」
「そっか」
レイヴンは頭の後ろで手を組み壁に寄りかかった。
「なあ」
「ん？」
「どうしてこの街にはこんなコロシアムみたいなもんがあるんだ？」

レイヴンの疑問に兵士は答えた。

「何もないからさ。この街には何もない。だから、王も気にしないだからコロシアムっていう娯楽が生まれたんだよ」

「それは昔からなのか？」

「いや、一昔前は何かあったらしい。オレは知らねえ。だが、火山の噴火で全部なくなったらしいぜ」

街の近くには火山があると言う兵士。

「マジかよ。危なくないのか？」

「ああ、もう、活動してないみたいだからな。まあ、弊害としてお湯が出る程度だな」

「へ～。そりゃいいな」

お湯が出るという話にレイヴンは良かったじゃないかという風に言った。だが、兵士はとんでもないと言う。

「あんなの出られたら困るぜ。街は水浸しになるし」

「どうしてだ？」

レイヴンは不思議そうにする。

「埋めるのが大変なんだよ」

「なんでうめるんだよ。はいればいいのに」

「は？」

今度は兵士が不思議そうにする。

「そうか、こっちまで伝わってねえのか」

レイヴンはこの街の環境を考えて納得する。

「おい、どういうことだよ」

兵士は俄然興味が出てきたらしい。

「いやな、東方の国ではそれは温泉って言ってな入るとかなりいいらしいんだよ」

「そうなのか？」

「ああ、俺も書物でしか見たことはないけどな」

「へ～、それなら埋めたのはもったいなかったな」

兵士が残念そうにする。

「埋めただけなんだろ？　また掘れば出てくるって。そしたらさそこを開放してだれでも入れるようにしたらこんなコロシアムいらなくないか？」

「そうだなあ～。でもなあ、そんな施設を作る金はこの街にはない」

「任せろ。なあ、紙とペン貸してくれるか？」

「あ、ああ、だが、何に使うんだ？」

兵士がレイヴンに紙とペンを渡す。

「手紙だよ」

「誰に？」

「秘密だ」

そう言っている間にレイヴンは手紙を書き終えた。何回かしきり

に読み直してからそれを兵士に渡す。

「よし、これを首都の王様まで届けさせてくれ」

「おいおい、大丈夫なのかよ？　王様が変わったはいいけどこんなとこに構ってる暇あるのかよ」

「まあ、あとは運しだいだな」

「……わかったとりあえずいますぐ届けさせよう」

兵士が手紙を出しに行った。

「さてと、とりあえず助けが来るまでどうするかな」

レイヴンは天井を見つめてながら呟いた。

＊＊＊＊

シオンは腕に鎖を巻かれて壁にくくりつけられていた。そこにあの男が入ってくる。

「良い趣味だな」

「ああ、女はここで調教するのが楽しみだ」

金に貪欲で変態とは何も言うことがないシオン。

「さて、まずはお前がどれくらいで売れるかどうか確かめないとなあ」

舌なめずりしてシオンに近づいていく男。

「残念だったな。私は売れないぞ」

「ふん、それは私が決める」
「なら、止めはしないが後悔するぞ」
シオンの言葉をあざ笑う男。
「ふん、私は何人もの女を見てきた。だが、そのどれも私を後悔させたことなどない」
シオンの顎を持ち顔を近づける男。
「お前は特によさそうだからなあ」
男は一気にシオンの服を剥ぎ取った。
「え？　う、うわあああああ！？」
そしてシオンを見た瞬間無様に叫び声をあげて尻餅をついた。
「な、なんだ貴様！？　何なんだよ！？」
シオンの胸、つまり体の中心に何かが埋め込まれていた。それはシオンの体を浸食していた。浸食された部位はグロテスクに脈打っている。
「貴様に答える義理はない」
シオンが両腕に力を込める。つけられた鎖が悲鳴をあげ引き千切られた。自由になった腕をほぐしていく。
「ば、化物！！」

「どうとでも言うがいいさ。どうせここで死ぬんだからな」
「え？」
男の顔は驚いたまま固まった。一生動かすことはない。いや、既にその一生は終わり動かす事は不可能。シオンの手刀により男の首が宙を舞った。
「さて、装備はああ、ここにあったか」
代えの服に着替えシオンは大剣を背負う。
「私の装備だけだな。さて、レイヴンとリアはどこだ？」
部屋をでようとしてシオンは思い出したように部屋の中にもどる。
「金は返してもらうぞ」
男の懐に入っていた金を全て自分の金袋に入れ替えてシオンは部屋を出た。途中会った兵士は皆同様に気絶させながら通路を進んでいく。
＊＊＊＊
エメロードは地下の武器庫の隅っこに立てかけられていた。
『さてと、マスターを助けに行きましょうかね』
呟いたエメロードが光り輝き。次の瞬間には杖は消えて緑の髪の七、八歳くらいの少女が現れた。その少女はエメロードである。なぜか人型なれる。この基本自分では歩きたくないエメロードはこの

能力をほとんど使うことはない。

「さてと、こんなもんですかね～？　さあ～マスターを助けにレッツゴー」

コソコソと辺りを気にしつつ武器庫を抜け出すエメロード。小さいおかげか暗い通路の中で見つからずに地下牢のエリアまでこれた。さらに上の方で騒ぎもおき兵士は出払っていたためまったく警備はいなかった。

「おお、ここですね。さてと、今のうち今のうち」

守衛室で鍵とレイヴンの装備を奪い。牢屋の続く通路へ入っていく。見張りはいなかった。

「楽勝楽勝」

「貴様誰だ！！」

はい、見つかってしまったエメロード。予想外のことで硬直する。

「ああ、良いって良いって。そいつたぶん俺の杖だから」

近くの牢屋にはレイヴンがいた。

「あ、マスター」

「おお、本当に俺の杖だった。お前人型になれんのかよ」

「って、確証なかったんかい！！」

エメロードがツッコミを入れる。

「まあな」
「……」
そんなレイヴンとエメロードの様子をぽかんとした様子で見ている兵士。
「とりあえず私は杖に戻るです。あとよろです」
エメロードが杖にもどった。
「さてと、はい、脱獄っと」
レイヴンが鍵をあけて外に出る。
「な！　どうやって！？」
「ほら、エメロードが鍵もって来てくれたから」
『何か上で騒ぎが起きてたから楽でしたよ』
上から衝撃が伝わり砂が落ちてくる。
「どうせシオンが暴れてんだな。さて、俺は行くよ」
ちょうど良く天井が崩れリアを抱えたシオンがやってきた。
「お～、案外早かったな」
「ふん、こんな所に何時までもいられないからな」
「さて行くか」
「ま、待て」
出て行こうとする三人を兵士が呼び止める。

「悪いな。ここで捕まるわけにはいかないんだよ」
「違う。お前たちを捕まえようとは思わない。抜け出すならこっちだ」
「逃がしてくれるのか？」
「ああ、あんたはオレたちの街に希望をくれたからな」

兵士の言葉にレイヴンは照れたように頭をかく。

「いや、大袈裟過ぎだって」
「大袈裟なんかじゃないさ。こっちだ」

兵士について行くと誰もいない街の反対側に出た。

「あとは運次第だ。見つかるなよ」
「ああ。そうだ、あんたどんな怪我でも治す医者を知らないか？」
「あんたらあの先生を探しにきたのか」

兵士はどんな怪我でも治すという噂の医者知っているようだった。

「いたんだな！？」
「ああ、だけど、三日前に出て行ったよ。しかし、あの先生は凄いぞ。治らないって言われた怪我も一瞬で治しちまったんだからな」

どんな怪我でも治すという噂も真実のようだった。

「どこに行ったんだ？」
「北さ。山脈を越えてヘイズヘイブに向かった。無事に越えてるといいんだが」
「シオン！　北だ。まだ、北にいるってよ！！」

「よし、では、行こう」

そのままの装備で山脈を越えると言った二人を慌てて止める兵士。

「ま、待て！？　そんな装備じゃ死にに行くようなもんだ！！」

「つってもな。追われてる身だからな」

「あいつらは雇われた傭兵だ。雇い主が死んだらすぐに街を出て行くはずだ」

逃げている途中に雇い主が死んだという話を聞いた兵士が言う。

「だが、すぐに追いかけないと医者がどこかに行ってしまうだろう」

シオンが兵士に言う。

「大丈夫だ。あの先生なら山を越えるのに一週間以上はかかるあんたらなら三日で山を越えられるしあの先生は一つの街に最低でも一週間はいる十分追いつける」

三日前に出て行ったのならまだ医者は山の中だ。それにそんな所で会ったとしても充分な治療は出来ないだろう。

「なるほど、なら大丈夫か」

「兵士たちがいなくなれば装備も整えられる。それまでは家にいるといい。この辺にある赤い屋根の家だ」

「そんなに世話にはなれねえぜ」

「なに、これ位軽いもんさ。それに宿泊代は貰うからな。それに、うちの女房のメシは旨いからな」

笑いながら兵士は言った。レイヴンも笑う。

「はは、そりゃいいな。わかったよ。俺はレイヴン。こっちの二人はシオンとリアだ」
「オレはエギンだ。こっちだ行こう」
エギンの後についてレイヴンたちは家に向かった。

第十五話　温泉

雇われた傭兵兵士が完全に街からいなくなったのはそれから一週間後であった。レイヴンたちはその間エギンの家に厄介になっていた。エギンの女房のソアルも良い人であった。

「ほらほら、働かざる者食うべからずさっさと働きな！！」

寝起きのレイヴンとシオンに言うソアル。この一週間レイヴンとシオンはこんな感じでこき使われていた。レイヴンは裁縫、シオンは畑を耕すという普通役割が反対の仕事をしていた。

それが終わり朝食を食べている時エギンが戻ってきた。

「傭兵が完全に引き上げたぜ」

「やっとか長かったな」

「奴らにもプロ意識があるんだろうさ」

傭兵にも流儀があり与えられた仕事は報酬分はやるらしい。しかし、それ以上はやらない。

「さてとそれじゃ――」

「ちょっと待ってくださいよ先輩」

薄い茶髪の男が入って来た。

「フェル！？」

本名フェンリル。通称フェル。文官でありながら優秀な魔術師で

もある。シエルの部下。なぜかレイヴンの事を先輩と呼ぶ。

「何でお前がここに？」

「酷いなぁ。先輩が呼んだんでしょう？」

何のことだかわからないという顔をするレイヴン。

「温泉ですよ」

「あ！！　もう、来たのかよ」

「もともと、この街のコロシアムはなんとかする予定でしたから先輩の案は簡単に採用されましたよ」

その時の様子を語るフェル。

・
・
・

回想開始。

アルハザード王宮

「シエル様。手紙が届いていました」

ロキがシエルに手紙を渡す。

「おっ、レイヴンからだな。なんだ、まだ北にいるのか」

「みたいですね」

シエルがレイヴンの手紙を読む。

「へえ、見て見ろよロキ。面白いことが書かれているぞ」

「何です？」

ロキがレイヴンの手紙を見る。

「ジェルニウスの街おこし計画？　温泉？」

レイヴンの手紙を要約するとこうだ。ジェルニウスの街には温泉が出るから設備を整えて民衆に開放すればそれ目当てで人が来て名物になる。ついでにシエルが入りに来れば宣伝になる。

「な、面白いだろ？　ちょうどジェルニウスはなんとかしたかったんだ。しかも、温泉はこの国では珍しいからな。よし、北の事業はこれにしよう。フェルを呼んでくれ」

「はい！！」

ロキがフェルを呼びに出て行く。シエルは再びレイヴンの手紙を見る。

「しかし、手紙を寄越したらと思ったら久しぶりの挨拶もなしか。まあ、あいつらしいか」

ロキがフェルを連れて戻って来た。

「さて、フェルにはジェルニウスに行ってもらう。そこでレイヴンが提案したジェルニウス街おこし計画を実行してもらうよ。はい、計画書」

シエルがフェルにレイヴンの手紙を渡す。

「流石先輩というかですね」

フェルは手紙を読み終えて行った。

「だろ、まだ、あっちにいると思うからこき使ってやれ」

「了解しました。では、行って参ります」

「ああ、何人か部下を連れて行くといい」

「いえ一人で充分ですよ。足りない分は向こうで調達します」

「そうか」

フェルは部屋を出て行った。

・　・　・

回想終了。

「というわけです」

「そうか、頑張れ」

「先輩もやるんですよ。もちろんシオンさんもね」

その言葉に今まで無関係を装っていたシオンが反応する。

「待て、なぜ私まで手伝わないといけない？」

「シエル様曰わくシオンの力は役に立つだろうしやらないと東方の輸入品は全て規制してやるだそうです」

「くっ！　わかったやってやる」

フェルが手をパンパンと二回叩いて言う。

「じゃあ、行きましょう。傭兵の皆さんはもう働いてますし」

「なに？　まさかこの街にいた傭兵か？」

「はい、ちょうど良く街から引き上げて来てたのでスカウトしときました」
「おいおい」
「あ、そうそう」

フェルがエギンに向き直った。

「街の人も雇ってるのでどうですか？　給料はいいですよ？」
「本当か！？　よし、行くぜ」
「はい、ではみんなで行きましょう」

フェルに乗せられレイヴンたちは工事に駆り出されたのであった。

温泉を魔法で掘り起こし温泉を流す水路を作りコロシアムを解体して温泉施設を建てた。全て魔法を使っていたためからに二日で全ての工事は終わった。

傭兵と工事に参加した住人にはかなりの額の給金が支払われた。

そして温泉は開店した。珍しい温泉に人々は注目し入りに来た。レイヴンたちも入っている。

「ふう～良い湯だ～」

レイヴンが湯に浸かりながらいう。早く出発する気は失せていた。こうなれば入っていったほうが得である。女湯にはリアとシオンも入っていた。

「ここいいかい？」

くつろいでいたレイヴンに声がかけられる。
「ああ、どうぞ」
ふと、そこで先ほどの声がどこかで聞いたことのある声だと気がついた。声の主を見てみると。
「な！？　シエルてめえこんなところで何してやがる！！」
王宮にいるはずのシエルがなぜかレイヴンの隣にいた。
「なにって君の計画通り進めているだけだよ」
シエルは言ってレイヴンが書いた手紙を見せる。
「確かに入りに来いとはいったけどさ。早すぎるだろ」
「僕もそれは思っただけどね。ロキが行けとうるさくてなあ」
「ああ、そう」
シエルが入ることで温泉の宣伝は文句なしとなるだろう。これでこの街も大丈夫だと思うレイヴン。
「それで？」
「なにがだ？」
「医者は見つかったのか？」
「ああ、まだ、北に進んでるらしい」
「そうか、それはよかった。さて、僕はもう行くよ」
シエルが立ち上がる。

「おいおい、まだ、入ったばかりだろ」
「これでも王様だからね。忙しいんだ。ここにも無茶してきたからね。仕事をサボるわけにはいかないさ」
「あんま無茶するなよ」
「わかっているさ」

シエルはさっさと浴場を出て行った。

「さ〜てと、俺はもう少し入ってから行きますかね」

肩まで湯に浸かるレイヴンであった。

・　・　・

そして、山越えの準備を整えてレイヴンたちは街を出発しようとしていた。

「ありがとよレイヴン」

見送りに来ていたエギンが言う。

「俺は何もしてないぜ」
「してくれたさ、色々な」

手をレイヴンに差し出すエギン。それをレイヴンは握り返した。

「また、温泉入りに来い。今度来た時はこの街の変わった姿を見せてやるよ」
「ああ、楽しみにしてる」

シオンはソアルに別れを告げていた。

「アンタも大変だね」

「気にすることじゃない」

「そうかい、まあ、なんかと大変だろうけどがんばりなよ」

「気遣い感謝する」

出発する二人をリアはフェルと見ていた。

「じゃあなリア」

レリヴンが言った。

「うん」

「なに、一生の別れってわけじゃないんだ。また会えるよ」

「このロリコンならどこにいても見付けられるだろうしな」

「なんだと！！」

喧嘩を始めそうな二人をフェルが止める。

「まあまあ、二人とも」

「まあ、フェル、とりあえずリアは任せた」

「任せてくださいよ先輩。悪いようにはしませんって」

リアはフェルと共に王宮に行きそこで育てられることとなった。このままレイヴンたちについて行かせるのは危険だと判断したからだ。それにアルハザードでは力が必要だからだ。

「まあ、よろしく頼むよ。じゃあな」

「またな」

「……また」
「では、また先輩」
レイヴンとシオンは北の隣国ヘイズヘイブへと歩を進めた。

第十六話　国境越え

レイヴンたちが山に入って二日目。頂上を越えて下りに入った頃。

「さ、寒いというか前がみえねえええええ！！！」

レイヴンが雪山の真ん中で叫ぶ。吹雪のおかげでほとんど前が見えない。上にマントの上からも寒さが身にしみる。

「叫ぶな！　雪崩が起きたらどうする」

シオンがレイヴンを殴る。レイヴンの声よりシオンの声の方が響いている。

「お前の方が響いてんじゃねえか。それにしてもやばいな街より寒い。頂上を越えた辺りからもっと酷くなった。わかってはいたがこんなとこ本当に医者が通れるのかよ」

「確かにな。聞いた外見だとしたら無理だろうが嘘を言っていないのならそうなのだろう」

レイヴンたちが街で聞いた医者の外見は予想外でありえそうもない外見だったのだ。聞いた話によると医者は十二歳位の少女だったらしいのだ。それも人形みたいな少女らしい。ブロンドの髪で翡翠のような瞳をしていてゴスロリ風の服を着て白衣を羽織っているらしい。叩いたら折れると思えるほど華奢らしい。

「そんな女の子がこんな山本当に越えられるのかよ」

「知らん。だが、こちらに向かったと聞いただろう。なら、ここを通ったのは間違いない」

「けど、マジで吹雪いてるんですけど」
吹雪は先ほどよりも勢いを増している。視界はもっと悪い。
「まだまだ余裕だ」
「お前の体はどうなってるんだよ」
平然と歩きだすシオンに半ば呆れながらレイヴンは進む。
・
・
・
「ん？　レイヴンあれを見ろ」
「あ？　なんだよ」
レイヴンがシオンの指差す方向を見る。しかし、吹雪のおかげで何も見えない。
「何も見えないぞ」
「あそこだあそこ」
レイヴンが目を凝らすとかろうじて明かりのようなものが見える。
「明かりみたいだな」
「ヘイズヘイブの兵士のようだが……」
「お前よく見えるな」
呆れたようにシオンを見るレイヴン。
「これくらい当たり前だ」

普通の人間には出来ねえよと思うレイヴンだが、黙っておくことにしてなぜ、ここにいる兵士が集まっているのかを考えるレイヴン。

「ありえるとしたら戦争か？」

「いや、それはないだろう。ヘイズヘイブの王は温和で争いを好まないと聞いたことがあるからな」

「なるほどね」

とりあえずゆっくりと近づくことにしたレイヴンとシオン。そしてヘイズヘイブ兵士たちのキャンプの前で岩の後ろに隠れる。

「……どうも、普通の雰囲気ではないな」

シオンが様子を見ながら言う。

「なにかあったのか？」

「ふむ、しかし、何があってもヘイズヘイブに入らなければならないからな」

「じゃあ、さっさと行こうぜ」

「ああ」

シオンについてレイヴンはキャンプから離れたところへと向かい再びヘイズヘイブに向かう。

「まずいな」

「どうした？」

「前に陣取られている。ここから先にはトンネルがあるんだが、そこに陣取られている」

「まあ、普通に行っても通してはくれないだろな」

「仕方ないな」

シオンとレイヴンはヘイズヘイブ兵士が陣取っているトンネルへと向かう。

「ん？　何者だ貴様ら――がはっ！！」

「な――がは！？」

シオンが一瞬で見張りの二人を気絶させる。だが、気絶させた途端音が響き渡る。

「なんだ！？」

「何かの魔術でも使ってたのかもな」

「魔術はお前の専門だろう」

「わかってるよ」

レイヴンの瞳に白い逆五芒星（リバースペンタクル）が浮かぶ。

「……鎧に魔術的意味を持つ文字が刻んであらあ。気絶したら音を発するようにしてある術式だな。ヘイズヘイブ固有の。どうやらこれがさっきの音を出したみたいだな」

と解析している間にヘイズヘイブの兵士が集まってきた。全員が剣を抜いている。

「気をつけろ。あの剣、ヘイズヘイブ固有の魔術が組み込まれてる」

「なに！？」

レイヴンは解析する。

「ヘイズヘイブ固有術式。魔術刻印による物体への魔術効果の付加。

えっと属性は火だ」
「なるほど……わからん！！」
シオンが大剣を抜き敵に突っ込んでいく。
「おいおいっと、眠くなってきた。エメロードあと頼んだ。俺寝る」
『えっと結界結界っと』
レイヴンは結界内で眠りについた。
・
・
・
「起きろバカ！」
「あ？」
『マスター終わったようです』
レイヴンが体を起こす。どこかのテントの中のようだった。
「どこだここ？」
「ヘイズヘイブ領へのトンネルの中だ」
「あ～なるほど。それで俺はどのくらい寝てたんだ」
「二時間って所だ」
シオンがごり押しで突破したあと戻ってレイヴンを運んできたのだ。
「結構寝たな」
「さて、行くぞ。予定が詰まってるんだ」
「へいへい」

二人は外に出てトンネルを進む。トンネルはだんだんと下りになっている。山を降りているようだ。

「それにしても壮観だなこりゃ」

レイヴンがトンネルの壁面を見渡しながら言う。

「何がだ」

「このトンネル、ヘイズヘイブの魔術で作られてんだよ。そこら中に刻印が刻まれてる。道理でこんなところにトンネルが作れるわけだ」

「ふむ、まあ、あれば楽だろうからな」

「まあ、それだけじゃなさそうだが」

レイヴンが目を細めて壁面を見る。

「それよりさっさとヘイズヘイブに入るぞ」

「ああ」

トンネルを抜けた先もまた吹雪であった。

ヘイズヘイブ。一年中雪に覆われた大国。アルハザードとは友好同盟関係を持っている現在の王は賢王と名高く民衆からの信頼も厚い。雪に覆われているため食料自給率は低くほとんどをアルハザードより輸入している。酒などが特産物。雪に覆われているため屈強な者が多い。ヘイズヘイブ固有魔術は魔術刻印を使った物質への魔術属性の付加。

「入ったな。ここからは気を引き締めろよ」

「わかってるよ。ったく。さてと、地図ではこの先に街があるみた

いだ。運がよければそこで医者の話でも聞けるだろ」
「では行くか」
レイヴンは地図をしまい街へと歩き出した。

第十六話　国境越え（後書き）

はい、どうもテイクです。
来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、
二週間ほど更新できなくなります。
ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

第十七話　魔法工房

トンネルを抜けて街道を歩き続けて三時間。巨大なドームを発見した。街道が続いていることから街だと予測するレイヴンとシオン。

「あれも魔術で作られてるな」

ドームを遠くから見ながらレイヴン言う。ドーム中に刻印がびっしりと書かれていた。

「あれ、きっと魔法ぶつけても壊れねえぞ。まあ、解析したわけじゃねえからよくわからねえけど。自重もなくしてるんじゃないか？」

「関係ないだろう。とにかくそこに行けば良い」

「おいおい、俺たちはいまや密入国者みたいなもんだぞ？　旅券もねえし」

「ふん」

シオンがレイヴンにとある紙切れを渡す。

「なんだこれ……ってこれ旅券じゃねえか！？　なんでてめえがもってんだよ！！」

「フェルにもらった。『あ、他国に行くなら旅券必要でしょ。シエル様からです。あ、もしもの時まで先輩には黙っておいてくださいね。そっちのほうが面白そうですから』と言っていたからな。今まで渡さなかった」

「あの野郎。ってお前もお前だ。フェルの言うこと聞くなよ」

フェルが絶対に笑っているなとレイヴンは予想していた。

＊＊＊＊

一方フェルはというと。

「そろそろバレたかな～。先輩一体どんな顔してるのかな～」

とニヤニヤ笑っていた。そしてその様子を見たロキが恐ろしさに慄いていたことはまた別の話である。

＊＊＊＊

「仕方ないだろう。上官なのだからな」

「なにが上官だよ。お前にそういうのまっさきに無視しそうじゃねえか」

シオンは無視して先に進む。

「っておい！！　勝手に行くなよ！！」

レイヴンは慌ててシオンを追った。

レイヴンとシオンは街の入り口に着いた。巨大な門の前には二人見張りの兵士が立っていた。気にせず近づいていく。

「街に入りたいのだが？」

「旅行者か？　旅券は持っているのか？」

「ああ」

レイヴンとシオンが旅券を取り出す。

「よし、入って良いぞ。ようこそ、プレーヌの街へ」
「ああ」
「ごくろうさん～」
門が開きレイヴンとシオンは中へと入った。
「すげえな」
中は普通と同じ街が広がっていた。それに外と違い中は温かいし吹雪もない。ランプの明かりで薄暗い街並みが幻想的な雰囲気を作り出している。なにか魔術がかけてあるのか閉鎖空間であるが不思議と閉塞感を感じることはなかった。
「さすが雪国と言ったところか。防寒は優れているようだな」
「まあ、この国の魔術がそういうのに特化してるってのもあると思うぜ」
「ふむ、魔術も国によってということか」
薄暗い街を二人は歩いていく。薄暗い街だが住民の雰囲気はまるっきり逆で明るい。この国が平和なことを示している。
「ふむ、しかし、あの国境の兵士の様子はなんだったんだろうな」
「さあ、俺が知ってるわけねえだろ」
「だが、この様子なら何かあったというわけではないように見えるが」
しかし、それだと国境の兵士の様子がおかしいことが何も説明できない。
「まあ、寒さでどうかしてたんだろ」

「……」
「さて、医者の話を聞きに行くぞ」
「ああ」

その後情報が集まりそうな酒場などを回る。どうやら医者は昨日出発してしまったらしい。

「今から追えば間に合いそうだな」
「そうだな」
『マスター、マスター』
「なんだエメロード？」

通りを歩いているとエメロードが騒ぎ出す。

『魔導具屋がありますよ。行きましょう』
「なんでだ。時間もないんだぞ」
『ここなら私がパワーアップできるかと思いまして～』
「どの道腕が治ったらお前捨てるからパワーアップしても意味ないぞ」

レイヴンの一言で更に騒ぎ出すエメロード。

『酷いです、最悪です、最低です！！　杖権侵害です』
「なんだそりゃ」
『杖の権利です。あのマスターの友達の王様がくれたですよ』
「シエルの野郎」

罵っても意味がないのでそれ以上は言うのをやめた。

「しておいたらどうだ？」

「シオン、お前もそんなこというのかよ」
「一応パワーアップくらいはしておいたほうがいいぞ。ただでさえ貴様は役に立たないんだからな。杖ぐらい役に立てるようにしておけ」

そんなわけで魔導具屋へと入った。

「いらっしゃい」
『私を強化してほしいですよ』

入ってすぐにエメロードが言った。

「ほう、珍しいなインテリジェントロットか」

店主がエメロードを見ながら言う。

「そうだよ」
「じゃあ、注文どおり強化してやろうか」
「いいのか？　俺たちは他国の奴だぜ。魔術の知識は外に出しちゃいけないだろ」

店主にレイヴンが言う。

「気にすんな。魔術ってのは人のためにあるんだ。それを他国の奴だからって渋ってたらいけんだろ」
「へ～、確かに良い正論だな。そりゃ王様の考えかい？」
「ああ、そうだ」

さすが賢王と言われるだけはあると思うシオンとレイヴン。

「良い王様だね～」
「そうだろそうだろ。でも、あんたらのアルハザードも今はいい王様だって聞いてるぜ」
「それについてはノーコメントで頼む」

店主があからさまに不思議そうな顔をする。

「そ、そうか。まあいい、それでどんな強化をするんだ？」
「それ聞くよりどんな効果をつけられるかを教えてくれよ」
「おっと、そうだったな。忘れてたぜ。ほら」

店主がメニューを渡してきた。そこには様々な強化が文様と効果が書かれていた。

「この文字を組み合わせていろんな効果を生み出すんだよ。っと、あんたらに言ってもわからんな」
「いや、わかるさ、さて、エメロードどんな改造がいいんだ？」
『マスターの好みで』
「おい」
『こういうのはマスターが選んだほうが良いんですよ』

そういうわけでレイヴンが選ぶことになった。そうなってからレイヴンがメニューを見て止まった。完全に己の世界に入っていた。おそらく頭の中では組み合わせを何万通りも考えているのだろう。

「これをこう組み合わせるとあっちでこうなって……でも、これやったらこうなるし」

ぶつぶつと呟くレイヴン。端から見ると異常者である。

「お嬢さんとりあえずこっちで座ってな」
「いや、私は別に立っていても構わない」
「いや、こちらとしては兄さんが選んでいる間に副業の喫茶店の収益に貢献してもらいたいのよ。東方からの輸入品だって扱ってるぜ」

東方と店主の口から発せられた瞬間にはシオンは魔術用具が置かれている部屋の奥にある喫茶スペースへと向かい席についていた。その速さに唖然とする店主。

「おい店主早くメニューをよこせ。収益に貢献してやる」
「あ、ああ、ほれ」

シオンはメニューを受け取った瞬間一瞥しそしてオーダーした。

「漬物と緑茶をありったけもらおう」
「へ？　そ、そんなんでいいんですか？」
「早くしろ」
「は、はい、ただいま」

店の奥に店主がひっこみすぐに戻ってきた。大量の漬物を抱えて。

「ふむ、中々の品質のようだな。では、いただく」

ぽりぽりとシオンは大量の漬物を食べ始めた。

「お前の連れすげえな」
『ですよね～』

もはやここで店主と会話できるのはエメロードしかいなくなっていた。一人はメニューの前で考えて一人は漬物を黙々と食べている。

それはそれですごい客である。

「っとよし、じゃあ、これにするか」

ようやくレイヴンが決め終えた。

「よし、じゃあ教えてくれすぐにするからよ」

「これとこれとこれとこれをこう繋いでここを重ねて、こっちと結んで……」

詳しく店主に言う。詳しすぎるほどに。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。こんなの誰もしたことないぞ。それに刻みきれねえって」

「だから、ここを重ねてこっちを繋ぐんだよ。計算なら刻める」

「ったくどうなってもしらねえぞ」

店主がエメロードを持って奥の部屋に入っていった。

「さてと、じゃあ、待つと」

「おい、何してんだお前も来い」

「は？」

店主に呼ばれたことでレイヴンが呆ける。

「は、じゃねえよ。お前がいなけりゃどう刻んでいいかわからんだろうが」

「いやいや、さっき言ったじゃねえか」

「あんなんで出来るか。さっさときやがれ」

レイヴンは店主に奥に引っ張られていった。

・
・
・

それから一時間してようやく店主とレイヴンは出てきた。それでもシオンは変わらず漬物を食べていた。

「なるほどな、こんな組み合わせもあるわけだ」
「だろ、こっちならこれも出来るぜ」

どうやら有意義な時間だったようだ。

「それにしても兄ちゃん何者だ？　他国の人間だってのになんでこんなことが思いついたんだ？」
「まあ、ちょっとな」
「……そうか」

どこかレイヴンの含みのある表情で何かあると察した店主は何も言わなかった。

「まあ、お前のおかげで新しいことが発見できた。あんがとよ」
「礼はいいってこっちも久しぶりに楽しかったからな」
「それでもさ」

と笑う店主。

「そっか、さて、どうだエメロード」
『ふっふっふ、ついに私は超えてはならない壁を越えてしまったようですね。これからスーパーエメロードちゃんと呼んでください』
「ＯＫみたいだな」

エメロードの戯言を無視するレイヴン。

「さてと、じゃあ、そろそろ出発するかな。行くぞシオン」

レイヴンが漬物をぽりぽりぽりぽり食べているシオンに声をかける。

「話しかけるな音が聞こえない」

「あ？　なんだよ音って」

「良いから話しかけるな細切れにされたいのか」

シオンの本気の殺気を感じてレイヴンは、これ以上は確実に死ぬと思い、声をかけるのをやめた。

「たくっ、まあ、いいか」

『マスターも優しいですよね～』

顔があればニヤニヤしているであろうエメロード。

「うるせえ」

結局、街で一日過ごすことになってしまった。

第十八話　指名手配（前書き）

お待たせしました！

ＰＣ復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！

第十八話　指名手配

プレーヌの街に来てから二日目。二人は宿屋の一室にいた。

「さて、これから、どうするかな」

「ふむ、街から出れなければ何も出来ないからな」

「ったく、やってくれるぜシエルの野郎」

シオンが持っていた紙をテーブルに置く。そこにはレイヴンとシオン、二人の指名手配書であった。シエルの手紙と共に届いたのだ。

『悪いけど、魔眼を持つレイヴンを他国に出すわけには行かないんだよ。本来なら。というわけで、ヘイズヘイブには君たちが勝手に出国したことにしている。まあ、殺されかけるかもしれないけどがんばってくれ』

手紙にはこう書いてあった。

「あの野郎……」

レイヴンが手紙を握りつぶす。

「まあ、仕方ないだろうな。というか今まで妨害がなかったことの方が驚きだ」

「それもそうか……しかし、あの野郎、初めから言っとけよ」

「まあ、言っていたら面白くないからだろうな」

レイヴンが顔をしかめる。

「あいつ王様になってから性格悪くなったな」
「元からだろう」
「それもそうだな」

＊＊＊＊

アルハザード王宮。

「よかったんですか？」

ロキがシエルに聞く。

「何がだい？」
「仕方ないとはいえヘイズヘイブにあの二人のことを指名手配させるなんて」

ロキがシエルに手配書を見せる。

「あの二人はこれくらいじゃ死なないからね」
「……何を見たんですか」
「……なんのことだい？」
「ごまかさないでください」

ロキがシエルの眼帯を指差す。その下には神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳が封印されている。

「昨日はずしていたでしょう。何を見たんです」
「……これから、良くないことが起こるよ。国内も国外も僕達はそれに備える必要がある」
「……では、指名手配を出したのは……」

シエルが立ち上がり、窓まで歩いていく。窓に手をつき城下を見渡す。昔と違い活気が溢れている。

「……この国も変わってきた。だが、まだまだ変わらないといけない」

「シエル様？」

「……そのためなら僕は鬼にも悪魔にもなろう」

「……ならば、我らはどこまでもお供いたします」

ロキがひざまずく。シエルがロキを見る。

「ああ」

再びシエルは外を眺める。はるか遠くのレイヴンたちを思う。

（君たちには悪いと思っている。だが、今のままでは確実にやられる。だから……強くなってくれ）

振り返り椅子に座る。

「さて、今日の分を終わらすとしよう」

ペンをシエルが取ろうとすると、ロキがそれを奪った。

「その前に休憩をとってください」

「はいはい」

やれやれといった風な顔でシエルは笑う。ロキは有無を言わさぬ顔だ。こんな顔のロキは何を言っても聞かないと知っているシエル

は従うことにする。考えたいこともあったからだ。

＊＊＊＊

「とりあえず、ばれないうちに出ようぜ」

レイヴンが言うが。

「……どうやら、無理みたいだぞ」

シオンが外を見ると兵士が集まってきていた。

「……」

「まただな」

またもやレイヴンたちは包囲されている。今すぐ突入してくるといったことはないだろうがそれがいつまで続くかわからない。魔法を使っても脱出は難しい。

『ねえねえ、マスタ～あれ使いましょうよ～』

「あ～あれか、どっかにマーキングしてんのか？」

『もちです。このエメロードちゃんこんなこともあろうかと街中にマーキングしていたのだ～。ねえ、褒めて褒めて～』

エメロードの、褒めて要求を、レイヴンは無視した。そして、街の地図を見る。完全に円形の都市で、完全に密閉されている。脱出するためには、東西南北に位置する四つの門の、どれかを通らなければならない。そして、宿屋は門から遠い中央に位置する。

エメロードが言ったのは、工房で施した魔術のひとつを使おうと言っているのだ。

「よ～しやってみるか」
「何をする気だ？」

一人だけ、わけのわかっていないシオンが聞く。

「ああ、これから、エメロードの新しい機能を使う」
「それは、さっき店で施したものか？」
「そうだ、その時に物質転送っつう面白いもんを見つけてね、組み込んどいたんだよ」

物質転送とは、その名の通り物質を点から、ほかの点へ移動させる魔術である。これを使えば、入り口として設定したもの、たとえばエメロードから、出口としてマーキングしたものに移動することが出来る。

「つまり、なんだ。それを使えば、この状況から脱出できるということなのか？」
「そうだ」

問題は転移したあとだが、この宿屋が包囲されている時点で、それは心配はないだろう。

「さてと、じゃあ、行ってみるか、で、どこにマーキングしたんだ」
『ここと、そこと、あそこ』

エメロードが地図に示していく。

「お、ここなんて近いな」

レイヴンが指したのは、北門に近い広場だった。

『じゃあ、行ってみますか～』

「よし、じゃあ、シオン行くぞ。エメロードを掴め」

「ああ」

シオンがエメロードを掴む。それと同時に外も慌しくなってきた。どうやら、踏み込んでくるようだ。

『さあ、行くですよ～。廻る螺旋、罪知らぬ、その芭蕉へと、我が身を運ばん』

エメロードに刻まれた、文字が輝き、レイヴンとシオンを包み込む。そして、二人と一杖は消えた。ちょうど、兵士たちが突入して来たのは同時であった。

・

・

・

「ふう、脱出成功だな。走るぞ」

「おう！」

二人は北門へと走った。目の前に居た兵士は、シオンが一瞬で倒し、二人は、難無く、街を脱出することが出来た。

『うまくいきましたね～』

雪の中を走りながら、エメロードが言う。エメロードに取り付けた新機能で、周りに敵はいないことがわかっていたが、走ることはやめない。

「そうだな、ボンクラにしては、上出来だ！」
「それなら、もっと褒めろよ！！」
言いながらも、走ることはやめない二人。いつ、追っ手が来るかもしれないのだから、当たり前だ。
「さてと、どうするかな」
一端立ち止まりレイヴンが地図を見ながら言う。
「お前を囮にしておいていく」
「それじゃ本末転倒だろうが！！！」
『敵くるっすよ～』
エメロードの言葉で、我に返ったレイヴンはそれ以上シオンに何かいうのをやめて再び走り始めた。

第十九話　湖上の街

街を出て、三日。どうやら、追ってはいないようだ。それも当たり前だろう。周りは今、絶賛吹雪なのだから。雪国の人間だけあって、吹雪の危険性は熟知しているのだろう。だから追ってきていない。それに、追わなくても、他国の人間、すぐに死ぬだろうと思っているのもある。

それは、的を射ていた。レイヴンは結構限界だった。

「し、死ぬ。寒い、やばい、何か変なものが見えてきた」

「安心しろ、私にも変なものは見える」

シオンがレイヴンを見ながら言う。いつもなら、ここで、ツッコミが入るのだが、本当に限界らしく、ツッコミがない。

「……おい、ツッコミがないと恥ずかしいのだが」

「……」

返事もない。本当にやばいようだ。シオンも黙り歩くことに専念する。だが、行けども行けども建物すら見えない。

「本当にあるんだろな～」

レイヴンがエメロードに街の位置を聞く。地図ではこの先に村か何かがあるはずなのだが、何も見えない。

『あるっしょ、だぶん』

不安になるエメロードの答え。

「おい……」
「どうやら、あったみたいだぞ」

シオンが指差す方向には、この前のような石造りのドームが幾つも見えた。それらは、何かを囲むようにして造られている。それらの中心には城壁が見える。ヘイズヘイブ首都のヘリオスのようだ。しかも全て、湖上に作られている。

「おい、いつの間にこんなとこまで来たんだ？」

唖然としながらレイヴンがシオンに言う。

「私に聞くな。貴様の専門だろう。調べろ」
「専門つってもな……」

レイヴンが堕ちた天使の悪魔の瞳（ルシフェルの瞳）を発動する。その目が捕らえたのは、そこら中に張り巡らされた文字羅列だ。更に、堕ちた天使（ルシフェ）の悪魔の瞳（ルの瞳）の効果範囲を広げる。どうやら、このヘリオスを中心に文字の羅列がくもの巣のように張り巡らされていることがわかった。

「かなり複雑だな……こりゃ、え～っと、移動術式、移動固定術式、位相変換術式、空間固定術式、位空間内移動術式の併用による大規模同時転送術式、地脈供給術式、魔力循環術式、かなり、大規模だな。それに国全体が範囲とは、そうか、これがヘイズヘイブの侵攻の早さってわけか」

うわごとのように色々と呟いていくレイヴン。解析が進むごとに、レイヴンの中に情報が勝手に入ってくる。それを用途に分けて分別し、整理していく。それは意識してやっているのではなく、完全に

自動であったが。しばらくして、解析が終わったのか、堕ちた天使(ルシフ)の悪魔(エルの瞳)の瞳の発動を解く。

「ふう」

「わかったのか？」

「ああ、どうやら、この国、国土が広いって理由もあるが、街道中に転移魔術をかけてやがる。つまり、街道を少し歩けば、目的地に到着できるみたいだん。まあ、限定して、ヘイズヘイブ国民だけにしか、効果がない術式みたいだな」

「じゃあ、なんで、私たちにそれが発動する？　私たちは思いっきり他国の人間で、指名手配されているんだぞ」

そう聞かれて考え込むレイヴン。術式を見た結果、何かが細工されたというわけではないはずだ。なぜ、確定では何のかといえば、元の術式を見てないからだ。それでも、怪しいところはなかったので、細工されてないはずだ。

「む～」

ついには地面に胡坐をかいて座り込んでまで考え込む始末。しばらく、そうしていると、レイヴンの動きが完全に止まった。先ほどまで、うなっていたのだが、それも止まっている。完全にストップした。息をしているので、死んでいるわけではない。

「おい、どうした？」

揺さぶってみると。眠っていた。堕ちた天使(ルシフェルの瞳)の悪魔の瞳を使用したことによる力の代償(デビルズペナルティ)だ。まったく人騒がせだ。とにかく、どこか、吹雪をしのげる場所が必要だと、シオンはレイヴンを抱えて、吹雪の中をヘリオスに向かって、歩いていった。

「しかし、このまま入れるわけはないな」

指名手配されているのだ。入れるわけがない。突破しようにも一国の軍隊を相手にして、レイヴンを抱えたまま、無傷で入るのは不可能だ。

「さて、どうするか」

『それなら、エメロードちゃんに、お任せなのだ！』

「ほう、馬鹿杖。何か策があるのか。言ってみる」

『なんか言う気がなくなりました』

無言でシオンがエメロードを握り、折るために力を入れる。普通魔術加工された杖は折れないのだが、シオンの力なら折れるかもしれない。なにやら、ギシギシ言っている。さすがにエメロードも危機感を感じた。

『い、言いますですはい。えっと、この前加工した時に色々仕込んでいるのですよ。認識阻害の魔術をいれたんですよはい』

「つまり、どういうことだ？」

『つまり、相手に気がつかれずに街に入れるってことっす』

「それなら、それを使って脱出すればよかったんじゃないか？」

『……』

完全に失念していたとエメロードが黙り込む。そもそも、脱出に転移を使おうと言ったのは自分のため、更に落ち込んでいる。自称天才杖の名が泣くとか、落ち込む途中で変な方向に思考が流されそうになるのを途中で止める。とりあえず、未来を見据えることにする。なんだかんだ言っても前向きな杖なのだ。

『ま、まあ、それは良いとして、これで入れるですよ』
「バレないだろうな」
『バレないですよ』
「なら、行くぞ」

エメロードを持ち、レイヴンを抱え、悪路を進んでいく。

『じゃあ、行きますよ。人呼びし、認識の壁を通り抜けし、ベールを纏え』

特殊なベールがシオンたちを包み込む。そして、シオンは門番の前に行く。それでも、シオンたちは見つからなかった。どうやら、レイヴンの改造は強力で、この魔術を開発した、この国の人間でも見破れない。好都合とばかりに入っていった。
街の中はどういうわけか、晴れ空が広がっていた。

「これはどういうわけだ……」

唖然としながら、シオンは呟く。城壁の向こう側と外側とで切り離されたかの様だった。

『空間制御魔術っすね～。ちょうどこの首都の場所が龍脈の上なんで、維持魔力もそんなかかんないはずです。たぶん』
「そうか、説明はいいんだが、しゃべり方がうっとうしい」
『これがデフォっす』
「そうか、捨てていこう」

今回は冗談だとわかっているので、エメロードは騒ぎもしなかった。こんな街中でエメロードを捨てれば、その瞬間に蜂の巣だ。指名手配されている以上、安全な場所はない。しかもこんな状態では、

満足に行動することもできない。例外として、スラムという場所ならばなんとかなりそうだが、この街の雰囲気は活気がある。そのため、あまり期待できない。
どうするかと、考えながらあるいていると、物陰から、手招きする真っ白な手が見えた。他の人間が気がついている素振りはない。シオンたちにしか見えていないようだ。

「どういうことだ？」
『ん～。見えてないはずなですけど～。何か見えてるみたいなですけど』
「だから、どういうことだと聞いている？」
『さあ？』

シオンは本気でエメロードを捨てようかと思ったが、思いとどまる。理由は前と変わらない。手はいつまでも手招きをやめない。

「……ついて来いってことか」

シオンは進行方向を変えて、その手が手招きする路地へと入っていった。路地は暗く不衛生であった。さすがの首都でも行き届かない場所というものはあるのだと、わかるような場所だ。壁に背を預けるようにしている薄汚れた者たちが何人もいる。そんな者たちを避けてシオンは先へと進む。まだ前方の闇には手があり手招きしている。
そして、路地の突き当たりで手が消えた。変わりに地面に隠された扉が開き、怪しい男が出てきた。その男を表現するなら黒だ。真っ黒なゆったりとした服を着込み、帽子を目深にかぶっている。髪は長い銀髪で目は前髪で隠れており、外からは見えない。口元には嫌らしい笑みが張り付いている。

「さあ、入るといい」
「……」
男はそのまま扉の中へ。扉の中は暗く、階段が続いているようだった。一瞬の逡巡のあと、シオンは中へ入っていった。後ろで、扉が閉まる。完全な暗闇が当たりを支配するが、一本道だったので、シオンはそのまま降りていった。
そして、明かりのともった場所へと出た。そこには扉が一枚だけあった。そこへ、足を踏み入れた。

第十九話　湖上の街（後書き）

新年一発目の更新です。
皆様あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。
さて、挨拶も終わったので連絡を。
次回の更新は十六日を予定しています。
ので、皆さんお楽しみに。
それではまた。

第二十話　人形師

魔術を解き扉を開け、足を踏み入れた部屋は、それほど広い部屋ではない。カウンターのある正方形の箱、そう表現するのが適当な部屋であった。そして部屋の中はまるで、捨て置かれた死体としか思えないような程、精巧に作られた人形が無秩序に、乱雑に、無感動に、所狭しとおかれていた。

満足に歩くことなど出来るはずがないと思われるほどだ。だが、意外に計算されておかれているのか、人形と人形の間には隙間があり、そこを歩けるようになっている。そこには、黒い棺が幾つも置かれていた。どうやらこの棺を足場にしているようだった。

シオンはそこを通り、カウンターへと向かう。既に、先程の怪しい男はカウンターの向こう側でシオンが来るのをニヤニヤ笑いながら待っている。意地の悪い笑みだと思うシオンだが、とりあえず関係ないので無視して、さっさとカウンターまで行く。

「私たちを呼んでいたのはお前だな。何が目的だ」

「ヒッヒッヒ、ああ、ワタシだ。ワタシは人形師（マリオネッター）、はじめまして、シオン・エリアリス」

一瞬でシオンは大剣を抜き、人形師（マリオネッター）と名乗った男に突きつける。それでも人形師（マリオネッター）は嫌らしい笑みを浮かべていた。

「なぜ、私の名前を知っている」

「ヒヒッ、私は何でも知ってるよ。君たちが何で旅をしているのかも、そのレイヴン・ナイトロード君のことも、その魔眼の秘密も。王様の嫌いなものも全部ね」

つまりは情報屋と人形師（マリオネッター）は言った。だが、シオンは突きつけた大

剣を引くことはしなかった。通常の情報屋にしては、知っていることが多すぎる。それにこの身なりも怪しい。人をおちょくる口調、油断ならない動作。どれをとっても信用できる人間とは思えない。

自然とシオンは人形師（マリオネッター）を睨んでいた。

「そんなに睨まないでよ怖い怖い。ヒッヒッヒ」

まったく怖いと持っていない口調で人形師（マリオネッター）が言った。むしろ視線を楽しんでいるようだ。

気に入らないと、口の中で呟きながら本題に入ることにする。

「どうして、私たちを呼んだ」

「なに、君たちに興味があって、困っているようだったから助けた。それに理由がいるかい？」

それを人形師（マリオネッター）がやりそうにないから聞いているのだ。明らかに何か自分に利益がなければ、人が死にかけていても、笑いながらそれを眺めているような男だ。何か理由があるに違いない。それもおそらくは今シオンが抱えているレイヴンに関係した何かが。この男は確実に何かを知っている。だが、聞いても教えてはくれないだろう。それ相応の対価を支払うことになる。そんなもの今のシオンは持っていない。

「そうか……とりあえず感謝してやる」

「ヒッヒッヒ、少し言い方に気になるがまあ、いい。そこに部屋があるから、好きに使うといい」

「……そうか、なら好きにさせてもらう」

シオンは隣のドアから別の部屋に入る。そこにはシーツのかかった棺しかなかった。ここで寝ろということらしい。つくづく悪趣味

だ。とりあえず棺の中にレイヴンを押し込みエメロードも一緒に入れる。

『あれ～、なんで私までここに～？　お～い、シオンさ～ん～狭い～だして～』

それを無視してシオンは人形師（マリオネッター）の居た部屋に戻る。

「それで、本当の理由を聞かせてもらおうか」

再び人形師（マリオネッター）に大剣を突きつけながらシオンが言う。先程と違いお荷物（イヴン）がいないため、本気で殺せる。

「ヒッヒッヒ。ワタシが教えるとでも？」

「しゃべらせる」

「ヒヒヒ、おっかない。ああ、本当におっかない」

そういう人形師（マリオネッター）はニタリと笑っていた。まったくおっかないと思っていない。ただ、笑って指を動かしている。まるで、何かを操っているかのように。

「でも、ここはワタシの城だよ」

突然、散乱していた人形が動き出す。虚をつかれたシオンは咄嗟には反応できなかった。どうやってこの狭い部屋に収まっていたのか、百を超える人形に刃を突きつけられた。

「！？」

「ヒヒヒ、いくら茨の杭（ローズステイト）を持っている君としてもこれは厳しいよねえ」

「クッ！」
「ヒヒヒ、やらないよ」
人形が力を失ったように元に戻る。人形師（マリオネッター）が手を上げる。
「面白くないからね。君たちにはがんばってもらわないと」
「何をがんばれというんだ」
人形師（マリオネッター）を踊ることは無理だと判断し大剣を鞘に収め聞く。譲歩して、もらえる情報を静かに聴くことにした。ここで聞いておけば後々役に立つだろうと考えてのことだ。
「色々とあるんだよ。それと君たちの探し人は来たの山にいるよ」
「本当か！！」
「本当だよ～。さあて、君も疲れてるんじゃないのかい？　休んだらどうだい？　だって君の体ボロボロだしねえ」
「何のことだ？」
意味がわからないというように言うが、内心では当たっていた。だが、そんなことをおくびも出さずシオンは振舞う。
「そうかい。じゃあ、いいけど。それなら、これを着てくれないかな～」
人形師（マリオネッター）が取り出したのはフリフリのついた俗に言うメイド服というものだが、実際の本職のメイドが見たら卒倒しそうな服を取り出した。物凄い楽しそうに、ニヤケ顔がさらににやけて口が裂けているかのように見えるほどだ。顔も少々上気していて、興奮しているようだった。
シオンははじめそれが何かわからなかったが、それを見ているう

ちにそれが何か理解した。そして、人形師（マリオネッター）が何をさせようとしてるのかもわかった。

「き、貴様、何をさせる気だ！！」
「なにって、フフフ、それはまあ、コスプレ大会だよ～」
「やらんぞ」
「ヒヒヒ、君の意思は関係ないよ」

その言葉どおり、シオンの体はシオンの意志で動かすことが出来なくなった。よく見るとシオンの体に糸が巻きつけられており、それを使って操られているようだった。先程の人形と同じ手だ。もがこうとするが完全に拘束されていて動くことは出来ない。かなり丈夫な糸だ。

「じゃあ～、やろうか」

その後何があったのかはシオンの名誉のために語らないでおこう。ただ、人形師（マリオネッター）が上機嫌になり、シオンがかなり不機嫌になり、ギスギスとした雰囲気を作り出すようになったとだけ言っておこう。

レイヴンが目を覚ますと見たことない、天井というか、せまっくるしい箱の中にいることに気がついた。密閉されていてなにも見えない。とりあえず、蓋を開けて外に出る。

「ふう、なんだここは？」
『あ、よかったマスター起きた』
「おお、って棺かこれ！」

本当にどういう状況だと思うレイヴン。棺の中にいるなど普通ではないと思う。まあ、あのシオンならやりかねないなとか、ふと思

ったりしたが。それにしてもと魔力を探る。シオンは更に隣の部屋にいるようだが、もうひとつよくわからないのがいる。
敵意がないようなので、まあ言いかと思い、レイヴンは棺から起き上がり伸びをする。凝り固まった筋肉がほぐれていく。結構長い時間寝ていたようだ。ゆっくりとほぐしていき、レイヴンはエメロードを棺の中に入れて蓋をしめた。

『え？　ちょっと、またですか？　おーい。出してくださいよー』

レイヴンは無視して唯一の扉から外に出た。そこは捨て置かれた死体としか思えないような程、精巧に作られた人形が無秩序に、乱雑に、無感動に、所狭しとおかれていた。悪趣味だと思いながら、ここの主である人形師（マリオネッター）がいるカウンターへ向かった。

「やあ、起きたのかい？　化物クン？」
「おいおい、初対面で散々な言い方だなおい」
「おや、失礼、でも君は持っているんだろう。それも――つも」
人形師（マリオネッター）の発言にレイヴンの表情が険しくなる。相変わらず人形師（マリオネッター）はそれを見て楽しんでいる。ニヤニヤ笑ってレイヴンの反応を見ている。

「まあ、いいか。どうせ、気味悪がられるのは慣れてる。あの孤児院でな」
「ヒッヒッヒ、それはそれは、良い経験をしたねえ。さて、君の相方には、中々楽しませてもらったよ。そして、探し人の居場所も教えておいた。明日の朝にはさっさと出て行ってくれよ。これでも忙しいんだ。写真を現像しないといけないからね」
シオンのコスプレ写真である。それを様々な角度から観賞し、堪

能してから、保存する。変態である。つくづく変態である。
レイヴンには、なんのことだかわからなかったが、どうにも聞いたらまずいものだとはわかったようで何も聞くことはしなかった。

「あっそう、じゃあ、俺はもう少し寝る」
「力の代償（デビルズペナルティ）で寝ていたのにまだ寝るのか」
「うるせえ、力の代償（デビルズペナルティ）で寝るのと、普通に寝るのじゃ違うんだよ」

そう言って、レイヴンはもとの部屋に戻った。棺の中には入らず、棺の上で眠る。こちらのほうが寝心地が良かった。棺の中から意味不明な嘆き声が聞こえた気がするが、それを無視すれば中々の寝心地。
そして、レイヴンとシオンは翌朝には出発した。

第二十一話　王国一画

「シエル様、もう少し休んでください」

塔のように積み上げた書類を片手で持ったリアが言う。

「おいおい、君実は休ませる気ないだろ」

シエルが苦笑いしながら言う。その間にリアが部屋の隅に書類の塔をどっさっとおく。リアは、アルハザードに来て以来その戦闘能力の高さから、一軍を率いていた。もとが、王族だったこともあり、中々に軍の扱いがうまい。それでも、平和なアルハザードでは、若干暇を持て余している。そのため、時折文官の手伝いをしている。

「一応ある。でも、仕事持って行けって言われた。私は文官じゃないから、適当に持ってきた」

「まあ、ありがとう」

シエルが礼を言いながら、次の書類に手をつける。執務室の書類はなくなる気配はない。

「終わる？」

「今日中には無理だが、終わらせるよ」

「そう」

リアが部屋を出て行った。出来れば、あの塔のような書類を小分けにして欲しいと思うシエルだったが、その思いは伝わらずリアはさっさとどこかへ行った。それと入れ替わりにロキが入ってきた。何やら機嫌が良いらしく晴れ晴れとしている。

「やあ、ロキ何だか、晴れ晴れとしているね」
「はい、なんと終わったんですよ。全て、仕事」
「へえ？　じゃあ、この山は？」

シエルがリアが持ってきた書類の塔を指し示す。

「あ、これ全部終わった奴です。勘違いして持ってきちゃったんでしょうね」
「なるほど」
「というわけで、さっさとここの仕事も終わらせましょう。そしたら、しばらくは俺たちでやれようになるんで」
「そうか、ようやくか……」

ようやく国の平定が終わりそうであった。反対派の貴族や、飢饉、格差、奴隷。様々な問題が多かったこの国もようやく、静かになる。真の平和にはまだまだ遠い。依然大陸全土では、いたるところで戦火が絶えない。これからは内ではなく、外に目を向けなければならない。

そう、外だ。アルハザード内部の問題は解決できたが、外はそうはいかないのだ。いかにシエルが全てを見通せる目を持っていたとしても、内部ならば何とかなるが、外部の問題はすぐには対処できない。

「さて、じゃあかんばらないとな」
「はい」

二人は仕事に精を出した。そして、昼頃には仕事は終わっていた。

＊＊＊＊

「ふにゃ、にゃにゃにゃ？」

セリス・ミレインが王宮の中庭で猫と戯れていた。猫語らしきもので会話もしている。普段の寡黙でクールな姿からは想像が出来ない。誰かに見られでもしたら卒倒するだろう。

「可愛いね」

「！？」

超高速であとずさるセリス。そこに居たのはシエル。一番見られたくない相手に見られてしまった。セリスの中でここで殺すべきかと思案し始めた。そして、天秤が殺すほうに傾きかけた。そんな雰囲気を感じ取ったのかシエルが弁明する。

「いや、別に何か見たわけじゃないよ。ネコが可愛かったからね」

「……そう。何も聞いてない？」

「聞いてないよ。何かあったのかい？」

「それならいい」

シエルは実はセリスが猫語でしゃべっているのを聞いていたがそれを言わなかった。言ったらたぶん、ロクなことにならないからだ。それに、猫が可愛かったのは本当だ、嘘は言っていない。ただ、全てを言う必要がないから言っていないだけだ。言ったらただじゃおかないだろうし。何か言っているような気がするが。

「……それで、何？」

「ああ、仕事が一段落したんだよ。ようやく」

「……そうで？」

「暇だったから、来ただけだけど？　何か問題あったかい？」

問題はないが、楽しみを邪魔されたのは万死に値すると、セリスは思っているが、王を殺したら、どうなるかなどわかりきっている。だから、思うだけにしておく。思うだけならただだからだ。

「……ない」
「そう、それならよかった」
「……」
「……」

しゃべることもないのでセリスが黙っていると、シエルも黙って彼女を見ていた。どういうことなのか、いったい何が目的なのか図ることは出来ない。

「……何が目的」

しびれを切らしたセリスが聞く。このまま黙っていてもジリ貧だと思ったからだ。シエルとセリスも黙ったままでも苦ではにが、見詰め合っているというか、にらみ合っているような状況ではセリスの方が不利であった。

「目的？　ん～、そうだね。まあ、何もないよ」
「……」

呆れた。何もなしに何で元敵の下に来るのやら。まあ、そんな性格だから、国の人に慕われているのだろうけど。以前から思っていたことだが、あまり好きになれないタイプだなと思うセリス。まあ、もとよりそんな関係になどなることはないだろう。

「そんな呆れた顔しないで欲しいな。まあ、わかる気がするけど」

「……それで、あの二人は？」
「ん？　もうすぐ目的の医者を見つけるだろうね」
手配した人形師（マリオネッター）と呼ばれる男に情報を聞いて、彼女の居る山へと向かっていることだろう。それが、最悪の事態に繋がるとも知らずに。残酷だなあと思うシエル。だが、それしかないのも事実なのだ。これから、恐ろしいことが始まる。それは、確定した未来なのだから。それを変えることが出来ないのならば。それを受け止めて対策を練るしかない。
それでもあの二人ならば大丈夫と言う、根拠のない自信がある。そういうシエルの柄ではない何かを思わせる何かがあるのだ。あの男には。レイヴン・ナイトロードには。

「問題はそこからなのだけれど」
「……？」
「いや、なんでもないよ。さて、僕はそろそろ戻るよ。君も休みを取りなよ」

シエルはそのまま中庭から部屋へと戻る。誰もいないことを確認して眼帯をはずした。神の言葉（カブリエルの瞳）の天使の瞳があらわになり、そして、力が発動する。全身を苦痛が苛む。だが、それでも、見なければならない。未来を、自分たちの選択を。
「ぐあああああああああ！！」
その悲鳴にも似た決意の叫びは、誰の耳にも届くことはなかった。

第二十二話　到着

雪の平原を越え、やって来た追っ手を撃退し、氷の泉を越えて、レイヴンたちは目的の山へとたどり着いた。長い旅だった。それも、ここで目的を果たせば終わる。それからのことはわからなが、その後のことはその時に考えれば良い。

「さて、あの人形師（マリオネッター）って奴の情報が正しけりゃここにいるんだろうけどさあ。どこにいんだ？」

「知るか、私に聞くな」

人形師（マリオネッター）が言ったのはこの山のことだけで、山のどこにいるかなどまったくあの人形師（マリオネッター）は言っていなかった。あの時は、すぐに見つかる場所にいるから、言わなかっただけかと思ったが、実際に山に来て見ればこのとおり、巨大山脈だ。人っ子一人居ない。気配も感じられない。魔力の反応すらない。これでどうやって探せというのだろうか。探している間に凍死する。

『マスター、ミーが探しましょうか？　探査なら得意なんですよ。やり方はまず、ミーを平らな地面の上につきたててください。そして、手を離すだけです』

「一人称が変わっている上に、ただのアナログだろそれ」

それはよく道に迷う人間が、分かれ道でどっちに進もうか適当に決めるときに使う手だ。運任せな上、絶対に正解の道を指し示すわけがない。

「ここでうだうだ考えていても仕方ないいくぞ」

「はあ～、頼むから俺が死ぬ前に見つかってくれ」

「見つかった」
「早！？」
「嘘だ」
「嘘かよ！！」

そんなやり取りをしながら二人と一杖は山へと足を踏み入れた。

・
・
・

探し始めて、早半日、見つかる兆しはなかった。動いているおかげで凍えて死ぬことはないかもしれないが、このまま見つからなければそれも時間の問題であった。

「おい、本気でまずいぞ」
「そうだな……」
「おい、エメロードどこかわかんないのか」
『ＺＺＺ、ハッ！　えっと、わかんないです』
「……」

完全に眠っていたエメロードであった。基本杖なので、寒さ感じない上に、もたれて移動しているので基本暇なのである。

『え、えっと、たぶんそこです』

適当に魔力で方角を示す。

「おい、適当言うなよ」
「いや、当たっているみたいだぞ」

シオンが言う。確かにシオンが言うようにそこには小屋があった。

それを確認したエメロードが何やら勝ち誇ったセリフを言うが、レイヴンは何一つ聞いていなかった。ただ。目の前の小屋を厳格ではないだろうかと注視していた。だが、それは本物の小屋のようだった。

「……」

果てしなく納得が行かないレイヴン。しかし、見つかってしまったのだ。役に立たないと思っていた杖が思わぬところで役立った。これでは捨てるに捨てれなくなってしまうとか思いながらレイヴンたちはその小屋を目指す。

しかし、そう簡単にはいかないようでオオカミ型の魔獣に囲まれてしまった。

「ふう、まったく面倒な相手だな」
「おいおい、俺は戦う気ないからな」
「安心しろ。こんな場所でお前に期待するわけないだろ」
「おい」

シオンは聞かずに大剣を抜き放ち魔獣へと疾駆する。それと同時に魔獣も動く。レイヴンは結界を張り気配を消して被害の及ばない場所まで移動した。

「はあ、両腕がうまく使えねえから動き難い。くそ、雪なんて消えてしまえ」

ぶつくさ不平不満が聞こえるがシオンはそれを無視して大剣を振る。飛び掛ってきた魔獣の一匹を切り裂き、正面に居た魔獣に大剣を突き刺す。刺し殺した魔獣を体を回転させた勢いで投げ飛ばし飛び掛ろうとした魔獣にぶつけ動きを封じる。

そこに雪を巻き上げつつ肉薄する。

「やあああああ！！」

回転を加えながら重なりあった魔獣を貫く。それを見た魔獣は逃げていった。大剣を振って刺さった魔獣をその辺りに撒き散らし、大剣についた魔獣の血を払い鞘に収める。

「終わったか～」

「ああ、もう魔獣の気配はない。さて、さっさと行くぞ」

「ああ」

これでようやく旅の目的を果たすことができる。二人はノックもなく小屋の扉を蹴破った。

第二十三話　発見（前書き）

1ヶ月お待たせしました。
これから復帰です。
これからもよろしくお願いします。

第二十三話　発見

扉を蹴破ったが家主が出てくるようなことはなかった。蹴破るのはどうかと思うが本当に家主は居ない。驚いて逃げたのかもしれないとレイヴンは思う。先程まで暖炉の前の椅子に誰かが座っていたような痕跡があるからだ。つまり家主はどこかに隠れているということ。

「逃げられたか？」
「逃げられたかもなあ」
「探すか」
「そうだな」

シオンと短い会話を終え、レイヴンは小屋の一階を探しはじめる。シオンは二階だ。気配を探るが、相当できるのかまったく感じることができなかった。いや、この部屋の真下に誰か居る。小さな子供のような気配だ。

「エメロードどう思う？」
『まあ、子供ですね～。明らかに子供ですね～。って、何で私を振りかぶってんですか！？　両手使えないんですよね！？』
「お前でこの床を叩き壊すためだよ。そして、一回だけなら問題ない」
『ってアー！！』

レイヴン思いっきり振り上げたエメロードを床にたたきつける。せめて壊れないようにか勝手に魔力を使いシールドを張ったのが功を奏し床を粉々に破壊することに成功した。しかし、腕に痛みが走る。これ以上は無理するなという警告だろう。当たり前にこれ以上

は無理などする気レイヴンにはない。

「さて、何があるかな」

綺麗に空いた穴を覗き込むレイヴン。どうやら、下にまだ通路があるようだ。一本道のようで迷うことはないようだ。そこへ降りる。通路には等間隔に蝋燭が備え付けてあり、全てに火が灯っている。

「なるほど」

通路には誰かが先程ここを通った痕跡があった。この小屋の家主はこの中にでもいるのだろう。足跡も降り積もったほこりの上に残っていた。あまり足の大きさは大きくない。というよりはまるで子供のようであった。

「情報どおりか？　まあ、行って見ればわかるか」

レイヴンが一本道を歩く。どこもかしこも埃っぽく狭い。しかし、それ以外は綺麗であった。いや、埃が積もっている時点で綺麗なわけではないのだが。どこまで続いているのかわからないが、物凄い広いということがわかった。遠くのほうまで蝋燭の明かりが続いている。

「うん、長そうだな。おい、エメロードそろそろ起きろ」

『うきゃ～』

「駄目だなこりゃったく」

エメロードを突きながらレイヴンは通路を進んでいった。

＊＊＊＊

シオンは、二階を荒らしながら家主を探していた。この辺りに気配はないが、気配を消して隠れている可能性もあるため、一つ一つ探す。シオンは正直に言えば、かなり面倒くさかったが、探して見つけないことにはまったく、先には進めないので、探す。
そのとき、一階の方でなにやら床をぶち破ったような音が響いた。

「ん？　ああ、レイヴンがどうせなにかしたんだろうな」

気にせず、捜索を続ける。しかし、どこを探して見つからない。今まで生活していたような痕跡はあったが、どこにも住人は居なかった。

「ということは下か。ふむ、さて、レイヴンがまた余計なことをする前にさっさと行くとしよう」

シオンが一階に下りる。そこには、大穴が開いていた。予想通りだなというとシオンは呟きその穴へと飛び込む。小さな女の子と青年が歩いていったような痕跡が残っていた。この場合は医者とレイヴンだろう。そう当たりをつけて、シオンは一本道を歩いていく。
突き当たりで、木の扉があった。それ以外には何もないようだ。足跡もこの中に続いていてる。

「よし」

シオンが躊躇なく扉を蹴破った。そこには、レイヴンが少女を押し倒すという行為が繰り広げられていた。

「「あ！」」
「さて、と、変態ロリコン、言い残すことはないか」

大剣を抜きながらシオンが言う。きちんと切れないように鞘に収めたままなので、殺すことはない。安心の安全性だ。いや、殴るんだから、安全かどうかはわからないが。

「ま、まて、これには深いわけが」

「問答無用！！」

「ちょ、ま、ぎゃあああ！！」

レイヴンがシオンにボコボコにされた。それはもう、ボコボコに。

第二十四話　刺客

ボコボコにされたレイヴン。何とか、殴られている途中に説明し何とか、事なきを得ることが出来た。しかし、レイヴンは生きているのが奇跡のような状況だった。そこは、医者であった幼女のおかげで何とかすることが出来た。今はリビングに戻り紅茶を飲んでいた。ちなみにレイヴンが壊した床は幼女が直していた。

ちなみに、レイヴンが幼女を押し倒していた状況だが、それは、幼女が面白そうなことになりそうだからというのと、魔眼に気がついて面白そうだったからという理由のせいだった。それを幼女自身が説明したおかげで何とかなったともいえる。

「まったく、そうなら、そうと早く言わないから殴ってしまったではないか」

「俺が説明しようとしている間に殴ったのは誰だよ」

「私だ」

「わかってんなら言うな！」

溜め息をつくレイヴン。その様子を面白そうに見ている幼女。

「ククク、面白いなあ、君たちは～」

「笑わないでくださいノイン先生。というか、あなたのせいでしょうが！！」

ブロンドの髪で翡翠のような瞳をしていてゴスロリ風の服を着て白衣を羽織っている幼女――ノイン先生にレイヴンが言う。

「ははは、すまんすまん、なんともいじりがいがありそうだったんでなあ」

「おい」

呆れるレイヴン。本当にこんな幼女にしか見えないのが、天才的な医者なのか不安になる。しかし、さっき治療された時にその腕は確かだったことが証明された。ただ性格に難があるのだ。この世界では天才的な人間は性格に難があるらしい。あの王様しかり、この医者しかり。どうしてこうなんだろうかと思うレイヴンなのであった。

「さてと、それで、お前たちがはるばるこんな僻地まで来たということは、私に依頼があったのだろう？」

「そうだ。このバカの腕を治せ」

シオンがまったく頼む側の人間とは思えないほど命令口調で言った。態度がでかい上にまったく尊敬とかそんなものもない。これから、ものを頼むのだから少しは何とかしろとエメロードは思うが、こいつに言ったことろで意味がないとの結論にたどり着いて諦める。こういう面倒な話は杖には関係ない。

レイヴンはそんな言い方をするシオンを注意すべきか悩んでやめた。散々殴られた後だ。少しくらい反省する材料になればいいと思った。

「ははは、なんとも単刀直入で結構だぞ。気に入った」

「……」

「どうしたバカそんな呆れた目をして」

本気で呆れてんだよとは言わないレイヴン。言ったとして納得してはくれないだろうことは明らかだからだ。いつか、シオンに言ってくれる奴が現れることを祈る。

「いや」
「？」
「さてと、お前の腕を治すのか？　じゃあ、診察室行くか。来い」
椅子から降りて、ノインは別室の扉を開けて入っていく。レイヴンもそこについて行く。シオンは何かあったときようにリビングに残ることにした。エメロードも残った。今は壁に立てかけられている。シオンはソファーに座った。
レイヴンは、この国の物とは思えないほど進んだ設備のある診察室でノインと向かい合って座っていた。レイヴンが事情を説明し、腕を見せている。ノインはそれを聞いてじっとレイヴンの腕を見ていた。
「なるほどな。結構無茶をする。魔法が付着した剣を受け、更に自分の魔法でずたずたか。それでは使えんようになるのは当たり前だな」
「治せるのか？」
「フン、私を誰だと思っている？　天才医師だぞ」
「どっちかって言うと天災医師だけどな」
「何か言ったかね？」
「いえ」
ここで、本当のことをレイヴンが言うはずはない。そう、言ったら言ったで大変なことになるのは必死だ。シオンとのやり取りで舵取りがうまくなって来たレイヴンであった。こういった女が多いことも言える。どうもレイヴンの周りには扱い難い女が集まってきてるようだった。
「まあ、難しいが私の力を持ってすれば治せる」
「そうですか」

「ああ、治る。通常の方法ではないが、お前の腕はすっかり元通りだ。では、治療を始めようか」
「お願いします」

＊＊＊＊

「む？」

リビングで待っているシオンは外に異様な気配を感じ取った。人間であることは確実なのだが、その中身、魂というべきものは異様な怪物のように醜く淀んでいた。それが、多数、この小屋に近づいてきていた。それはエメロードも感じていた。

「ふむ、怪しいな。あのクソ王が言ってたあれか？」
『多分そうですね』
「魔眼を狙う者たちだろうな。しかし、この異様な気配はなんだ？」

エメロードに聞いてもわからないと答えた。だが、はっきりしているのは、敵だということだ。シオンが小屋の外に出る。エメロードは邪魔なので、置いてきた。

「ふん、出てきたらどうだ？」

そう言うと、雪の中から男たちが姿を現した。表情はうつろで、皮膚は黒ずんでいる。雪山の中だというのに、彼らが着ている服は薄着だったり、上半身裸であったりと、まったく統一感がなかった。それに、人にあるべき、人らしさというべきものが、何もなかった。

「……」
「何者だ」

一応たずねる。返答が返ってくるとは思っていない。だが、返答は返ってきた。いや、疑問に関する返答かどうかは別にしてだが。

「ヨコセ……、ヨコセ……、マガンヲ……ヨコセ……」

片言で、うわごとのように呟いている。正直言って話が通じる相手ではないだろうことは一目瞭然だった。嘆息し、シオンは剣を抜く。それと同時に、男たちはシオンに跳びかかってきた。

「遅い！」

大剣を振るう。一応剣の腹で殺さないように相手を吹き飛ばす。男たちは軽く数十mは飛んでいった。ほかの残っている男たちは、仲間も気にせずにシオンに襲い掛かる。仲間意識はないことは予想が出来ていたので、驚かずに対処する。それに、吹き飛ばした相手はもう戻ってきていた。気絶させることは出来ないと判断し、そうそうに刃で斬り始めた。

第二十五話　治療

「さて、治療を始めるとは言ったがまずは、お前の腕の状態を確認しておこう。何も知らないのと、知っているのとでは私の力に差が出るからな。さて、お前のが怪我をした事情は聞いたから、次は、どんな具合かだ」
「どんな具合っていうと？」
「感覚的なものだ。どう感じる？」
「まあ、そうだな、どうにも、鈍いな」
「ふむ、そうか」

ノインはレイヴンが言ったことをカルテと思われるものにメモしていく。その表情は真剣なものだ。いつもはふざけているように見えて、仕事となると真剣みたいだ。メモを書き終えるとノインは次の質問に入っていく。それを繰り返していった。

・
・
・

「ふむ、まあ、よくわかった」

質問が終わり、ノインが言った。かなり質問は多かったのと、変な薬も飲まされたため、レイヴンはげんなりしていた。どうしてこんな質問をするのだろうかと思うようなものまであった。それでも全てに答え終えて、ようやく治療かと思っていると、ノインがまだだという。

「まだ、何があるんだよ」
「服を脱げ」
「は？」

こいつはいきなり何を言ってるんだという考えがレイヴンの頭の中を駆け巡る。治療のために脱ぐのなら、こんなことは考えないのだが、ノインが言っている限り治療ではない。そのため、脱ぐ義理もなにもない。それに、レイヴンの危機察知センサーに拒否しろとアラートが鳴り響いている。

「な、なぜ？」

「うむ、やはり、きちんと見れるほうがいいからな」

違うとレイヴンの本能が告げる。ノインの顔はまるで、獲物を見つけた肉食獣のような笑みを浮かべている。そう、獲物を前にして舌なめずりしているようなそんな笑み。ここで、この要求を呑めば確実に何かが終わってしまう。そんな予感があった。

「断る。嫌な予感がする」

「医者の言うことだぞ？　何を怖がる必要がある？」

その医者の発言が怖いんだよとはいえないレイヴン。そもそも、目つきからして異常な医者を怖がるなと言うほうが無理だ。

「いや、その顔が医者のものとは思えないんだよ」

「ふむ、そうだな。ここからは私の趣味だ」

「おい」

「さあ、脱ぐがいい」

手を卑猥にわきわきさせながらレイヴンに近づく。レイヴンは逃げようとしようとした。だが、体が動かなかった。動かなくなっていた。そのまま、ベッドに倒れる。何かの薬だと気がついたのはそのとき。そして、あの質問の時に飲まされた薬が原因だと気がつい

たのはノインの顔を見たときだった。そして、もう既に手遅れだと確信した。

「さあて、お楽しみだ」

ノインは動けないレイヴンの服を慣れたように脱がしていく。本来意識のない人間や、体を動かせない人間の服を脱がせるのは大変だが、それなのにまったく苦労せずにノインは脱がしていった。さすがは医者というべきか。そして、レイヴンの体を眺め回す。それはもうすみずみまで。

「ほほう、中々に良い体をしているではないか。では」

しかし、ノインのもくろみは寸前のところで阻まれる。部屋の外から衝撃が伝わってきたのだ。

「む、この気配は……なるほど、遊んでいる時間はないというわけか。仕方がない、名残惜しいがまあ、生きていればいつかまた出来るか。さて、じゃあ、さっさと治療してしまおうか」

ノインの瞳に白い十字架が生じる。それはまるで全てを救済するための救世主の十字架のようであった。

「さあ、行くぞ、まあ、痛みもなにもないこの神の癒しの天使の瞳（ラファエルの瞳）ならばな」

ノインの魔眼神の癒しの天使の瞳（ラファエルの瞳）。その十字架が輝く。その光は酷くやさしく。安心できる。まるで記憶のない母親の腕の中にあるようであった。レイヴンの意識は闇へと落ちていった。

第二十五話　治療（後書き）

次回はもろもろの事情により更新はお休みです。再来週にまた会いましょう。

幕間

そこは漆黒。
そこは純白。
そこは灰。
三つが入り混じった空間。
再生されるは過去の記憶。
覚醒の記憶。
悪魔の記憶。
思い出すは過去の思い出。
癒しの思い出。
天使の思い出。
刻まれるは現在(いま)。
進む現在(いま)。
立ち止まる現在(いま)。
三つは混じりあう。

混じりあう。

これは夢。

夜道の鴉が見る果てない夢。

そう、夢。

夢、夢。

そこに立つは三人。

一人は漆黒の悪魔。

一人は純白の天使。

一人は灰の鴉。

三人は邂逅す。

目覚めれば覚えていることはない夢の中で。

「よう、オレ」

「久しぶりね」

「ああ、そうだな」

言葉を交わす。

そして、誰かに引き上げられた。

第二十六話　敵

「ふう、あらかた片付いたな」

シオンが呟く。あたり一面の、雪で作られた純白のキャンパスの上には、紅よりも赤い薔薇の花が咲き誇っていた。それはあまりにも美しいとはいえないものであった。しかし、どこか人をひきつける何かがあるようにも思えた。どうしてかと言えば、それは血で描かれた、生きた薔薇の絵だったからだ。生命(いのち)で描かれた薔薇の絵は美しいものであった。

そして同時にそれは動くものがもういないことを如実に語っていた。

「やれやれ、何なんだこの連中は」

横たわっている死体の一つを蹴って仰向けにする。どうにも納得が行かないことがある。仰向けの死体にはいくつもの致命傷の傷がついていた。シオンがつけた傷だ。納得が行かないのは全て致命傷だったのにそれでも死なずに襲ってきた点であった。気絶させてもすぐに襲ってきたことからも全てが納得がいかないことが多い。

「まあいい。そこにいるのは出てきたらどうだ」

「おや？　バレていましたか」

岩陰からメガネをかけた細目の男が現れた。どこか飄々とした雰囲気の男。服装はゆったりとした服を来ている。着物と呼ばれる服装だ。その服装から東方の方の出身と思われる。その男はニヤリと笑って物陰から出て来た。

「バレバレだ」
「おやおや〜？　ああ、なるほど〜」
不思議そうな顔をしたかと思えば男は今度は一人で納得したような顔をした。
「中々面白い体してるね♪」
「……」
茨の杭（ローズステイト）に気がつかれた。普通の人間では気が付くことのない気配に気が付いた。この男、出来る。しかし狙いがわからない。魔眼が狙いならばシオンが戦っているときにそのまま小屋に向かえばよかったのだ。それなのにこの男は向かわなかった。何を考えているのかシオンにはわからない。
「何を考えている」
「フフ、何を、か。さあ、何を考えているのだろうねぇ？」
「ふざけているのか？」
「ふざけてないよ。私はいつでも真面目さあ」
まったく真面目そうでない不真面目な顔で言う男。どうにも胡散臭い。人を小ばかにした態度は嫌でも人の神経を逆なでする。それを意図してやっている。なお性質がわるい。悪すぎる、そして、男の纏っている気。なんともいえない。同じものを感じる。そう、同じものを。
「……」
「ニヒ、あなたが何を考えているのかは私にはわからないけど。面白いねえ。まさか、自分と同じものに出会えるなんて。嫌な任務だったのにここまで来たかいがあった。彼には感謝しなければ」

男はそういうと、男の長い袖から巨大なクナイが出る。大剣をシオンは構える。男から放たれるのは殺気とは程遠いものだが、男が何をするかわからない以上構えなければならない。油断なく構えながら男が何をするのかを見る。

「フフフフ……はい！」

巨大なクナイが鳩になった。いきなりのことで虚をつかれるシオン。男の顔はにんまりとしてやったりと笑っている。

「アハハハ、引っかかったかい？　うん、その様子なら大成功だねえ」

「貴様何を考えている」

「フフフフフ、さあ、何を考えているのだろうねえ？　それは私にはわからないねえ。さてと、ああ、思い出した。そうですよ。宣戦布告でした」

「宣戦布告だと」

「はいぃそうです。宣戦布告です」

口が裂けているのかと思うほどに口角を上げてニヤリと笑う男。何をもってこの男はこんな顔をしているのかシオンには窺い知ることが出来ない。理解できるとも思えない。

「我々は神を喰らう蛇（ヨルムンガンド）。この世界を破壊し創造する者でございます。そのためにまずは、この地にある二つの魔眼をいただきに参上いたしました」

「やはりか」

この男の狙いはレイヴンの魔眼ともう一つ。おそらくあのノイン

が持っているであろう魔眼。

「はい、魔眼は至上ですからねえ。こんな指名手配のおかげで見つけるのも楽でしたし」

「あいつのせいか……」

シエルが出した手配書が余計なことに作用したようだ。帰ったら本気で殴ってやろうとシオンは心に決めて大剣を抜く。この男を今治療中のレイヴンやノインに近づけるわけにはいかない。この場で足止め、出来るのならとどめを刺す。

「おや～？　やるのですか。フフフフ、まあ、当たり前でしょうね」

「当たり前だ。行くぞ！」

シオンは大剣を構え男へと疾駆した。

第二十七話　来る

男はシオンの突撃にただ立っていただけであった。ニヤリと笑い。ただただ自然に立っていた。そんな突撃など意味もないと言わんばかりの態度にシオンはただ強く地を蹴る。避けれるものなら避けてみよと。そんなシオンは勢いを乗せたままに大剣を振るった。

「よっと」

男はそれをワンステップでかわす。軽い動き。そして、そのまま何もすることもなく再びシオンの攻撃を待っている。それに乗る形でシオンは更に大剣を振るう。右に、左に、袈裟に。それらを全て男はワンステップでかわしいなしていく。しかし、攻撃だけはしない。

「お前、何が目的だ」
「ん？　目的は話したはずだけど？」
「違う、なぜ攻撃しない」
「何？　攻撃してほしいんですか？　物好きですねぇ」
「そういうことではない」

なぜかわして攻撃のチャンスはあったのに攻撃しなかったのか。そうシオンは聞いている。明らかにおかしい。戦うものとしてはありえないことだ。ここで殺されて良いと考えているのなら話は別だろうが、それなら避けることすらしないはずだ。ならば、なぜこの男は攻撃しないのか。何かを待っているのだろうか。だとしたら何を待つ必要があるのか。
そこまで考えてシオンは気が付いた。

「あの2人が出てくるのを待っているのか」
「はいぃ、正解ですよ。私は彼らを待っています。何せ、奪うとしても複雑な手順が必要でしてね。彼のように即席で奪えるほど楽ではないのですよ」
「何だと」
「話しませんよ」
「期待していない」

シオンは大剣を構える。話す気がないのなら無理矢理にでも話させる。いつものことだ。息を吸って吐く。

「避けて見せろ！」

魔力を込めて大剣を振るう。大剣が風を纏う。風が付与された大剣の一撃は全てを薙ぎ払い切り裂く。

「はいぃ、避けましょう」

あろうことか男はその風の一撃に突っ込んできた。真正面から。それは自殺行為であった。どこにも逃げ場などない。それに真正面から突っ込んでくるなど狂気の沙汰だ。しかし、男がこれで死ぬはずはないと、シオンの本能は告げている。この男は必ず全てをかわし生き残るであろうと。
そして、その通りになった。

「ほいっ」

男が見せたのはまるで舞であった。男は風に逆らうことなく、風に乗り舞を待っているかのごとく、その流れに乗って、切り裂こうとする風をいなし、大剣の軌跡を少しだけずらして、かわし尽くし

た。全てが見えているかのような避け方であった。シオンが縦横無尽に大剣を振るえば男は縦横無尽にそれをかわした。平行線をたどる勝負

正直なところシオンは気味が悪かった。絡みつくような何かがまとわり付いている。嫌な感触が体を支配する。

「……」

「おや？　おやおや？　どうかなさいましたかぁ？　私としてももう少し遊ばなければならないのですが。ほら、次はこっちですよ」

おかしなことはもう1つある。この男。さっきからシオンを誘導しているような気配もある。何かを誘っているのか。もしくは、これが狙いか。酷く男の思考は読み難いがどうにも後者のような気がシオンはしていた。

確かめるためシオンは大剣を下げた。

「お前私を誘導しているな」

「ありゃ、気が付いてしまいましたか。もう少しで完成するところでしたのに」

そこには巨大な魔法陣が刻まれていた。全てシオンの剣戟が刻んだもの。男はこれを刻ませるためにシオンの攻撃を誘導してたのだろう。そして、これが魔眼を取り除くための魔法陣。

「そうです。正解ですよ。まあ、これはあくまで保険みたいなものですけどね。時間もちょうどよいみたいですし」

ちょうど小屋の中から2つの影が姿を現していた。

第二十七話　来る（後書き）

ようやく更新することが出来ました。
お待たせしました。
相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりそうですが、がんばって更新して行こうと思います。

第二十八話　対話（前書き）

お待たせしました！！。
ようやく更新です！！
いや、本当に申し訳ないです。リアルが忙しかったとは言えここまで更新できないとはまったく思ってませんでした。
クオリティは相変わらずですし、これから先の更新の予定も微妙なところですが、完結までやめる気はないので、これからもよろしくお願いします。

第二十八話　対話

――よう、もう1人の俺。

「……」

よくわからない空間でレイヴンは自分自身と対峙していた。ただし、相手の方は全体的に色が黒い。というより、それとそれに準ずる色で構成されていた。そして、瞳に逆五芒星（リバースペンタクル）が浮かんでいる。そして、相手の声は自分自身の中から聞こえてきていた。

――つれないね。ようやく会えたってののに。いや、久しぶりに会えたってのによ。あのクソ女のせいで封じられてからまともに会うのは久しぶりだ。まったく神の癒しの天使（ラファエルの瞳）の瞳には感謝だな。それのおかげで俺たちは出てこれたんだから。

「お前は何なんだ？」

――言っただろうもう1人のお前だよ。お前もわかってんだろ？

わかっていた。まるで鏡を見ているかのような感覚だ。そして、一体そんな存在が何のようだというのだろうか。自分の中から響いてくる声は気味が悪い。

「……何の用だ」

――へっ、わかってんじゃねえか。俺の用は1つだけだ。俺を使いやがれ。あんな半端なもんじゃなくな、完全にな。そうすれば、こんな世界消せるぞ。お前が憎むこの世界をな。

目の前の自分は言う。いや、自分の中から響かせる。これは自分の声であり、もう1人の自分。これは対話であって、自問自答。己の否定した部分の露呈。これは自分をうつす鏡である。

「憎んでなんてないぞ」

――嘘をつくなよ俺。俺はお前だ。お前のことは俺のことだからな全部わかってるぞ。俺を捨てた親が憎い。孤児院を壊滅させた奴らが憎い。仲間を殺したあの男が憎い。でも、一番憎いのは、その全ての元凶である自分だ。

「おいおい、それはどんな自虐的な奴だよ」

軽く言うレイヴン。そんな答えで逃げている。それを自分は許しはしない。許すわけがない。逃げているのが自分なら、許さないのも自分なのだからわかる。

――認めろよ。お前がまともな人間かよ。こんな眼を持った存在が人間なわけないだろう。なあ、認めちまえよ。楽になるぜ。

「生憎と、何かを認めるとか認めないとか、最初からないんでな」

――フッ、まあいいか。

目の前の自分は立ち上がり、背を向ける。まるで帰るといわんばかりに。

「偉く潔く帰るんだな」

――ああ、今日は話に来ただけだからな。それと言っておく。お前は運命からは逃げられない。お前が捨てられていた理由も、お前が悪魔の使いに守られていた理由も。逃げることなど不可能だ。いずれは俺を受け入れることになる。その時は、お前は俺がもらう。

「やらねえよ」

――フハハハ、それがいつまで言えるのか楽しみだ。もし、お前が俺を使いこなせるのなら、あんなことなど起きはしない。お前には無理だよ。

もう1人のレイヴンは笑いながら言う。そんなことは不可能だと。

「やってみないとわからねえだろ。もしかしたら出来るかも知れねえだろうが」

――希望は持っているがいいさ。そのほうが壊しがいがある。お前が、あいつが、お前の友が目指す世界をこの手で破壊する。その日を待っているがいい。

「させねえよ。そんなこと」

――ククク、楽しみだ。お前が絶望に堕ちる日を待っている。そこで、俺と、私と、僕と、ワタシと、ボクと、妾と、某と、わたしと、わっちと、我と“1つになろう”

いくつもの声がレイヴンのうちから響いてくる。自分の声、女の声、幼い男の声、感情を殺した女の声、酷く無機質な男の声、偉そうな女の声、堅苦しい男の声、ろれつの回らない女の声、方言の混じった女の声、そして、全てを支配する男の声。

溶け合い、混ざり合い、全てを飲み込む。

「くっ！」

――忘れるな。俺はここに居る。俺たちはここにいる。いないように見えてここにいるんだ。忘れるなよ。レイヴン・ナイトロード。

全てが漆黒に覆われて、そして一筋の光でレイヴンは目が覚めた。

第二十八話　対話（後書き）

低クオリティですみません。作者は相変わらずの紙メンタルなので、批評とかはなるべく厳しくないようお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1724n/

鴉の魔術師

2011年10月7日18時18分発行